

平成 25 (2013) 年度

文部科学省スポーツ・青少年局委託事業

青少年国際交流推進事業

日独青少年指導者セミナー B 3 (芸術分野)

「博物館における青少年教育」に関する 日独交流事業報告書2013

平成 26 年 3 月

公益財団法人 日本博物館協会

はじめに

本冊子は、文部科学省スポーツ・青少年局より委託を受けて実施した平成25年度「青少年国際交流推進事業／日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業」に関する報告書である。

日独間の国際交流事業は、次世代を担う青少年の相互交流を図ることを目的として、両国の政府間合意に基づいて昭和47年から実施されてきた。同事業の一つである「日独青少年指導者セミナー」は、主として、青少年の教育指導者の資質の向上と青少年育成の発展を目指して、日本では文部科学省が、ドイツではドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省が、対象となる指導者の活動分野に応じて、各団体に事業を委託して交流を行うものである。平成25年度の「日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）」については、前年度に引き続き、「博物館における青少年教育」をテーマとして実施されることとなり、文部科学省による企画公募を経て、日本博物館協会が受託・実施することとなった。

日本博物館協会では、前年度と同様に、事業検討委員会を設置し、9月には7名の日本人をドイツに派遣するとともに、11月には7名のドイツ人の受け入れを行った。ドイツへの派遣では、ケルンとベルリンを中心に約2週間のプログラムが用意され、博物館の視察や意見交換が行われた。日本での受け入れにおいても、2週間にわたって様々な博物館を訪問し、教育普及活動の現状を視察した。前年度と同じく、派遣も受入も、驚きと発見に満ちた、充実した2週間となった。両国の参加者は博物館教育の重要性を改めて認識するとともに、自国における教育プログラムのあり方を再考し、今後の充実・発展に向けて決意を新たにしようである。

本報告書では、交流事業全体の概要（第1章）、ドイツへの派遣事業（第2章）、日本での受入事業（第3章）について報告し、第4章はドイツ派遣者によるレポートとなっている。昨年度の報告書と併せて、ご活用いただければ幸いである。

平成26年3月

公益財団法人日本博物館協会

目 次

はじめに

第1章 平成25年度事業の概要

1. 平成25年度における日独交流事業の概要 1
2. 関係者名簿 3
3. 協力機関・団体等 4

第2章 ドイツへの派遣事業

1. 派遣事業の概要 5
2. ドイツでの行程 9
3. 行動地図 10
4. 行動記録 11

第3章 日本での受入事業

1. 受入事業の概要 19
2. 日本での行程 21
3. 行動記録 22
4. ドイツ団からのコメント等（評価会より） 31

第4章 ドイツ派遣者のレポート

1. ドイツにおける博物館教育
～平成25年度ドイツ派遣事業に参加して 池内一誠 41
2. ドイツ連邦博物館教育連盟について 加藤由以 45
3. ドイツで訪問した施設等について 48
 - ① ドイツ連邦共和国歴史博物館（ボン） 土肥幸美 49
 - ② ボン美術館 高橋美奈子 52
 - ③ ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館（ケルン） 池内一誠 57
 - ④ 応用芸術博物館（ケルン） 高橋美奈子 60
 - ⑤ ゴーリングゲン産業博物館 井内麻友美 64
 - ⑥ クンストパラスト美術館（デュッセルドルフ） 岡崎智美 67
 - ⑦ ローマ博物館と遺跡公園（クサンテン） 久下 実 71
 - ⑧ ツォレルン炭鉱産業博物館（ドルトムント） 土肥幸美 75
 - ⑨ シュベリー州立博物館 加藤由以 77
 - ⑩ ユダヤ博物館（ベルリン） 土肥幸美 80
 - ⑪ ノイケルン博物館（ベルリン） 井内麻友美 83
 - ⑫ ハンブルグ駅現代美術館（ベルリン） 岡崎智美 88
 - ⑬ 子ども博物館 MACHmit!（ベルリン） 岡崎智美 92
 - ⑭ ベルリンの壁記念センター 池内一誠 95
 - ⑮ 写真博物館（ベルリン） 高橋美奈子 98
 - ⑯ ベルリン国立博物館群 加藤由以 102
 - ⑰ その他
 - ・ シュベリー城 久下 実 106
 - ・ ドイツ連邦議会議事堂（ベルリン） 久下 実 107
 - ・ ペルガモン博物館（ベルリン） 井内麻友美 108

付録

1. 平成25年度「青少年国際交流推進事業」実施に関する企画公募要領 109
2. ドイツ派遣事業参加者募集要項 113

第 1 章 平成 2 5 年度事業の概要

1. 平成25年度における日独交流事業の概要

公益財団法人日本博物館協会では、平成24年度に引き続いて、文部科学省からの委託による「青少年国際交流推進事業／日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣及び受入事業」を実施した。事業のテーマは平成24年度と同様の「博物館における青少年教育」である。

事業の実施にあたっては、事業検討委員会を設置して、社会教育や博物館教育の専門家や平成24年度のドイツ派遣者から助言をいただき、事業の円滑かつ効果的な実施に努めた。また、ドイツ側のカウンターパートであるドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP; Bundesverband Museumspädagogik e.V.）との連絡・調整を密に行いながら、派遣および受入の準備を進めた。派遣事業に関しては、全国の博物館に広く派遣者の募集を行い、事業検討委員会での選考を経て派遣者7名を決定し、事前研修の機会を設けたうえで、9月に15日間の派遣を行った。受入事業に関しては、11月に14日間、ドイツ連邦博物館教育連盟の関係者7名を受け入れ、優れた教育活動を行っている我が国の博物館を訪問し、活動の見学や教育担当者との意見交換などを行った。また、異文化体験の観点から、派遣及び受入の両事業においてそれぞれ1泊のホームステイも行われた。

事業の流れは以下の通りである。派遣と受入の各事業の詳細については、第2章と第3章を、また、ドイツの博物館や教育プログラム等については派遣者のレポート（第4章）を、それぞれ参照いただきたい。

■事業検討委員会の開催（第1回）

平成25年6月3日に第1回検討委員会を開催し、今年度の交流事業の趣旨や、派遣および受入のスケジュールを確認した。ドイツ派遣者の募集方法等については、前年度よりも募集期間を長くし、応募にあたって簡単なレポートの提出を求めることとなった。また、事前研修会については、1泊を前提としてプログラムを組み、内容を充実させることなどが検討された。を行った。

■ドイツ派遣事業参加者の募集

平成25年6月7日付けで、全国約1,100館の博物館に、ドイツ派遣事業参加者の募集要項を送付した。応募の期限は7月16日とし、参加申込書（応募理由の記入欄あり）に、館長推薦書を添付する形で、募集を行った。昨年度よりも余裕をもたせた日程で募集を行ったが、応募者は7名と少なかった。

■事業検討委員会の開催（第2回）

平成25年7月8日に第2回会合を開催し、ドイツへの派遣者7名の選考や、事前研修会の内容について検討を行った。

■ドイツ派遣者の決定

事業検討委員会による選考結果をもとに、本人の意向を確認し、7名の派遣者を決定した。辞退者が1名あったため、事業検討委員の了承を得たうえで、昨年度の次点候補者に参加を打診し、派遣が決定した。派遣者については、所属長への派遣依頼を行った。

■事前研修会の実施

ドイツ派遣予定の7名を対象として、平成25年8月26日（午後）と27日（午前）に事前研修会を実施した。ドイツの学校教育制度や、ドイツ語の基礎知識、ドイツの博物館制度等についての講義のほか、旅行代理店による渡航関係の説明や、派遣者間での話し合いの時間などを設けた。

■ドイツへの派遣

日本からの派遣団7名は、平成25年9月10日から9月23日までの14日間の日程で、ケルン、ドルトムント、シュペリオン、ベルリンを歴訪し、周辺の博物館等を視察訪問した。滞在中のすべてのプログラムは、ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMF）によって準備され実施された。

■日本での受入

9月の派遣と同様に、11月にはドイツから博物館教育関係者7名を日本で受け入れた。期間は平成25年11月11日から11月23日までの13日間（ドイツ発着日を含めると15日間）である。日本でのプログラムは公益財団法人日本博物館協会事務局が主体となって企画・実施した。

■事業検討委員会の開催（第3回）

今年度の派遣および受入の両事業に関する報告を主な議題として、平成25年12月19日に第3回会合を開催した。9月のドイツ派遣事業に団長として参加いただいた九州国立博物館の池内一誠氏にも出席を依頼し、ドイツでの体験や感想について報告いただいた。来年度の事業実施を想定して、プログラムの充実策等について議論が行われた。

2. 関係者名簿（敬称略）

■「博物館における青少年教育」事業検討委員会委員

主査	鈴木 眞理	青山学院大学教育人間科学部教授
委員	可児 光生	美濃加茂市民ミュージアム館長
	後藤 文子	慶應義塾大学文学部准教授
	寺島 洋子	国立西洋美術館学芸課教育・普及室主任研究員
	半田 昌之	公益財団法人日本博物館協会専務理事
事務局	下田 重敬	公益財団法人日本博物館協会事務局長
	守井 典子	公益財団法人日本博物館協会主任研究員

■派遣事業参加者（日本からの派遣団）

池内 一誠	九州国立博物館教育普及室主任研究員	【団 長】
高橋美奈子	山種美術館学芸部長	【副団長】
井内麻友美	葛飾区郷土と天文の博物館専門調査員	
岡崎 智美	横浜美術館主任エデュケーター	
久下 実	広島県立歴史博物館主任学芸員	
土肥 幸美	広島平和記念資料館学芸員	
加藤 由以	社会教育実践研究センター専門調査員 (日本博物館協会特別研究員)	【事務局】

■受入事業参加者（ドイツからの派遣団）

Ms. Beatrix Commandeur	ペーパーミル産業博物館	【団長兼事務局】
Mr. Peter Mesenhöller	ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館	
Ms. Marianne Hilke	クサンテン野外博物館	
Ms. Susanne Ristow	フリーランス・エデュケーター	
Ms. Uta Rinklebe	子ども博物館 MACHmit!	
Ms. Antje Nolte	ベルリン写真博物館	
Ms. Regina Ille-Kopp	ビューティツヒハイム・ビッシンゲン市博物館	

3. 協力機関・団体等

平成25年度日独交流事業の実施に当たっては、当協会会員をはじめとする以下の関係諸機関・団体等の方々より多大なご支援・ご協力を賜った。ここに記して深く感謝申し上げる次第である。

大原美術館

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター

ドイツ文化センター

東京国立博物館

東京都江戸東京博物館

東京都江戸東京博物館分館 江戸東京たてもの園

東京都写真美術館

トヨタ博物館

日本民藝館

広島平和記念資料館

府中市郷土の森博物館

美濃加茂市民ミュージアム

美濃加茂伝承料理の会

目黒区美術館

山種美術館

横浜美術館

(五十音順)

第2章 ドイツへの派遣事業

1. 派遣事業の概要

昨年度と同様に、ドイツへの派遣事業については、派遣者の選定と事前研修会の実施を日本博物館協会が、ドイツ滞在中のプログラムの企画および実施はドイツ連邦博物館教育連盟がそれぞれ担当した。派遣に至るまでの経緯は第1章にて記した。ここでは、ドイツ滞在中のプログラムについて記す。

■実施期間：平成25年9月10日（火）～9月23日（月・祝）（14日間）

上記は日本発着日による。ドイツ滞在は9月22日までの13日間である。

■受入担当団体について：

ドイツ連邦博物館教育連盟（BVMP；Bundesverbandes Museumspädagogik e.V.）は、博物館教育関係者によって組織された連邦レベルの社団法人である。ドイツ連邦青少年文化教育連合会（BKJ；Bundesvereinigung Kulturelle Jugendbildung e.V.）の傘下にあつて、平成24（2012）年度から「博物館における青少年教育」をテーマとして実施される日独交流事業において、ドイツ側のカウンターパートを務める。ドイツ連邦博物館教育連盟に関しては、第4章のドイツ派遣者によるレポートを参照いただきたい。

■連絡担当者および通訳

（連絡担当者）

ドイツ連邦博物館教育連盟

- ・Ms. Beatrix Commandeur / ペーパーミル産業博物館（LVR-Industriemuseum Papiermühle）
- ・Ms. Uta Rinklebe / 子ども博物館（MACHmit! Museum für Kinder）

（日本語通訳）

- ・Ms. Dr. Heike Patzschke

（全行程への付き添い）

- ・Mr. Alexander Jüttke

■日本からの派遣者：

池内 一誠	九州国立博物館教育普及室主任研究員	【団 長】
高橋美奈子	山種美術館学芸部長	【副団長】
井内麻友美	葛飾区郷土と天文の博物館専門調査員	

岡崎 智美 横浜美術館主任エデュケーター
久下 実 広島県立歴史博物館主任学芸員
土肥 幸美 広島平和記念資料館学芸員
加藤 由以 社会教育実践研究センター専門職員（日本博物館協会特別研究員）

【事務局】

■事前研修会の実施

ドイツ派遣予定者7名を対象として、8月26日、27日に事前研修会を実施した。

1日目の講義1と講義2では、ドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）講師の Andreas Löffelholz（アンドレアス・レッフエンホルツ）氏から、ドイツの社会や文化、教育制度についてと、ドイツでの言葉やマナーについての話を伺った。講義は基本的にドイツ語で行われ、Lydia Tanabe（田辺リュディア）さんが日本語への通訳を務めた。二人のドイツ人を迎えて室内の緊張は一気に高まったが、徐々にリラックスした雰囲気となった。博物館とは直接関係の無いドイツの方々の話を聞くことによって、逆に、ドイツで博物館がどのようなものとして認識されているかを垣間見ることができた。講義の後は、旅行代理店の担当者から渡航関係の説明が行われた。最後に、派遣予定者間で研修中の役割分担等について話し合いを行い、池内一誠氏が団長を、また、高橋美奈子氏が副団長を務めることとなった。



2日目は、本事業の検討委員による講義があった。後藤文子氏（慶應義塾大学準教授）からはドイツの博物館について様々なトピックを解説いただいた。可児光生氏（美濃加茂市民ミュージアム館長）からは、昨年度のドイツ派遣事業について具体的に紹介があった。

事前研修会のプログラムについては、次頁のとおりである。

平成25年度日独青少年指導者セミナー「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業

事前研修会 プログラム

日時：平成25年8月26日(月)13:30～8月27日(火)12:30

会場：商工会館7B会議室(所在地:東京都千代田区霞が関 3-4-2)

日時	プログラム
【8月26日】	
13:30	開会 挨拶 公益財団法人日本博物館協会専務理事 半田昌之 文部科学省スポーツ・青少年局 参事官(青少年健全育成担当)付国際交流係主任 柴 亨輔氏
13:40～ (10分)	派遣事業参加者の紹介
13:45～ (15分)	事業説明 公益財団法人日本博物館協会主任研究員 守井典子
14:00～ (1時間30分)	講義1「ドイツの社会や文化、教育制度について」 ドイツ文化センター講師 Andreas Löffelholz氏 (通訳Lydia 田辺さん) * 日本と異なるドイツの社会や文化、教育制度など
15:30～	休憩
15:45～ (1時間)	講義2「ドイツ語及びマナーについて」 ドイツ文化センター講師 Andreas Löffelholz氏 (通訳Lydia 田辺さん) * 簡単な挨拶や数字等、ドイツ語の基礎知識 * 服装、習慣、食事時の注意等
16:45～ (30分)	渡航に当たってのインフォメーション トップツアー(株) 国際旅行事業部ストリームライン新宿支店 * ドイツの気候、電圧、電話のかけ方、旅行中の安全等について * 航空機への液体物持ち込み制限、スーツケースの重量制限等
17:15～ (30分)	参加者間の打ち合わせ * 団長選出 * 帰国後のレポート作成について
【8月27日】	
9:30～ (1時間30分)	講義3「ドイツの博物館について」 慶應義塾大学文学部准教授 後藤文子氏
11:00～ (1時間30分)	講義4「平成24年度のドイツ派遣事業に参加して」 美濃加茂市民ミュージアム館長 可児光生氏
12:30	閉会

■ドイツでの行程：

ドイツでの滞在日数は、12泊13日であった。最初の滞在地はケルンで、同地に6泊し、ボンやゾーリンゲン、デュッセルドルフといったラインラント地方の諸都市を訪問した後、ドルトムントに1泊、さらには北方のシュペリーンに1泊して、最後の4日間はベルリンで過ごした。詳細については、行程表と行動地図、日々の行動記録を参照いただきたい。行動記録の後には、参考資料として、シュペリーンの新聞に掲載された記事と日本語訳を紹介しているので併せてご覧いただきたい。訪問先の博物館等で見聞きした内容については、第4章に、ドイツ派遣者によるレポートとして収録している。

■ドイツでの宿泊先：

- ・ケルン、9/10～9/15

“Motel one Köln Waidmarkt”，Tel-Aviv-Str. 6, 50676, Köln

- ・ドルトムント、9/16

Hotel “Mark Hotel Commerz”，Provinzialstr. 396, 44388, Dortmund

- ・シュペリーン、9/17

Hotel “Elefant”，Goethestr. 39-41, 19053, Schwerin

- ・ベルリン、9/18～9/21

Hotel “Carolinenhof”，Landhausstraße 10, 10717, Berlin

■ホームステイについて：

ベルリン滞在中の土日（9/14～9/15）を利用して、1泊のホームステイが行われた。ホストを務めていただいたのは以下の方々である。ほとんどの方が今年度の交流事業で来日され、日本で再会することとなった。

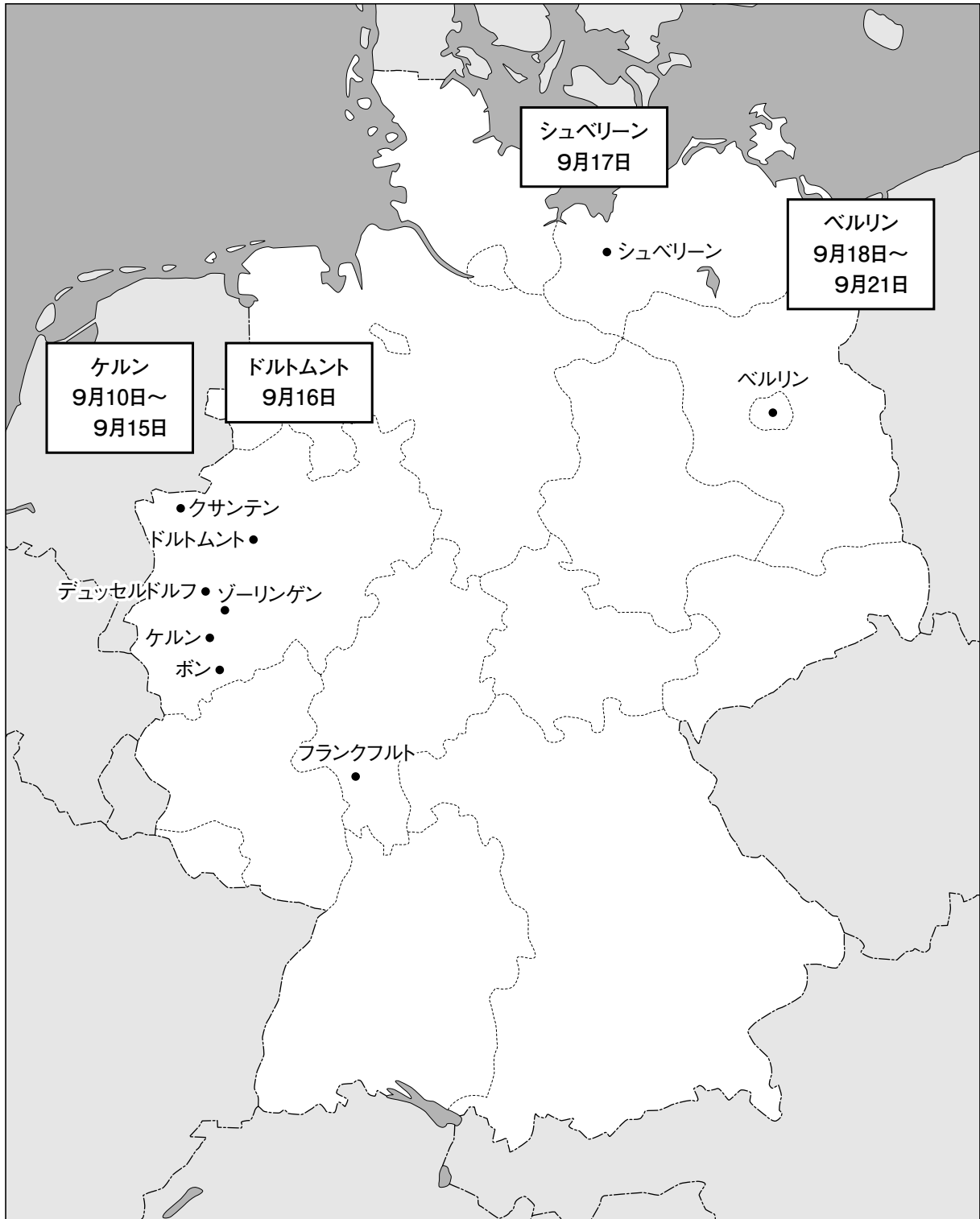
<ホームステイ協力者> 【 】内はゲストとなった日本団員

- ・Ms. Beatrix Commandeur (2012年・2013年来日) 【加藤由以】
- ・Mr. Peter Mesenhöller (2013年来日) 【池内一誠】
- ・Ms. Marianne Hilke (2013年来日) 【井内麻由美、土肥幸美】
- ・Ms. Susanne Ristow (2013年来日) 【岡崎智美】
- ・Ms. Nicole Scheda (2012年来日) 【久下実】
- ・Ms. Heike Patzschke (2012年・2013年通訳) 【高橋美奈子】

2. ドイツでの行程

#	月/日	宿泊地(訪問先)	研修内容
1	9/10(火)		成田発(9:45、LH711便)、フランクフルト着(15:15)
		ケルン	フランクフルトからICEにてケルンへ(ケルン着17:55) ホテルにチェックイン。夕食の後、ドイツ・プログラムの説明会
2	9/11(水)	(ボン)	列車にてボンへ移動 ドイツ連邦共和国歴史博物館の見学 ボン美術館の見学 館内にて夕食の後、列車にてケルンへ
3	9/12(木)	(ケルン)	日本団によるプレゼンテーション(自分たちの博物館について説明) ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館の見学とディスカッション 応用工芸博物館の見学とディスカッション 夕食の後、サーカスを見学
4	9/13(金)	(ゾーリンゲン) (デュッセルドルフ)	列車にてゾーリンゲンへ移動 ゾーリンゲン産業博物館の見学 館内で昼食の後、デュッセルドルフへ移動 クンストパラスト美術館の見学 夕食の後、ライン河畔散策。列車にてケルンへ
5	9/14(土)	(クサンテン)	朝食の後、ホテルをチェックアウト 列車にてクサンテンへ移動 ローマ博物館と遺跡公園を見学 列車にてケルンへ移動、ホストファミリーと対面し、ホームステイへ
6	9/15(日)	(ケルン)	ホームステイ(各ファミリーとの自由行動) ホテルに集合、再チェックインの後、夕食会(ホストファミリーとの送別会)
7	9/16(月)	ドルトムント	ホテルをチェックアウトし、ケルン市内にて自由行動 列車にてドルトムントへ移動 ホテルにチェックインの後、ツォレルン炭坑産業博物館を見学
8	9/17(火)	シュヴェリーン	ホテルをチェックアウトし、列車にてシュヴェリーンへ移動 ホテルへチェックインの後、昼食 州立博物館の見学 シュヴェリーン城ほか、市内を見学の後、夕食
9	9/18(水)	ベルリン	ホテルをチェックアウトし、列車にてベルリンへ移動 ホテルへチェックインの後、昼食 ユダヤ博物館を見学 ベルリン市庁舎を訪問の後、夕食
10	9/19(木)	ベルリン	ベルリン市内観光(バスツアー) ドイツ連邦議会議事堂の見学 ハンブルグ駅現代美術館を見学 ノイケルン博物館を見学
11	9/20(金)	ベルリン	子ども博物館(MACHmit!)を見学 昼食の後、ベルリンの壁記念センターへ フリーランスのガイドツアーに参加
12	9/21(土)	ベルリン	写真博物館を見学 Jugend im Museum e.V.の活動に関する講義 蚤の市にて昼食 ペルガモン博物館を訪問、グラーフ博士らによる講義 博物館島の散策と、最終ディスカッション、夕食
13	9/22(日)		ホテルをチェックアウト、ベルリン空港へ ベルリン発(9:15、LH181便)、フランクフルトへ
		機内泊	フランクフルト発(13:50、LH710便)
14	9/23(月)		成田着(7:50)、解散

3. 行動地図



註： 内は宿泊地及び宿泊日。

4. 行動記録

2013年9月10日(火)

(日本時間)

- 07:45 成田空港集合。
 11:35 成田空港出発(ルフトハンザ航空LH711便)。
 ※使用機材の到着遅れにより遅延。搭乗後、
 設備内の電気設備の不調により遅延。



フランクフルト空港着

(以下、ドイツ時間)

- 15:15 フランクフルト空港到着。
 出迎え: Ms. Beatrix Commandeur (ペーパーミル産業博物館)
 Ms. Dr. Heike Patzschke *通訳(全行程同行)
 17:55 ケルン中央駅到着。
 出迎え: Ms. Regina Ille-Kopp
 (ビュティヒム・ビッゲン市博物館)
 18:30 ホテルMotel One 到着。チェックイン。
 出迎え: Mr. Dr. Peter Mesenhöller
 (ラテンシュトラッセ・フォスト博物館)
 Mr. Alexander Jüttke
 *学生(全行程同行)
 19:30 Em Scheffgeにて夕食。ドイツ側より、滞在中のプログラムについて説明を受ける。
 21:45 ホテル帰着。日本団の打ち合わせ。



夕食風景

2013年9月11日(水)

- 07:50 ホテル出発。列車にてボンへ移動。
 09:35 ドイツ連邦共和国歴史博物館(Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik) 到着。
 対応者: Ms. Dr. Simone Mergen
 11:45 Ms. Dr. Mergenによる講義と全体でのディスカッション。



ディスカッション風景

- 12:50 博物館内のカフェにて昼食。
14:30 ボン美術館 (Kunstmuseum Bonn) 到着。
対応者: Ms. Sabina Lessmann
15:00 Ms. Lessmann による講義と、全体でのディスカッションの後、館内を自由見学。
18:00 美術館内のカフェにて夕食。
20:50 ホテルに到着。日本団によるミーティングの後、解散。

2013年9月12日(木)

- 08:10 ホテル出発。
08:30 ラウテンシュトラウス・ヨースト博物館 (Rautenstrauch-Joest Museum, Köln) 到着。
対応者: Mr. Dr. Peter Masenhöller
09:10 日本団によるプレゼンテーション (自館の紹介など)。

参加者: Ms. Beatrix Commandeur
Ms. Marianne Hilke
Ms. Susanne Ristow
Ms. Uta Rinklebe
Ms. Antje Nolte
Ms. Regina Ille-Kopp,
Mr. Dr. Peter Masenhöller

ドイツ側からも、今年度の訪問先に含まれない2館について、紹介あり。
(Ms. Commandeur, Ms. Ille-Kopp)



ラウテンシュトラウス・ヨースト博物館にて

- 11:10 館内の見学。
13:30 博物館内のカフェにて昼食。
14:55 応用工芸博物館 (Museum für Angewandte Kunst in Köln) 到着。
対応者: Ms. Dr. Romana Breuer
16:25 Ms. Dr. Romana Breuer による講義と全体でのディスカッション。
17:30 früh にて夕食の後、サーカスを見学。
22:50 ホテル到着。解散。

2013年9月13日(金)

- 08:15 ホテル出発。列車にてゾーリンゲンへ移動。
09:45 ザーリンゲン産業博物館 (LVR-Industriemuseum Gesenkschmiede Hendrichs) 到着。

対応者：Ms. Nicole Scheda

12：05 Ms. Schedaによる講義と全体でのディスカッション。

13：00 博物館内のカフェにて昼食。

13：50 デュッセルドルフへ移動。

14：35 クンストパラスト美術館 (Museum Kunstpalast) に到着。



クンストパラスト美術館でのギャラリートーク

対応者：Ms. Dr. Sylvia Neysters

Ms. Susanne Ristow

15：40 Ms. Dr. Neystersによる講義と全体でのディスカッション。

17：30 Ms. Ristowによるギャラリーツアー。

18：30 NRW-Forumにて夕食。

20：30 クンストパラスト美術館でのレセプション・パーティーの様子を見学。

21：00 Ms. Ristowと共にライン川散策。

22：30 ホテル到着。

2013年9月14日(土)

08：30 ホテル出発。列車にてクサンテンへ移動。

11：10 ローマ博物館と遺跡公園 (LVR-Archäologischen Park Xanten, LVR-Römer Museum) 到着。

13：30 博物館内のカフェにて昼食。

14：30 骨や皮を使った工芸品作りを体験。

15：15 ゲームの体験施設 (Römische Spiele) の見学。

15：55 ホームステイへ。日本団のうち、井内と土肥はクサンテン駅にてホストファミリーと対面。岡崎はデュッセルドルフ駅にてホストファミリーと対面。

18：00 他のメンバーは、ホテルにてホストファミリーと対面。それぞれホストファミリーと週末を過ごす。



ローマ博物館にて

2013年9月15日(日)

(ホストファミリーとの自由行動)

- 17:45 ホテルに集合。
18:40 Great-Wall Restaurant にてホストファミリーとの夕食会。
21:30 ホテルに到着。日本団によるミーティング。

2013年9月16日(月)

- 08:30 ホテルをチェックアウト。
ケルン市内にて自由行動。ドームは全体で見学。
12:50 ケルン駅に集合し、列車にてドルトムントへ移動。
15:20 ホテルMark Hotel Commerz に到着。チェックイン。
15:40 ツォレルン炭鉱産業博物館 (LWL-Industriemuseum Zeche Zollern, Dortmund) 到着。
対応者: Ms. Anja Hoffmann
17:20 Ms. Hoffmann によるドイツ連邦博物館教育連盟 (BVMP) に関する講義と、全体でのディスカッション。
18:45 レストランにて夕食。
21:30 ホテル到着。日本団によるミーティング。

2013年9月17日(火)

- 07:30 ホテルをチェックアウト。列車にてシュベリーンへ移動。
12:45 ホテルElefant に到着。チェックイン。
13:00 ホテルにて昼食。
14:30 シュベリーン州立博物館 (Staatliches Museum Schwerin) 到着。
対応者: Ms. Birgit Baumgart
14:40 幼稚園児対象の教育プログラムを見学した後、館内を自由見学。
16:10 Ms. Baumgart による講義と、全体でのディスカッション。
17:05 シュベリーン城の見学。
18:40 市内及び教会の見学。
19:50 ehemaligen herzoglichen Dampfwäscherei にて夕食。
対応者: Ms. Dr. Sylvia Völzer
(メクレンブルク＝フォアポンメルン州教育・科学・文科省)
22:00 ホテル到着。



シュベリーン州立博物館での ディスカッション

2013年9月18日(水)

- 07:30 ホテルをチェックアウト。
列車にてベルリンへ移動。
- 10:45 ベルリンに到着。
出迎え: Ms. Uta Rinklebe
Ms. Antje Nolte
- 11:20 ホテルCarolinenhof に到着。
- 12:40 シュタイナー学校にて昼食。
- 13:40 ユダヤ博物館 (Jüdisches Museum Berlin) 到着。
- 14:00 来館者調査担当者より説明を受ける。
対応者: Ms. Christiane M. Birkert
- 15:10 展示室を見学。
対応者: Ms. Nadja Rentzsch
- 16:20 教育普及活動に関する講義。
対応者: Ms. Sarah Hiron
- 17:40 ベルリン市庁舎到着。
- 18:00 ドイツ連邦青少年文化教育連合会 (BKJ) に関する講義。
対応者: Mr. Lutz Lienke
- 18:50 フリーランスのガイドによるベルリン市庁舎のガイドツアーに参加。
- 21:00 Nea Knossos にて夕食。
- 22:00 ホテル到着。



来館者調査担当者による説明



BKJに関する講義の様子



連邦議会講堂にて

2013年9月19日(木)

- 08:30 ホテル出発。Mr. Lienke と共にベルリン市内のバスツアーに参加。
- 11:00 ドイツ連邦議会議事堂にてガイドツアーに参加。
- 12:30 展望台の自由見学。
- 13:15 文化会館にて昼食。
- 14:30 ハンブルグ駅現代美術館 (Museum Hamburger Bahnhof) 到着。
対応者: Ms. Anne Fräser

- 15:00 Ms. Fräser による講義と、全体でのディスカッション。
- 17:00 ノイケルン博物館 (Museum Neukölln) 到着。
対応者: Mr. Dr. Udo Gösswald
- 20:30 zoo 駅にて夕食。
- 22:00 ホテル到着。



ノイケルン博物館にて

2013年9月20日(金)

- 08:50 ホテル出発。
- 10:00 子ども博物館 (MACH Mit!) 到着。
対応者: Ms. Uta Rinklebe
- 10:50 館内見学 (ワークショップ参加)。
- 11:10 Ms. Marie Lorbeer による講義と、全体でのディスカッション。
- 12:45 博物館内のカフェにて昼食。
- 15:00 ベルリンの壁記念センター (Gedenkstätte Berliner Mauer) 到着。
対応者: Ms. Dr. Sarah Bornhorst
- 16:00 フリーランスガイドによるツアーに参加。
- 16:15 ベルリンの壁記念センターに関する講義と、全体でのディスカッション。
- 18:30 レストランにて夕食。
- 21:30 ホテル到着。

2013年9月21日(土)

- 08:50 ホテル出発。
- 09:30 写真博物館 (Museum für Fotografie) 到着。
対応者: Ms. Antje Nolte
- 10:30 Mr. Dr. Derenthal による展示解説。
- 10:40 Ms. Nolte による概要説明 (写真博物館及びベルリン国立博物館群について)。
- 11:00 Ms. Katrin Boenke による講義 (Jugend im Museum e.V. の活動について) と、全体でのディスカッション。
- 11:45 写真に関するワークショップを体験。



写真博物館でのワークショップ体験

- 13:20 蚤の市にて昼食。蚤の市を見学。
- 14:30 ペルガモン博物館 (Pergamonmuseum) 到着。
- 15:30 フリーランスによるガイドツアー。
- 16:00 施設の自由見学。
- 16:10 Ms. Dr. Heike Kropff (Staatliche Museen zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz)、及び、Mr. Dr. Bernhard Graf (Institut für Museumskunde/ Staatliche Museen zu Berlin) による講義と全体でのディスカッション。
- 17:50 博物館島の散策。
- 18:30 レストランにて最終ディスカッション。
- 20:30 夕食。
- 23:40 ホテル到着。



ドイツでの最終ディスカッション

2013年9月22日(日)

- 06:30 ホテルをチェックアウト。
- 06:45 ベルリン空港到着。
- 09:15 ベルリン空港出発。
(レフトハンザ航空 LH181 便)
- 13:50 フランクフルト空港にて乗り継ぎ。
(レフトハンザ航空 LH710 便)

(以下、日本時間)

2013年9月23日(月)

- 07:50 成田空港着。解散。

《参考資料》

シュペリーンの新聞 Schweriner Volkszeitung 紙 (2013年9月20日刊) の記事

Besuch aus Fernost im Museum

Sieben japanische Kunsthistoriker lassen sich das museumpädagogische Programm vorstellen

ALTSTADT Die Kinder der Kita Schlossgeister lassen sich von den neugierigen Blicken der japanischen Gäste nicht stören und beantworteten schnell und sicher die Fragen von Museumspädagogin Birgit Baumgart. Die Besucher aus Fernost sind auf Einladung des Staatlichen Museums in Schwerin, seit zwei Jahren besteht eine Kooperation zwischen dem deutschen Bundesverband Museumspädagogik und dem japanischen

Museumsverband. Baumgart war selbst im vergangenen Jahr nach Fernost gereist. In zwei Wochen regen Austauschs werden in Schwerin Themen wie Barrierefreiheit, frühkindliche Bildung und Arbeit mit Menschen mit Behinderung vorgestellt und diskutiert. Baumgart präsentierte mit der Kindergarten-Gruppe, wie sie die Kleinsten für die Bilder begeistern kann. Vor allem der Oudry-Saal mit den Gemälden exotischer

Tiere lässt die Kinder staunen. Nashorn Clara hat es auch den japanischen Gästen angetan. So befinden sich sieben kleine „Claras“ im Gepäck der Besucher als Andenken an Schwerin.

Das internationale Austauschprojekt soll aber nicht nur auf die Theorie beschränkt bleiben. Den Beteiligten schweben gemeinsame Programme mit Kindern und Jugendlichen beider Länder vor.

hsch



Die Kinder der Kita Schlossgeister sind begeistert von den gemalten, exotischen Tieren.

SSW_L0K2_A-16

(日本語訳)

極東の国から美術館訪問

7人の日本人美術史家が美術館教育普及プログラムを見学

[アルトシュタット (旧市街)] シュロスガイスター幼稚園の子どもたちが、7人の日本人の興味津々な眼差しに囲まれながら、美術館エデュケーターの Birgit Baumgart 氏の質問に、素早く、そしてしっかりと受け答えしている。この極東の国の訪問者たちは、2年前から始まったドイツ博物館教育連盟と日本博物館協会の連携事業を通じて、シュペリーン市美術館に招かれた。Baumgart 氏自身も過去にこの極東の国に派遣されたことがある。2週間の交流プログラムの中で訪れたシュペリーンでは、バリアフリー、早期の子どもの教育 (Bildung)、障がい者の取組が紹介され、ディスカッションが行われた。まず Baumgart 氏は、小さな子どもがいかにか絵画に感動し得るかを、幼稚園のグループとの実践をとおして紹介。とりわけ異国の動物たちの絵が複数展示されているオードリールホールは子どもたちを驚かせた。サイの Clara は日本人の訪問者たちをも驚かせた。7頭の小さな「Clara」(人形) は訪問者たちのバッグに、シュペリーンの思い出として納められた。

この国際的な交流プロジェクトは理論だけにとどまらない。二国間で今後子どもや青年に関する共同プログラムも構想されている。

(写真キャプション)

シュロスガイスター幼稚園の子どもたちが、描かれた異国の動物たちに感動している様子

【翻訳協力：岡崎智美／横浜美術館】

第3章 日本での受入事業

1. 受入事業の概要

日本での受入事業については、ドイツ連邦博物館教育連盟（B V M P）に所属する博物館教育関係者7名を対象として、日本博物館協会が企画し実施した。昨年度の受入事業での反応やコメントを踏まえて、日本の博物館における教育普及活動の現状をよりよく理解し、また、日本人の生活や文化にも触れられるよう工夫した。

プログラム終盤の「評価会」では、ドイツ団と日本団の双方から本年度の交流事業についての意見交換を行ったほか、ドイツ側のプレゼンテーションに基づいて、博物館教育に関わるボランティアの質の維持や、ボランティアとフリーランスの違い等についてディスカッションを行った。内容については、本章第4項にて「ドイツ派遣団からのコメント等」として詳述する。

■実施期間：平成25年11月10日（日）～11月24日（日）（14日間）

上記はドイツ発着日による。日本での滞在は11月11日から23日までの13日間である。

■ドイツからの派遣者：

- ・ベアトリクス・コマンデア（Ms. Beatrix Commandeur）／ペーパーミル産業博物館
- ・ペーター・メーゼンヘラー（Mr. Peter Mesenhöller）
／ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館
- ・マリアンネ・ヒルケ（Ms. Marianne Hilke）／クサンテン野外博物館
- ・スザンネ・リットウ（Ms. Susanne Ristow）／フリーランス・エデュケーター
- ・ウタ・リンクレーベ（Ms. Uta Rinklebe）／子ども博物館MACHmit!
- ・アンチェ・ノルテ（Ms. Antje Nolte）／ベルリン写真博物館
- ・レギーナ・イルコップ（Ms. Regina Ille-Kopp）
／ビューティツヒハイム・ビッシンゲン市博物館

■ドイツ語通訳：岡本美枝氏

■引率等：

日本博物館協会の職員が分担して引率役を務めた。今年度及び前年度のドイツ派遣者の方々には交代でほぼ連日、ボランティアとして同行いただき、協会職員をサポートしていただいた。

■日本での滞在先：

宿泊したホテルの名称および所在地は以下のとおり。

- ・ダイヤモンドホテル（東京都千代田区麹町 1-10-3）
- ・チサンホテル広島（広島県広島市中区幟町 14-7）
- ・倉敷国際ホテル（岡山県倉敷市中央 1 丁目 1 番 44 号）
- ・名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市犬山北古券 107-1）

■ホームステイについて：

昨年度と同様に、日本の生活・文化を体験することを目的として、1泊のホームステイを実施した。ホストファミリーとしてご協力いただいたのは、以下の6名の方々である。11月16日（土）の夕方にドイツ団と対面していただき、各家庭にご案内いただいた。11月17日（日）は、朝から各家庭で工夫を凝らしたもてなしが行われた。夕方には全員に集合いただいて、ホストファミリーとの送別会を催した。

（ホームステイ協力者） 【 】内はゲストとなったドイツ団員

- ・井内麻友美氏（葛飾区郷土と天文の博物館、2013年派遣者） 【ヒルケ氏】
- ・一條彰子氏（東京国立近代美術館、2012年派遣者） 【マーゼンヘラー氏】
- ・大木真徳氏（駒澤大学非常勤講師） 【リンクレーベ氏とコマンデア氏】
- ・岡崎智美氏（横浜美術館、2013年派遣者） 【リットウ氏】
- ・木村知之氏（相模原市立博物館） 【ノルテ氏】
- ・猿渡紀代子氏（横浜美術館特任研究員） 【イルコップ氏】

2. 日本での行程

	月日	曜	訪問先等	宿泊地
1	11月10日	日	ドイツ出国	(機内泊)
2	11月11日	月	成田着 (17:20、ドバイ経由、EK318便) バスにてホテルへ移動。ホテルチェックインの後、歓迎会	東京
3	11月12日	火	東京国立博物館訪問 (日本博物館協会会長への表敬訪問を含む) 館内レストランにて昼食 社会教育実践研究センター訪問 (プログラム説明とドイツ団によるプレゼンテーション) アメヤ横町散策と夕食	東京
4	11月13日	水	江戸東京たてももの園訪問 府中市郷土の森博物館訪問 ホテル周辺にて夕食	東京
5	11月14日	木	山種美術館訪問 東京都写真美術館訪問 (フォトグラムのワークショップを体験) 歌舞伎座にて仮名手本忠臣蔵を鑑賞	東京
6	11月15日	金	日本民藝館訪問 目黒区美術館訪問 (昼食を含む) ホテル周辺にて夕食	東京
7	11月16日	土	横浜美術館訪問 夕方からホームステイ	(東京)
8	11月17日	日	ホームステイ 夕食はホテル内中華レストランにてホストファミリーとの送別会	東京
9	11月18日	月	新幹線にて広島へ移動 平和記念資料館訪問	広島
10	11月19日	火	倉敷へ移動 大原美術館訪問 (美観地区の散策を含む)	倉敷
11	11月20日	水	名古屋へ移動 トヨタ博物館訪問 (学校団体への対応についての見学を含む) バスにて犬山へ移動、犬山城と木曾川を見学	犬山
12	11月21日	木	バスにて美濃加茂へ移動 美濃加茂市民ミュージアム訪問 (学校団体への対応についての見学を含む) 東京へ移動	東京
13	11月22日	金	評価会 (日本プログラムを含む本年度交流事業の総括とディスカッション) 江戸東京博物館の自由見学ののち、両国にて送別会	東京
14	11月23日	土祝	終日、自主研修 20時にホテルにて集合の後、バスで羽田空港に移動 羽田発(11月24日午前1:30、EK313便)	(機内泊)
15	11月24日	日	ドイツ着	

3. 行動記録

2013年11月10日(日)

フランクフルト発、ドバイ経由 (EK318 便)

2013年11月11日(月)

夕刻、成田空港でドイツ団を出迎えた後、半蔵門のホテルへ移動し、日本博物館協会職員による歓迎会を行った。

17:30 成田着 (第2ターミナル)

18:30 到着ロビーにてドイツ団と顔合わせの後、貸し切りバスで半蔵門へ移動。
車中にてオリエンテーション。

19:50 ホテル着 (ダイヤモンドホテル)

20:30 ホテル近くの九州料理店にて歓迎会。

22:30 ホテル帰着。

2013年11月12日(火)

日本での実質的な第一日目にあたるこの日は、日本博物館協会会長への表敬訪問を兼ねて、東京国立博物館を訪問した。午後は、近接する社会教育実践研究センターの会議室をお借りして、プログラム説明会を行った。説明会には、事業検討委員や、今年度と前年度のドイツ派遣者が参加し、ドイツ団メンバーによるプレゼンテーションを拝聴した。7名の団員がそれぞれの館の教育活動等を紹介するこのプレゼンテーションは、本年度のドイツ派遣の事業でドイツ側の発案で初めて試みられたものであり、好評だったことから日本での受入においても実施したものである。

説明会の後は、前年度と今年度のドイツ派遣者有志数名が同行してアメヤ横町に繰り出し、改めて歓迎の夕食会を持った。

10:00 東京国立博物館を訪問。
銭谷眞美館長 (日博協会会長) による歓迎の挨拶と栗原祐司総務部長による同館の概要説明の後、鈴木みどり



東京国立博物館にて“さわる館内案内図”を見学

ボランティア室長より、青少年向けの教育普及活動に関する説明を受け、館内の教育普及関連施設・設備を見学した。

- 12:00 レストランゆりの木にて昼食。15時まで、京都展ほか館内を自由見学。
- 15:15 社会教育実践研究センターへ移動。
- 15:30 山本裕一センター長による挨拶の後、プログラム説明会。ドイツ団によるプレゼンテーション（各5分×7人）や、日本プログラムの意図の説明などを行う。
- 18:00 上野・アメヤ横町の散策と夕食。
- 21:00 ホテル帰着。



プログラム説明会

2013年11月13日（水）

この日から、1日につき2館のペースで東京周辺の博物館を見学することとなる。この日は、東京都江戸東京博物館の分館である江戸東京たてもの園（武蔵小金井市）と、府中市郷土の森博物館を訪問した。

たてもの園では、園内見学の合間に、民家の軒先等でボランティアの方々が展開されているかざぐるまやプレスレット作りの小工作を体験することができた。府中市郷土の森博物館では平成20年度のリニューアルで誕生した「こども歴史街道」や「体験ステーション」といった展示を一通り体験することができ、また、敷地内の民家等の見学では同館名物の「ハケ上だんご」によるもてなしを受けた。



江戸東京たてもの園にてかざぐるま作り

- 9:30 江戸東京たてもの園訪問。
小林克園長の英語による歓迎スピーチと概要説明の後、高橋英久学芸員から同園の教育普及活動について概要説明を受けた。園内の見学では、早川典子学芸員に同行いただいた。
- 12:00 園内カフェ「武蔵野茶房」にて昼食。



府中市郷土の森博物館の「こども歴史街道」

- 13:00 府中へ移動。
14:00 府中市郷土の森博物館訪問。
小野一之館長と深澤靖之学芸係長から同館の教育普及活動について説明を受けた後、常設展示室や館外の展示（民家等）を見学。
17:00 ホテルへ移動。
19:00 夕食。

2013年11月14日（木）

この日は、山種美術館と東京都写真美術館を訪問し、夜は日本文化への理解を深めてもらう目的で、歌舞伎鑑賞を行った。山種美術館では、日本画の素晴らしいコレクションを見学することができ、また、収蔵作品にちなんで企画されカフェで提供されている和菓子をふるまっていた。ドイツ団からは、教育普及専用の施設や設備が無いなかで、どのようなプログラムが可能であるか様々なアイデアが出された。東京都写真美術館の訪問は、ドイツ側の要望を受けて行ったものである。学校団体向けの暗室を使ったワークショップ「現像体験—フォトグラム」を体験することができた。

- 10:00 山種美術館訪問。
高橋美奈子学芸部長やスイス人ボランティア Mrs. Pidoux さんから同館の教育プログラムについて説明を受けた後、展示室を見学。山崎妙子館長より歓迎の挨拶があり、茶菓をいただきながら懇談。
12:30 徒歩にて移動。途中の和食店で昼食。
14:00 東京都写真美術館訪問。
石田哲朗学芸員から同館のスクールプログラムについての説明を受けた後、武内厚子学芸員や助手の方々のサポートのもと、フォトグラムのワークショップを体験。
17:30 東銀座へ移動
18:30 歌舞伎座にて「仮名手本忠臣蔵」を鑑賞。



山種美術館にて山崎館長と懇談



写真美術館でワークショップ後、作品発表

21:30 ホテル帰着。

2013年11月15日(金)

この日は目黒区内の2施設を訪問した。日本民藝館と目黒区美術館である。目黒区美術館については昨年度の事業でも訪問し、大変好評だったことから、今年度も訪問先に選ばせていただいた。日本民藝館の訪問については、目黒区美術館からの推薦によるところもあり、解説を付さない展示方法など、独自の見識をもって運営されている同館の存在をぜひドイツのエドゥケーターに紹介したいという意図を持っての訪問となった。博物館における教育活動を考える上で、大きな刺激となったと思われる。目黒区美術館では昨年同様、ワークショップ室で食事をとらせていただき、和気藹々とした雰囲気の中で説明やディスカッションが行われた。

10:00 日本民藝館訪問。

白土慎太郎学芸員による概要説明の後、まずは本館の自由見学を行う。再度集合した後、西館（旧柳宗悦邸）をご案内いただいた。



日本民藝館2階ホールにて概要説明

12:00 移動。

13:00 目黒区美術館訪問。

ワークショップ室にて昼食の後、降旗千賀子学芸係長より、同館におけるワークショップの取り組みや「引き出し博物館」について説明を受け、質疑応答やディスカッションを行った。



目黒区美術館でのディスカッション

17:30 ホテルへ移動。

19:00 夕食。

2013年11月16日(土)

この日はエクスカージョンを兼ねて横浜まで足を伸ばした。2館ずつの訪問が続いたあとだったこともあり、終日リラックスした雰囲気でも過ごし、夕方からはホームステイとなった。横浜美術館では、学校団体への対応の様子を直接見学することは出来なかったが、子どものアト

リエにおいて前日に特別支援学級の受け入れがあったため、片付ける前の状態を見せていただき、また、実際に使用されたツール等を使って追体験をすることが出来た。

10:30 横浜美術館訪問。

子どものアトリエにて逢坂恵里子館長による歓迎の挨拶の後、主席ワークショップコーディネーターの山崎優氏から子どものアトリエの活動について説明を受け、様々なツールを体験。



横浜美術館・子どものアトリエにて

12:30 館内カフェにて昼食。

13:00 市民のアトリエについて教育普及グループ長の関淳一氏による説明と見学。

次いで、主任ワークショップコーディネーターの岡崎智美氏から障がい者を対象とする取り組みを中心に説明を受ける。

15:00 自由見学。

16:00 ホストファミリーと対面の後、ホームステイへ。ドイツ団7名のうち、5名は横浜美術館にて対面。2名は東京まで戻り、ホストの最寄り駅にて対面。

2013年11月17日(日)

夕方までホストファミリーと自由に過ごした後、全員がホテルに再集合し、ホテル内の中華レストランにて夕食会（ホストファミリーとの送別会）を行った。夕食会では、それぞれのホームステイの様子が披露された。



ホストファミリーとの夕食会

17:45 ホテル集合。

18:00 ホストファミリーとの夕食会（ダイヤモンドホテル内「金剛飯店」）

21:00 解散。

2013年11月18日(月)

日本でのプログラムの後半では、東京を離れて、広島、倉敷、犬山に宿泊し、各地の博物館を訪問することとした。広島行きはドイツ側からの強い要望によるものであり、昨年度に引き

続いて、日本の平和教育について理解してもらうことと、博物館の教育普及活動には修学旅行への対応という側面もあることを知ってもらうことを目的として、広島平和記念資料館を訪問した。

- 07:30 ホテルをチェックアウト。
- 08:10 東京駅から新幹線にて移動。
- 12:10 広島着。
- 13:00 広島国際会議場にて昼食。
- 14:00 広島平和記念資料館訪問。
音声ガイドを利用して館内を自由に見学。
- 16:00 会議室にて志賀賢治館長より歓迎の挨拶があった後、啓発課課長補佐の河村千鶴子氏ほか職員から概要説明や被爆体験者との交流、意見交換を行う。
- 17:30 土肥幸美学芸員の案内により、爆心地等を経由しつつホテルまで散策。
- 19:00 夕食。



広島平和記念資料館のスタッフと意見交換

2013年11月19日(火)

大原美術館の訪問は、昨年度に続いて2度目となった。今年度は展覧会の初日に重なったため、先に館内を自由に見学させていただき、午後に概要説明やディスカッションを設定した。観光客で賑わう美観地区の散策も楽しむことができた。

- 08:00 ホテルをチェックアウト。広島駅へ移動。
- 08:49 広島駅より新幹線等で倉敷へ。
- 09:55 倉敷駅着。ホテルへ移動。チェックイン。
- 10:30 大原美術館訪問。
学芸課長の柳沢秀行氏によるオリエンテーションの後、館内を自由見学。
- 12:00 美観地区にて昼食と散策。
- 14:00 大原美術館に再度集合し、同館専務理事の大原あかね氏も同席のもと、柳沢氏より同館の事業に関する説明を受け、ディスカッションを行う。



大原美術館にて記念撮影

17:00 ホテルへ移動。

18:30 夕食。

2013年11月20日(水)

昨年度のドイツ派遣事業参加者の勤務先ということで、トヨタ博物館と、翌日の美濃加茂市民ミュージアムを訪問させていただいた。トヨタ博物館では、短い滞在時間にもかかわらず、小学校の団体に対してドイツ製の古い自動車を実際に動かして見せる様子を見学させていただいた。前日の大原美術館とあわせて、私立館ならではの事業のあり方を考える良い機会となった。夜は犬山に宿泊した。ドイツ・ラインラント地方からやってきたドイツ団一行に、「日本ライン」の別称を持つ木曾川の景色を見てもらい、駆け足であったが犬山城も見学し、ホテルでは「温泉」を体験してもらった。

07:45 ホテルをチェックアウト。倉敷駅へ。

08:11 倉敷駅発。岡山駅で新幹線に乗り継ぎ、名古屋へ。

10:18 名古屋駅着。マイクロバスにて長久手へ移動。

11:00 トヨタ博物館訪問。藤井麻希学芸員(2012年ドイツ派遣者)による学校団体への説明の様子を見学。

11:45 杉浦孝彦館長とともに昼食。
食事をとりながら同館の教育普及活動について説明を受ける。

13:00 館内見学とディスカッション。

15:30 マイクロバスにて犬山へ移動。

16:30 犬山城見学

17:30 ホテルへチェックイン。

18:30 夕食。



トヨタ博物館にて学校団体への対応を見学

2013年11月21日(木)

美濃加茂市民ミュージアムは、学校団体に対するきめ細かな対応ぶりに定評があり、今回の訪問でも、複数の学校団体への対応の様子を間近に見学することができた。昼食は、同館の「伝承料理の会」による手作りの郷土料理ということで、古い民家での調理も体験することができた。概要説明や昼食時には美濃加茂市の藤井浩人市長も同席されて、ドイツ団をもてなしていただいた。ドイツ団にとっては、きわめて印象深い一日になったことと思う。

- 07:45 ホテルをチェックアウト。マイクロバスにて美濃加茂へ。
- 08:30 美濃加茂市民ミュージアム訪問。可児光生館長（2012年にドイツ派遣）の案内で館内を見学。学校団体の到着時には、対応の様子も間近で見学した。
昼食準備の準備に参加した後、市長同席のもと、同館の概要説明と質疑応答。
- 12:00 森の中に移築された民家の居間にて、
昼食（美濃加茂地区の伝承料理）。
館内施設等の見学。
- 14:00 タクシーにて美濃太田駅へ移動。
美濃太田駅より名古屋を経由して東京へ。
- 17:03 東京到着。半蔵門へ移動。
- 17:45 ホテルにチェックイン。
- 18:30 夕食。



美濃加茂市民ミュージアムにて

2013年11月22日（金）

日本での博物館訪問をすべて終えて、評価会を迎えた。事業検討委員や今年度及び前年度のドイツ派遣者に参加を呼びかけ、多くの関係者にご参集いただいた。ドイツ団は前日の移動や夕食の時間を利用して入念に打ち合わせを行っていたが、当日は多様な観点から貴重なコメントを多数頂戴することができた。午後のプレゼンテーション及びディスカッションも、2年にわたった交流事業の成果を感じさせる、非常に有意義なものとなった。

- 09:00 ホテル出発。徒歩にて霞が関（商工会館）へ。
- 10:00 半田昌之専務理事の司会・進行により、今年度の交流事業に関する評価会を実施。
- 13:00 昼食。
- 14:00 ドイツ団によるプレゼンテーションとディスカッション。
- 15:30 両国へ移動。
- 16:15 江戸東京博物館見学（自由見学）
- 18:00 送別会
- 21:30 ホテル帰着。



評価会の様子

2013年11月23日（土・祝）

日本滞在の最終日は、終日、自主研修とした。ドイツ団7名のうち、5名はグループ行動をとり、浜松町の旧芝離宮恩賜庭園を見学の後、水上バスで浅草方面へ移動し、最後は上野公園に立ち寄るなど、東京観光を満喫したようである。他2名はそれぞれに東京都現代美術館や東京国立近代美術館を訪問し、知人に会ったり、展示を見学したとのことだった。ホテルから羽田空港へ向かうバスの中では、ドイツ団が誰からともなく歌い始め、最後にはドイツ民謡の大合唱となった。

- 09：00 ホテルをチェックアウト。自主研修へ。
- 20：00 ホテルに集合し、マイクロバスにて羽田空港へ。
- 20：30 羽田空港着。空港内で夕食。
- 23：30 搭乗手続き終了。

01：30（11月24日）

エミレーツ航空EK313便にて帰国。

4. ドイツ団からのコメント等（評価会より）

日本プログラムの終盤、自主研修から帰国となる前日（平成25年11月22日）、商工会館7階会議室を会場として、日本プログラムを含む本年度の日独交流事業全般に関する「評価会」を実施した。前年度は時間が足りず十分な議論ができなかったため、今年度は10時から15時までの設定とし、10時から13時までを事業の感想やコメントの発表に充て、昼食をはさんで14時から15時までの1時間はドイツ団のプレゼンと、それに基づくディスカッションを行うこととした。日本側からは、事業検討委員3名（鈴木、後藤、可児）と、今年度及び前年度のドイツ派遣事業参加者7名（池内、高橋、井内、岡崎、土肥、加藤、藤井）、日本博物館協会職員2名（半田、守井）が出席した。

午前の評価会では、初めに派遣団を代表してベアトリクス・コマンデア氏が日本プログラム全体について感想や意見を述べた後、残りの団員が2名ずつペアになって、3つの観点から感想や意見を述べた。コーヒープレイクの後、ドイツ派遣事業に参加した日本人にもそれぞれ一言ずつ、感想や意見を述べてもらった。

午後はアンチェ・ノルテ氏とマリアンネ・ヒルケ氏によって短いプレゼンテーションが行われ、博物館教育者（エデュケーター）やボランティアの質を維持するための規準や研修について議論となり、日本のボランティアとドイツのフリーランスの違いについて理解を深めることとなった。

ドイツ団によるコメント等と、ディスカッションの概要は以下のとおりである。

* * *

午前の部から— ドイツ団からのコメント

■日本プログラム全体について：ベアトリクス・コマンデア

今年も内容の濃い、素晴らしいプログラムを体験できた。昨年もそうだったが、あらゆる角度から日本の博物館を見られるように配慮していただいた。大規模館、小規模館、私立館、公立館、美術館、工芸館、産業博物館など多岐にわたる分野を見ることができた。各訪問先で、その館の教育普及担当者や学芸員と交流を持つことができたのは素晴らしかったが、それ以上に、昨年および今年の日本団の面々と再会でき、交流できたのは本当に素晴らしかった。また、移動中や食事の時間に、ドイツ団だけでなく、そこにいる人たちといろいろな議論をした。見学によって刺激を受けた後なので、いつも議論をしていたと思う。

今日は時間の都合があるので、3つの内容について、重点的に話をしたい。まず、①若年層をいかに博物館に呼び込むか、それには新しいテクノロジーがいかに役立つかについて。次に、②博物館でのインタラクティブな活動にはどのようなものがあるかについて。最後のテーマは、③世代を超えた博物館教育—ボランティア活動を含む、交流の場としての博物館活動の魅力について話す。

■博物館に若年層（15～22 歳）をいかにして呼び込むか、それには新しいテクノロジーがいかに役立つか：ペーター・メゼンヘラー、スザンネ・リットウ

（ペーター）先ほど後藤さんより、絵は頭で見るものでなく、心で見るものだという恩師の言葉がドイツ留学で印象にのこっていると伺った。素晴らしいことだと思うが、その一方で私たちは、博物館教育にたずさわる者として、心を開くためのアプローチをしなければならないという課題がある。そういった意味で重要なのは、博物館教育者が来館者とどういったコミュニケーションをとっていくのかということ。日本もドイツも同じような問題をかかえていることをこの2週間で学んだ。ドイツではやはり、12歳から25歳の青少年や若者を博物館に呼ぶのは非常に困難であるというのが常に議論のテーマになっている。博物館教育にたずさわる者として、若者がどういったコミュニケーションツールを使っているかを知らなくては行けない（私たちはもう25歳ではないので）。若い人がどういったコミュニケーションツールを求めているか、あるいは博物館としてどういったコミュニケーションの手立てを提供できるか、ということを考えなくては行けない。その中で今後は2つのことを注視すべきであると思う。

一つ目は、若者が日常的に使っている電子メディアやソーシャルメディアを博物館にもっと取り入れていくといくこと。電子メディアには2種類あり、若者が日常的に使っているソーシャルネットワークのようなソーシャルメディアと、博物館内のインタラクティブメディア（対話型、双方向型メディア）。博物館や美術館における伝統的なコミュニケーションの方法は、例えば展示品、絵画があって、それが送信側とすると、受け取り側である来館者がその前に立ち、そこでコミュニケーションが行われる。絵や展示品から発信されたものを来館者が受け取るという、かなり一方向的な、個人的なやりとりで、発信されたものに対して受信側である来館者は反応ができないという状況である。そこにソーシャルメディアをうまく取り込んで行けば、コミュニケーションが双方向的になるのではないかと考える。今の時代の若者は、自分から発信したい、自分で考えたことや印象を他の人に言いたいという要求が非常に強いので、そういったコミュニケーションツールを使っていくことで来館者を増やしていけるのではないかと考える。ソーシャルメディアについては、スザンネに少し話をしてもらおう。インタラクティブメディア（双方向メディア）については、また私から後ほど話す。

(スザンネ) 私の印象では、日本はハイテクが進んだ技術国家というイメージだった。今まで見てきた中でも、ドイツより日本の方が技術（テクノロジー）に触れる機会というのが多く、また技術に触れやすい環境であると感じた。ドイツはそういった意味では少し遅れている。

今は誰でも携帯電話などを持つ時代になった。将来的には、美術博物館といえどもこういったソーシャルメディアを通じたコミュニケーションを無視できない状況になると思われる。そういった意味で、Facebook や Twitter を活用するのは非常に有効なのではないか。それらを利用することで、博物館はもっと存在感を増すことができるし、例えば博物館のマーケティングを、外部の専門家に任せるのではなく、キュレーターや博物館教育者が自ら、博物館をどのようにアピールしていくかというマーケティングに取り組むことができる。

感覚に訴えて、それによってアクションやコミュニケーションを起こすことは非常に重要だと思う。なぜなら美術博物館は感覚で体験する場だからである。デジタルな世界と博物館教育をつなぐインターフェイスとして、電子メディアを使うことが考えられる。例えば、ミュージアム・コンペティションをやるというもの。実際に博物館の中でやるのではなく、ネット上でやる。どの絵が一番好きとか、どの展示品が一番面白かったかということをネット上で議論してみてはどうか。その展示品をまだ見てない人、体感していない人は「行かなくては」「行きたい」という気持ちになる。

(ペーター) 私は民族学博物館に働いている。民族学者である。なので、日本民藝館を非常に興味深く拝見した。1920年、30年代に起きた民芸運動によって、それまで当たり前だと思われていたものが美術品として展示できる、美的価値を備えている、というように再認識されたのは非常に興味深かった。民族学者としての立場・観点からいうと、民芸品を社会学的な説明なしに展示するというのは非常に難しいところがあると感じた。私だったら文化、社会性といった意味から展示品との関連を説明すると思う。とはいえ、日本民藝館は、非常に面白い素材を私に提供してくれた。電子メディアを活用すれば、一番美しく見える展示スタイルを壊さずに、かつ、民族的、あるいは社会学的な興味をもった来館者にも満足していただけるような情報を提供することができ、あらゆる層の来館者に満足してもらえるのではないかと。

私が勤務している博物館（ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館）は、100年の歴史があるが、3年前に新館をオープンした時に、電子メディアや双方向型メディアを展示に取り入れた。それにより、展示品の美的外観を伝えることを壊さずに、12歳から25歳の若者層にも分かりやすい情報を発信することが可能になった。静かな美術博物館の中で大きな音で情報を流すのは憚られるが、こういったメディアを使えば邪魔にならないし、来館者は1人ぼっちで見学しなくてよい。常にだれかとコミュニケーションをしながら展示品を鑑賞できるので理解が深まる、というアンケート結果もある。

(スザンネ) 日本では、どの美術博物館に行っても、来館者が展示物を1点1点、ものすごく長い時間をかけてじっくり鑑賞している姿が印象的だった。私はアーティストなので、目で読まなければならない情報が展示品に多くあるのは好きではない。例えば、QRコードを展示品の脇につけておいて、それを携帯やスマートフォンで持ち帰って、後で自分で見るという方法を使うと良いのではないか。

■博物館でのインタラクティブな活動にはどのようなものがあるか—マリアンネ・ヒルケ、ウタ・リンクレーベ

(マリアンネ) 日本で見た印象としては、参加型の活動において明確な定義がなく、幅広く、誰に対してもオープンな形で行われていた。手段としては、アンケートを用いる、展示品に触る、ものづくり、レプリカ体験等があった。東京国立博物館は、ボランティアステーションが印象的だった。個人にとっては双方型のコミュニケーションは大事だと思う。体験ステーションでは夢まくらや動物の骨の占いなど、ボランティアとコミュニケーションをとりながら体験できたのが印象的であった。平成館で手工芸の実演が行われていたが、見ている人も体験できたらもっと楽しいだろうと思った。自分も体験することで、素材に対する関心、技術に対する敬意が生まれるのではないかと思った。

(ウタ) 江戸東京たてもの園では、すべての感覚を使って体験するという手法が印象的だった。5月5日には家族向けのプログラムを実施し、ボランティアが多く常駐し、風車やコマを作って持ち帰ってもらうという話を伺った。親も自分が子供だった時代に立ちもどって、もう一度学ぶことができる点や、持ち帰ることによって過去・現在・未来が繋がっていく方法は素晴らしいと思った。「けんちく体操」も初めて見たがドイツでも実践してみたい。府中市の博物館では、初めにお祭りの映像を見せてもらったが、とても魅力的だった。展示室はリニューアルの途中とのことだったが、通路の一方は子ども用、他方は大人向けの展示になっていて、一緒に歩きながらそれぞれのレベルに合わせたメッセージを汲み取れるようになっていた。ぜひドイツでも実践してみたいと思った。山種美術館のカフェのお菓子で、展示の中のモチーフが活用されていた点も、とても面白かった。子ども向けの教育活動として、たとえば、絵を見た後に、気に入った絵をお菓子で作ろうという体験プログラムをドイツで開発できないかと思った。

(マリアンネ) 東京都写真美術館では、作業環境が整っていることに感銘を受けた。暗室や作業テーブルがプロフェッショナルな作りであった。作品を作った後に、一つのテーブルに

集まって、それぞれ自分の作品について発表していき、双方向の議論をすることは教育理論に適っていると感じた。

(ウタ) 日本民藝館では、展示品の性格や建築物の性質などから、体験型の学習は難しいと思ったが、折り紙や染色の体験ができるのではないかと思った。

(マリアンネ) 目黒区美術館の引き出し博物館は羨ましかった。非常に多岐にわたる素材を勉強できるし、色々な木の形を触ってみるというものは自分も実現したいと思った。木のことを学ぶとき、どんな木、どんな用途で使うのかを感覚（見る、嗅ぐ、触る）を通して感じるのは素晴らしいと思った。

(ウタ) 横浜美術館のこどものアトリエで体験したワークショップは、団員の中でもずっと議論になるような興味深い体験となった。ハンズオンならず、フットオンも交えて、全身で体験できるということは素晴らしいと思った。音や、温かい色水、そういった体験をさせてくれるこどものアトリエは、自分の職場である「子ども博物館」に持ち帰ることができるアプローチを学んだ。子どもの時にあのような体験すれば、大人になっても必ず博物館に戻ってきてくれると思う。

■世代を超えた博物館教育について：レギーナ・イルコップ、アンチェ・ノルテ

(レギーナ) 日本で今回訪問した美術館博物館では、世代を超えた学びの場とプログラムがあった。日本の皆さんに役立つよう、ドイツのこれまでの歩みについて私から話し、次に、アンチェが日本での体験について話す。

人口構造が変わってきて、高齢化社会になっているのはドイツも日本と同じだが、昨今では、体も精神もしっかりしていて、かつ、時間のある高齢者が増えてきている。彼らの中で社会に貢献・参画したいという欲求が高まっている。社会福祉的な分野では、子どもに読み聞かせをする活動や、障害者や認知症の老人を助けるなどの活動もある。皆さんボランティアとして活動しているのだが、それを組織しているのは、キリスト教系の教会、ボランティア協会など。市町村レベルで組織されていることも多い。世代間を超えた活動、生涯教育が発展している今の時代においては、博物館もそこから目をそむけるわけにはいかない。たとえば、親子のためのプログラム、子どもと祖父母のためのプログラム、時代の証言者・証人の記録を残していく活動がある。私としては、ある歴史学者の女性の「若者と高齢者を組み合わせたプログラム」に興味を持っている。デジタル・ストーリーテリングというアメリカで考案されたものである。

こうした活動が盛んな一方で、ドイツではボランティアに問題があることも事実。一つは、ボランティアの養成・教育の問題である。博物館内の課題として、常勤のスタッフがボランティアを養成・教育するためにかかる時間の問題がある。

(アンチェ) 日本ではどの博物館でもボランティアがいた。世代間の交流が行われている。そのプログラムの実施方法も多彩。家族向けだったり、親子が別々のプログラムに参加したり同じものに参加したりと色々であった。目黒区美術館で見せてもらったプログラムは、世代を超えて学ぶプログラムで、親子がミックスで参加できるオープンプログラムであった。スクールプログラムにボランティアが関わることで、古い時代の風習伝統が伝えられるということも学ばせてもらった。参加する子ども達だけでなく、指導者にとってもその経験が生涯学習の一環として成立しているという点が素晴らしいと思った。ボランティアの関わり方は館によって様々だった。時代の証言者として講義をしたり、一緒に制作活動を行ったり、美濃加茂ミュージアムでは、学校の校長先生だった人がスクールプログラムの指導にあっていた。

しかしながら、ボランティアの品質を保証する規準があるのかどうか疑問に思った。トヨタ博物館にはボランティアがいなかったが、常勤でなくては伝えられない情報がある、ボランティアに任せっきりにすると、館の望む品質をもって教育ができない、ということから敢えてボランティアをおかないということだった。日本ではどのようにボランティアの品質を維持しているのか、規準があるのかどうか、などについて議論したいと思った。具体的には、「日本の博物館にはボランティア活動したい人にどのようにアクセスしているのか」という質問をしてみたい。ボランティアの研修、教育はどのようにしているのか。ボランティアをどのように選定するのか。何をボランティアがして、何をしてはならないのかに関する規準があるのか。ドイツではボランティアを活用するのが難しいので、どうして日本でうまくいっているのかを知りたいと思う。【アンチェ・ノルテ氏のこの質問については、日本におけるボランティアの状況については、事業検討委員会主査である青山学院大学の鈴木眞理教授より簡潔にご説明いただき、回答とした。】

午後の部から— ドイツ団によるプレゼンテーションと質疑応答

■ 「博物館教育普及活動に関する品質規準」について：アンチェ・ノルテ

日本側から依頼があったので、ドイツ連邦博物館教育連盟から「博物館教育普及活動に関する品質規準」についてお話したいと思う。ドイツの博物館教育スタッフは、美術品に関して専門知識や能力があることのほかに、博物館学に関する知識や、人々と関わるコミュニケーション能力、社会性等が求められる。この規準の20頁目には、常勤で勤務する博物館教育スタッフ

が備えていなくてはならない資質のチェックリストが掲載されている。

ほかには、フリーランスのスタッフを雇用する場合の管理能力も求められる。フリーランスの博物館教育スタッフにも、常勤のスタッフにも、共通して求められるのは共感する能力と能動性である。もちろん、社会性や人間性も必要である。その中には教育学的な異文化に対する能力、言葉による、非言語によるコミュニケーション能力、チームワーク能力などがある。博物館教育に携わるに相応しい卒業資格、学歴を備えていることが望ましいと考えられている。受けるべき教育としては、専門的な教授法を身につけていること、博物館学、収蔵品に関する知識、継続研修を受けるオープンな姿勢を持っていること。

また、博物館普及活動に携わる人が受ける研修では、コミュニケーションがどのようにとれるか、興味や関心にどう対応するかに主眼が置かれている。教育普及活動においては様々な層の来館者に合わせた情報提供をする必要があるので、多様な来館者層に対応できる能力も重要である。ほかに、教育普及の内容や方法論に関する研修では、方法や手段によって来館者のモチベーションを上げられるか、専門分野を超えた知識を与えるか、関連性、遊びの要素の取り入れ方などを学ぶ。

■博物館のガイドのための研修について：マリアンネ・ヒルケ

私が勤めている博物館における上級研修について紹介する。1989年から行われているもので、先ほどの「博物館教育普及活動に関する品質規準」が作られる前から、既に研修を行っていたことになる。ここ数年間の間に、ガイドの数を80人に増やしたいと考えている。導入時は8人だったので家族的な雰囲気だったが、ある一定の規準が必要になってきた。ガイドツアーの数が増加したので、ガイドが多く必要になった。ガイドツアーの回数が、当初は年間1千回程度だったのが、年間7千回ぐらいになったことへの対応である。

ガイドの研修期間は1年間である。半年間はガイド内容だけに絞られている。研修に参加する人たちを新聞等で公募するが、人の紹介等による場合もある。応募者の選考は、2人か3人で行っている。一度に採用する数は15人までである。その10%は研修期間中に辞めてしまう。ガイドの研修の規準ということでは、社会性とコミュニケーション能力が重視される。

他に、私たちの博物館がオランダの国境に近いこともあって、外国語の習得が重要な規準になる。あとは、自分自身が熱くなれる、感動できる能力。これはコミュニケーション能力にも結び付く。それから、人が好きなこと。子ども好きな人でなければ、ガイドは務まらない。最後に重要なのは、応募者が経済的に自立していること。私たちからの収入だけで生計を立てていこうとする人には向いていない。テストも行う。研修は毎週金曜日に3時間あって、参加者に議事録を作ってもらふ。後半になると、講義の一部を参加者がつくることもある。ガイド同

士でガイドし合うこともある。

大体6カ月たったところで筆記テストを行う。そのテストが終わった後に、体験プログラム等の経験もしていく。実際にガイド業務に入る前に、公園か博物館でテスト・ガイディングを行う。ガイドは女性の方が圧倒的に多い。理由は小学校の教師と同じようなことかと思う。対象には男の子も多いため、ガイドにも男性が増加することが望ましいと今は考えている。また、グループで研修を受けるが、参加者全員が同じように仕上がってしまうのは残念。個性をいかしたガイディングをしてほしいと思っている。グループ内には対立が起こることもある。お金を稼ぎたいと思っている人もいれば、人生を豊かにしたい人もいる。姿勢の違いから対立が生まれることがある。

コインの裏と表になるが、ガイドの数が増加すると、組織としては品質管理が難しくなるため、ガイドの数は少ないほうがよいと思う。数が多くなればなるほど、自分で自立して学ばなくてはならないというガイドが増える。来館者にアンケートを採る方によって、ガイドがよかったか、改善すべき点があるかどうかを確認して、フィードバックすることができる。

Q：研修を受けるときに受講料は発生するのか

A：今は無料であるが、有料にしたほうがよいのではないかという議論もある。有料のほうが価値が出る、と考える人も多い。フリーランスのガイドに対しては、研修に参加しない場合には採用しないケースがある。

Q：館の方針によってガイドの仕方が異なることもあるが、他館と兼任してガイドをする人はいるのか

A：いる。なぜなら、1つの館で集中してガイドをすると、「常勤で雇え」と訴訟を起こすことができる。また、ガイド自身も、生計を立てるために、複数の博物館を兼任したいところである。たとえば、大学卒で、シルクスクリーンの教育を受けたアーティストのガイドがいるが、その人に関しては、民族学博物館としての養成を行った。

Q：ドイツではワークシェアリング的に数時間だけ働く人が多いという印象だった。雇用保険を支払わなくて済む為、日本ではフリーランスの人に依頼することが多いが、ドイツではワークシェアリングにすると、二人分の雇用保険を支払う必要は無いのか。

A：フリーランスとパートとは分けて考える必要がある。日本の場合と違って、パートの人が半日の雇用と決まっているのであれば、雇用者は保険を支払う必要がある。一方、フリーランスは自営業なので、個人事業主として、自分で雇用保険に入っている。ドイツの博物館は、フリーランスを活用したいという考えにある。個人事業主として携わっているフリーランスの人の方が、教育や専門性が高い場合が多いが、対立が起こることも多い。

Q：個性を重視した教育をされるという点が印象的だったが、どこまでが個性で、どこまでが共通してもって欲しいことなのか、その線引きはあるか。

A：コミュニケーション能力、社会性、スムーズな話し方などが共通のことか。ガイドになりたい人には様々な背景がある。地質学者や専門的な教育をうけてきた人等がいる。付加価値・能力を個性としてみている。もちろんそういう人たちであっても、コレクションに関する専門的、基礎的な知識は持つてもらわなくてはならない。展示品に関する事実は共通項として認識してもらわなくてはならないが、外国人に対するガイドが得意な人には、そうした個人の特性を活かしてやって欲しい。史実に関する情報は正確に覚えておいてほしい。

A：フリーランスの人といえども、ガイドを受ける来館者は、その人を博物館の人と考えるので、博物館の方針にはきちんと従って欲しい。いわゆるメディアへの対応は、フリーランスではなく、館の職員が対応するようにしている。

(以上)

第4章 ドイツ派遣者のレポート

1. ドイツにおける博物館教育 ～平成25年度ドイツ派遣事業に参加して

九州国立博物館 池内一誠

日本博物館協会によって実施された平成25年度日独青少年指導者セミナー「博物館における青少年教育」により、平成25年9月10日から23日までの間、ドイツの博物館を訪問・視察し、ドイツで博物館教育に従事する多くの方々と意見交換する機会を得た。本事業は平成24年度に次いで2度目であり、前年度事業については既に詳細な報告がなされている。今回の派遣事業で訪問した博物館の中には、前年度訪問したところもあり、新たに訪問したところもある。前年度の報告を確認することのできたところもあり、新たな知見を得ることのできたところもある。今回の事業で我々が体験したことはあまりにも多いので、十分に整理・消化するには時間がかかるが、それでも、これまでの自らの活動を再確認することができる事例を目にし、また、今後の博物館教育活動に反映させることができそうな新たな視点を獲得することができたように思われる。それぞれの博物館については、派遣者7名が分担して作成したレポートに詳細に報告されている。ここでは、派遣事業全体のなかで印象に残ったことについて、いくつかの項目を立てて記してみたい。参加者7名のバックグラウンドはさまざまで、関心の所在もさまざまであり、訪問した館の設立主体や規模、分野等もさまざまで、ドイツの博物館教育全体について派遣団全体の知見をまとめることはもとより不可能であるが、筆者が感じたことを以て、我々が何を見てきたのか、の一端でも伝えたい。

《博物館教育に従事する人》

各博物館で博物館教育に従事している人々には、館の正規の職員、外部機関からの配属職員、フリーランス、といった立場の人がいる。

〔正規の職員〕多くの館では、エドゥケーターのポストが確保されている。過去においてエドゥケーターの存在はキュレーターに比べて軽んじられていた感があるが、ここ10数年の間、次第に来館者の立場に立った博物館活動を行う潮流が強くなり、エドゥケーターの地位は向上してきている。ひとつのポストを2人で分けて業務を担当する、所謂「ハーフタイム」の勤務形態も珍しくない。「ハーフタイム」の職員はそれぞれが正規の職員で、社会保険等も完備しており、職員が家族の世話をする必要があるのであるなどの場合に仕事を続けやすいというメリットがある、とのことである。

〔外部機関からの配属スタッフ〕エドゥケーターのポストが外部機関から配属されたスタッフによって担われている事例もある。ケルン市では、市立の9つの博物館の教育活動を統括する機関「ケルン市博物館顧客サービス(Museumsdienst Köln)」が存在し、ここから博物館教育担当職員が配属されている。この形態をとることのメリットは、各館における教育活動についてのコミュニケーションがとりやすく、教育の質や重視すべきポイントについての共有がはかりやすい、デメリ

ットは、大きな組織のため、変化させることが難しい、とのことであった。同様の機関はベルリン（国立博物館群に対する派遣）、ミュンヘン、ニュルンベルク、ハンブルクに存在する。

〔フリーランス〕各館のエデュケーターの下に、フリーランスのスタッフが存在する。彼らは多くが学生や芸術家等、それぞれに別のアイデンティティを持っており、館の専任スタッフではない。複数の館のフリーランスを務めている例もあるようである。来館者と直接コミュニケーションをとる存在として、ガイドツアーや体験プログラムの運営を行っている。活動実績に応じて報酬を受け取っている。フリーランスの存在はドイツでは一般的なものであった。

このほか、ケルンのラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館とベルリンのノイケルン博物館には「博物館教師」が存在したが、これについては各博物館の報告に譲ることとしたい。

《博物館教育の手法》

今回実際に見てきた博物館で実践されている博物館教育の手法は、IT 機器を駆使したり、絵本を作ったり、アウトリーチの実践あり、視覚障害者向けのプログラムあり、とさまざまであるが、それらの詳細は個々の博物館の報告に譲るとして、ここでは複数の博物館で確認できたもののうち4つについて触れておきたい。

〔ガイドツアー〕ドイツにおける博物館教育活動の基本となるのはガイドツアーであり、それを担うのがフリーランスである。フリーランスは来館者団体の特性に応じてツアーのコースをいくつか持っている。団体の特性によっては、その団体にふさわしいコースを得意とするガイドが指名されることもあるようである。自らの専門性を活かし、また来館者の特性を想定してコースを考案し、エデュケーター立ち会いの下でコースを案内する、などの各種訓練を積んだ後に初めて活動することが認められる。採用後も随時研修は実施され、高い質の確保が意識されている。

〔ガイドツアー補助ツール〕ガイドツアーでの理解を深めるために、いくつかの館で補助ツールを使用していた。ワゴンタイプで移動可能なもの（ゾーリンゲン鍛造博物館）、展示室内の休憩用ベンチの下に隠してあるもの（クサンテン考古博物館）などの形態がある。ツアーの中でガイドが使用するものであり、来館者が任意に使用することはない。

〔来館者が任意に体験できるツール〕館によっては、来館者が任意に使用して体験できる持ち運び型のツールを用意しているところもある。トランクタイプのもの（ボン美術館）、リュックサックタイプのもの（ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館）があった。対象となる展示作品についての情報を提供するだけでなく、展示室内での制作活動を促す内容も含まれていた。

〔Museobil Box〕ドイツ連邦博物館教育連盟(BVMP)が2013年から5年計画で取り組んでいるプロジェクトが「Museobil Box」である。詳細はヴェストファーレン産業博物館ドルトムント・ツォレルン炭鉱跡およびドイツ連邦博物館教育連盟についての報告を参照されたいが、今後ドイツ国内の多くの博物館で、白い空っぽの箱「Museobil Box」を使って、子どもたちを主役としたワークショップや展示の活動が行われる予定である。博物館の機能を子どもたちに伝えながら子どもたち自身の創造性も育て、且つ社会とのつながり、社会の中での博物館の存在意義なども強く意識しているものであり、博物館教育の新たなスタイルを示すものとして、これから目が離せないプロジェクトで

ある。

《ドイツの(博物館)教育がめざすもの》

今回訪れた博物館の多くで共通して感じられたことがあった。それは、「職業」あるいは「生活」に向けられた視線である。産業博物館はもちろん、考古資料の展示においても、その資料を作り、使っていたのはどのような人なのか、が自ずと伝わってくるような工夫がなされていた。現代史や民族学の展示においても、どのような人がどのような生活を送っていたのか、を見る者に伝え、あるいは問いかけるものが多い、という印象を受けた。ドイツ渡航の事前研修において我々はドイツにおける教育の現状や職業観についてレクチャーを受けたため、殊更にそのことが我々の意識にあったためかもしれないし、今回訪問したところが特に職業や生活に直結する展示を行っていたのかもしれないが、産業博物館が充実していること自体が、ドイツの(博物館)教育がめざしているものを示唆しているように思われた。ドイツにおける教育を考察する際のキーワードとして「Bildung」という言葉が挙げられる。事前研修で幾度か耳にした言葉であり、ドイツにおけるディスカッションでもしばしば登場した言葉である。辞書的解釈では「教養」「教育」「陶冶」「形成」等と訳されるが、筆者自身は「Bildung」という言葉に込められたニュアンスを未だはっきりとは捉えきれていない。上に紹介した「Museobil Box」プロジェクトや、下に紹介する「学校外の教育」などの考え方の中に、ドイツの博物館教育従事者が考える「Bildung」の姿は窺えるのであろう。今後この言葉の持つ意味について考えていきたい。

《心に残ったことばたち》

今回、ドイツの方々との議論を進める中で、いくつか心に残ったことばがあった。

〔博物館はコミュニケーションの場〕 多くの博物館で聞くことのできたことばである。博物館にやってきた家族連れが、展示してある資料を前に、自分たち自身について語り合うことを願っている博物館もあれば、学校団体の子どもたちと年配の語り部とが交流する機会をセッティングする博物館もある。子どもたちが博物館での体験を持ち帰って、家族でそれについて話をしてほしい、と願う博物館もある。ガイドツアーを担当するフリーランスに対して博物館が求めているのも、もちろん高いコミュニケーション能力である。博物館はモノと出会う場所であると同時に、人と出会う場所でもある、と位置づけているように思われた。

〔学校外の教育〕 これもまた多くの博物館で耳にすることができた。多くのエドゥケーターが「学校ではできない体験を提供するのが博物館の役割、学校とは違う教育を行うのが博物館」と意識している。日本において所謂「博学連携」を進めるにあたっては、学校の教室で行われている授業の内容を殊更に意識し、それに合致するように博物館での学びを組み立てることをしてはいいのだろうか、と考えた。我々は日頃「この展示資料は教科書のここに出てくる」ということを学校にアピールしたり、学校からも「どの展示が授業のどの部分で使えるのか教えてほしい」ということを要求されたりしてはいいのだろうか。それも「博学連携」のあり方であるが、学校と博物館は本来異なるものだという意識を明確に持つことで、新たな連携の姿が生まれてくる可能性のある

ことを忘れてはならないと思った。

〔博物館は楽しいところ〕これはペルガモン博物館で行われた、博物館顧客研究所(Institut für Museumskunde)のBernhard Graf博士の講義の中で出てきたことばであるが、まさに筆者が日頃からボランティアや館内の他のスタッフたちに向けて話していることであり、自分自身が考え、やってきたことは間違っていなかったかもしれない、と勇気づけられることばであった。

《ドイツ派遣事業について》

最後に、今回の派遣事業のありがた全般について報告しておきたい。

〔スケジュール〕今回の行程は、始めにケルン及びその周辺都市の博物館を訪問し、ドルトムント、シュヴェリーンと移動して、後半にベルリンの博物館を訪問した。実質10日間で17の施設を訪れたことになる。訪問した施設は、設立主体も規模も、館種や対象とする展示資料・テーマもさまざまであった。訪問メンバーの問題関心に合わせてアレンジされた訪問先もあった。我々にドイツのあらゆる博物館教育の実態を見てもらおうと企図されたドイツ連邦博物館教育連盟の努力がひしひしと感じられる構成であった。たくさんの施設を訪問するために、朝8:00頃にホテルを出発し、夜10:30頃にホテルに帰ってくる、といった毎日が続き、日程はかなりタイトであった。各博物館でのディスカッションも残念ながら途中で時間切れ、ということがあった。その日のうちに学んだことを整理する時間が欲しいとも思ったが、このスケジュールであるが故に、多くのことを学ぶことができたともいえる。できるだけ多くのものを見聞したいし、同時に見聞したことについてきちんとディスカッションと整理をして理解を深めたい、限られた時間のなかでこれらを両立させることは難しいが、両者のバランスをどこに求めるか、であろう。

〔事前準備〕現地での調査をスムーズに進めるために、訪問する博物館の基本データ(職員構成、主要な来館者のターゲットやその数、主たるプログラムなど)をお互いに交換することは有意義であると思われた。事務局や各博物館が行う準備、日独翻訳の部分で負担は増加することにはなるが、現地での限られたディスカッションの時間を少しでもより踏み込んだものにするには有効かもしれない。

他にも触れたいことは多々あるが、以後は個別の報告に任せたい。最後に、それぞれの訪問先でお世話になった方々はもとより、全体を統括しつつ主としてケルンでのプログラムをアレンジしてくださった Beatrix Commandeur さん、主としてベルリンでのアレンジをしてくださった Uta Rinklebe さん、行程のすべてに同行して本当に真摯に通訳をしてくださった Heike Patzschke さん、同じくすべてに同行し、細やかな心遣いで我々の研修をサポートしてくださった Alexander Juttke 君にこの紙面を借りて感謝の気持ちを表したい。

2. ドイツ連邦博物館教育連盟について

社会教育実践研究センター 加藤由以

この交流事業のドイツ側のカウンターパートであった博物館教育連盟(Bundesverbandes Museumspädagogik e.V.、以下、BVMP)は、博物館教育の質の向上と、博物館教育に関わる人への研修機会の提供を主たる目的とする社団法人である。以下、団体の概要および活動について、BVMPのメンバーである Ms. Anja Hoffmann と Ms. Beatrix Commandeur による説明に、BVMPのホームページ(<http://www.museumspaedagogik.org/start.html>)の情報を補足し、報告する。

1. BVMPについて

BVMPは、1991年6月にフランクフルト・アム・マインで設立された。当時未発達であった博物館教育に注目したこの連盟の創設者は、1980年代はじめにはその基礎となる組織を発足させ、地域レベルでの会議やネットワーキング、教授法や方法論に関する定期的な交流機会を提供するプラットフォームを形成していた。ドイツの博物館は、1970年代には「学習のための神殿」ではなく「あらゆる人々ための文化的場面」であること、1990年代には「来館者志向」であることが重視されるようになっていた。こうした中で、資料の収集や研究といった博物館の中心的な役割に加えて、博物館と来館者とを結びつける作業が重視されるようになった。そうした状況を契機として、BVMPが設立され、国際博物館会議の教育と文化活動国際委員会(ICOM CECA)にも加盟した。

BVMPの活動はメンバーの会費により賄われているが、多くの組織や団体、省庁、国際組織に資金提供を求めている。現時点で、以下のような組織や団体と協力関係にある。BVMPは、こうした団体と協力して、全国および国際的なプロジェクトを実施している。その対象は幅広く、子供、青年、大人、高齢者、障害者も視野に入れた活動を展開している。

- ・文化とメディアのための連邦政府委員会(Beauftragter der Bundesregierung für Kultur und Medien)
- ・ヴォルフエンビュッテル文化教育連邦アカデミー(Bundesakademie für kulturelle Bildung Wolfenbüttel e.V.)
- ・美術教育のためのBDK協会(BDK-Fachverband für Kunstpädagogik)
- ・子供と青少年の博物館のための連邦協会(Bundesverband Deutscher Kinder- und Jugendmuseen)
- ・子供と文化青年の文化教育のための連邦協会(Bundesvereinigung Kulturelle Kinder- und Jugendbildung)
- ・市民教育のための連邦機関(Bundeszentrale für politische Bildung)
- ・ドイツ博物館協会(Deutscher Museumsbund e.V.)
- ・ゲーテ・インスティテュート(Goethe-Institut)
- ・ケルバー財団(Körber-Stiftung)
- ・メディアムス・スイス博物館教育普及専門職連盟
(Mediamus Schweiz, Verband der Fachleute für Bildung und Vermittlung im Museum)
- ・社会文化と文化教育／ドイツ文化のための評議会

(Rat für Soziokultur und kulturelle Bildung / Deutscher Kulturrat)

・オーストリア博物館教育文化普及者連盟

(Verband der KulturvermittlerInnen im Museums- und Ausstellungswesen Österreichs)

BVMPの組織は、全国の活動を取りまとめる連絡組織と、6つのブロックからなる下部組織で構成される。それらの下部組織は、相互に交流しながら活動を展開している。各組織には、テーマごとのワーキンググループがあり、それぞれには顧問が置かれている。また、BVMPの会員は、個人会員と法人会員から構成される。メンバー構成は、個人での加盟が約700人、法人単位での加盟が約200館とのことだった。BVMPには博物館教育だけでなく博物館活動に関心がある人が加盟でき、メンバーは、フルタイムやパートタイムといった雇用形態であったり、ボランティアや学生といった立場であったりと多様である。BVMPは、メンバー同士で情報交換をしたり、特定の問題について考えたりする場となり、密接なネットワークの構築を促す団体となっている。

その主たる活動としては、博物館教育の質の向上と博物館に関わる人への研修機会の提供という目的を達成するためのサポートや、博物館教育に関わる地域の団体等のコーディネートが挙げられる。具体的には、博物館教育に関する理論研究、国内および国際的な文化や教育機関との連携、出版物の刊行（定期的なものとしては、博物館教育の実践や関連する理論をまとめた専門誌“Standbein Spielbein”を年に3回刊行している。）、指導者研修、年1回の総会を通じた専門知識の情報交換等が挙げられる。メンバーは専門誌の提供を受けたり、多くの加盟館に無料で入ったりすることができる。また、指導者研修と関連して、メンバーがヴォルフエンビュッテル文化教育連邦アカデミーの一員として「博物館のための研修と交流」(Qualifizierung und Austausch für Museen)に参加することもある。

博物館への来館者は子供、青年、成人、家族、高齢者、専門家、障害者、少数民族、外国人、失業者、学校のグループ、観光客、個人やグループ等多様である。そうした中で、BVMPは、博物館及び展示の歴史的、文化的、歴史的、芸術的、技術的、科学的な内容とその背景を重視し、社会のあらゆる立場の人が文化資源にアクセスすることが可能となるような活動を展開し、過去・現在・未来に関する社会的な問題と資料との結びつきを強めることを重視している。

2. 青少年教育に関するプロジェクトについて

BVMPが現在取り組んでいるプロジェクトの一つに、“MuseobilBOX”がある。それは3～16歳の子供や若者を対象として、博物館を形作る考え方(フレームワーク)に触れる機会を提供する全国規模のプロジェクトである。このプロジェクトは、ドイツ連邦教育研究省(Bundesministerium für Bildung und Forschung、以下 BMBF)の助成により実施される(助成期間が2013～2017年)。

このプロジェクトの主な目的の一つに、「教育に関心のない家族が博物館に関心を持つようになること」がある。この助成は、BMBFが「若者が文化に無関心であること」を懸念して実現したため、プロジェクトにはできるだけ数多くの人に参加してもらうことが重要になる。



プロジェクトの内容を簡単にいうと、「子供自身で博物館をつくる」ことである。このプロジェクトを通して、博物館は「神殿」であるだけでなく、「生活」に深く関わっているものだということの理解を促すことが目指されている。その手段として、「博物館で働く人」に対する理解を深めさせることが重要だと考えられる。具体的には、博物館ではどのようにしてコレクションが作られ、保管され、展示されていくのかについて理解を深めると同時に、文化財についても理解が深められるような機会を提供し、そうした博物館活動と子供自身の生活との間に、どのような関連があるのかについても理解を深めてもらう。そうした理解を通して、子供が自宅等の身近な場所に「価値があるもの」を認識できるようになることが期待されるのである。

博物館教育連盟の加盟館がこのプロジェクトに参加し活動資金を得るためには、計画書を提出し、6名程の委員会(博物館教育連盟だけでなく、他の連盟の役員等で構成されることが想定されている)からなる委員会による審査を受ける必要がある。審査にあたり、その計画が、①博物館が置かれている地域の文化政策に基づいていること、②関連する2つの団体(1つは学校、もう1つはそれ以外の団体が想定されている。)との連携関係の中で展開されることが重視される。また、その内容に関しては、プロジェクトを展開する過程で、その対象者が博物館に直接来館する機会や、主体的に関わる機会が設けられていることが



プロジェクトに使う「箱」。50cm 四方程度の大きさで、蓋になる部分は透明になっている。

必要になる。具体的な活動方法は各館の計画に委ねられるが、同じ素材・大きさの「箱」を利用することは条件として課されている。プロジェクト終了後は全ての「箱」を博物館に展示し、展示の風景を写真撮影してインターネットに公開するという計画が立てられている。参加者は15~20人を想定しているが、展開方法は各館の計画に応じて、様々であって良いとされる。複数の博物館が連携して応募することも可能である。「箱」に関する作業は、個人だけでなく共同で行われることも想定されているし、その期間も1日から数週間にわたることも想定されている。

こうした助成事業の多くは、「革新的」であることが求められる。しかし、このプロジェクトは、連盟が

活動資金を獲得して実施館に振り分けるため、「革新的」であることにとらわれず、例え「地味」であっても意味のある活動だと判断されれば、助成金の交付を可能とした。また、今回の助成は5年計画で受けられるものであったため、これまでのような半年から1年という短い年度の予算では十分にカバーできない問題への配慮ができることがメリットだと考えられている。

訪問日:2013年9月16日(月)

対応者:Ms. Anja Hoffmann(ツォレルン炭鉱産業博物館)

Ms. Beatrix Commandeur(ペーノパーミル産業博物館)

3. ドイツで訪問した施設等について

ドイツプログラムにおいて視察の機会があった博物館等について、施設の概要や活動内容について個別に報告する。各レポートは派遣事業参加者7名が分担して作成した。レポートのタイトル(訪問先)と執筆者の氏名は以下のとおりである。なお、ペルガモン博物館では、ベルリン国立博物館群やプロイセン文化財財団に関する講義を受けた。その内容等については、「⑩ベルリン国立博物館群」として報告する。

<訪問先>

- ① ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)
- ② ボン美術館
- ③ ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館(ケルン)
- ④ 応用芸術博物館(ケルン)
- ⑤ ゴーリンゲン産業博物館
- ⑥ クンストパラスト美術館(デュッセルドルフ)
- ⑦ ローマ博物館と遺跡公園(クサンテン)
- ⑧ ツォレルン炭鉱産業博物館(ドルトムント)
- ⑨ シュベリー州立博物館
- ⑩ ユダヤ博物館(ベルリン)
- ⑪ ノイケルン博物館(ベルリン)
- ⑫ ハンブルグ駅現代美術館(ベルリン)
- ⑬ 子ども博物館 MACHmit! (ベルリン)
- ⑭ ベルリンの壁記念センター
- ⑮ 写真博物館(ベルリン)
- ⑯ ベルリン国立博物館群
- ⑰ その他
 - ・シュベリー城
 - ・ドイツ連邦議会議事堂(ベルリン)
 - ・ペルガモン博物館(ベルリン)

<執筆者>

- 土肥 幸美
高橋 美奈子
池内 一誠
高橋 美奈子
井内 麻友美
岡崎 智美
久下 実
土肥 幸美
加藤 由以
土肥 幸美
井内 麻友美
岡崎 智美
岡崎 智美
池内 一誠
高橋 美奈子
加藤 由以

久下 実
久下 実
井内 麻友美

①ドイツ連邦共和国歴史博物館(ボン)

Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik

訪問日時: 2013年9月11日(水)

対応者: Ms. Dr. Simone Mergen

■館の概要

同館は、80年代前半に当時の西ドイツの首相であったコール首相が、ドイツ連邦として現代史の博物館を設立しようというアイデアを出したことから設立された博物館である。1945年の終戦以降現在までのドイツの現代史を扱う博物館である。

常設展には年間約60万人の人が訪れる。企画展には年間約30万人の人が訪れる。うち40%程度は学校団体である。その3分の1はボン市内から、3分の1はボンから200km以内の地域から、残りの3分の1はその他のドイツの地域または外国から来ている。外国人も来館者全体の4~5%いる。

■ガイドによる常設展案内

滞在時間の前半、館の教育普及担当者である Simone Mergen 氏とフリーランスのガイドの方による常設展時案内を受けた。

展示物7,000点、展示面積14,000㎡という規模を誇る展示室では、現代史を多角的に伝える工夫が随所に見られる。政治、経済、文化、人々の日常生活など、幅広い観点から現代史を伝える努力がなされている。その展示コンセプトは「Culture Window Shopping」と呼ばれるもので、館ができるだけ多くのものを展示することで、来館者が自分で見るものを選べるというものである。展示物のテーマは一つの空間ごとにまとまっており、来館者が人目でその空間では何が展示されているかわかるようになっている。

常設展の展示室では時系列に展示物が並び、見学者が順路に沿って展示室を進めば、時間の流れに沿ってドイツの現代史が学べるようになっている。東西ドイツに分かれていた時代については、東西両方の現代史について展示がなされている。東ドイツについての展示スペースでは、東ドイツを象徴する色であった赤色が基調として使用されており、見学者は人目で東ドイツの展示だとわかるようになっている。

来館者の30%程度が有料ガイドの案内を利用するという。ガイドのコンセプトは「誰でもわかるように」ということである。たとえ学校に満足に通えなかった人でもわかるようにガイドをするというのが基本姿勢である。ガイドの手法は、ある出来事についての現物資料→写真→詳細がわかる文書の順に来館者に注目させることで展示物をよく見させ、なおかつそれについて来館者自身の頭で考えさせることができるものである。現物資料の展示に加え、館内の各所には映像メディアが設置されており、若者の興味も引き出しやすい空間となっている。またタッチパネル式の音声ガイドもある。タッチパネルに番号を打ち込むと該当の資料の画面が出てきて音声ガイドが始まる。

■青少年向けプログラム

10代の子ども、特に中学生以上の青少年を対象とした教育普及プログラムがある。

活動は二週間おき。青少年向けオーディオガイドを自分たちで考えて制作する。博物館と一緒に作ってもらっている。メンバーの募集方法は、HPでの広報や地域の学校の先生への呼びかけがある。対象年齢は9年生～12年生(15歳～19歳)。課題テーマは、まず博物館側が、博物館でどんなことができるかを説明し伝えた上で青少年自身に考えてもらう場合と、館側があらかじめテーマを与える場合のどちらもある。

■小さな子ども向けプログラム

設立当初ターゲットとしていた年齢層が12歳以上であったため、それよりも小さな子どもをターゲットにした展示物はほとんどない。

しかし現在は、小さな子どももターゲットになりつつある。小さな子どもに博物館を訪れてもらうことは、子どもの中に博物館への親しみを育むことにつながる。また、両親や祖父母とともに来館する子どもも多いが、博物館が家族史について語り合う場にもなっている。家族で一緒になって展示を見ながら話をしてもらうことが最近の館のコンセプトになりつつある。そのため、博物館で誕生日会を開くなど、小さな子どものいる家庭向けのワークショップも実施している。

■ガイドの育成

博物館の館内を案内するガイドは、有料で、1回90分42ユーロで行っている。年間で5,000件のガイドを行っている。25歳から高齢者までの60人がガイドとして所属している。ガイドの応募条件は、大卒で、できれば歴史や政治を専門に学んだ人であること。加えて、全ての世代の人とコミュニケーションできる力／対話力を必要としている。ガイドは全員1年契約。1人のガイドが月に8回～10回のガイドを行っている。ガイドの育成方法としてはまず応募時にコミュニケーション能力を計るための会話テストを2回行う。そしてそれに合格したら、当館の展示内容に関わる8人の専門家のセミナーに参加してもらう。そして3ヶ月間のテスト期間に、ガイドに渡すガイド育成教材の中で、館が伝えてほしいテーマや伝え方が書いてあるのを参考にしながら自分で内容を組んだガイドツアーの試行を行う。この際、どの展示物をガイドツアーに入れるかはある程度ガイドに任されているが、必ず館から内容のチェックを受けることにしている。10回程度試行ガイドツアーを経験した後、館職員とのフィードバックの会話を行う。こうした課程を終え良い評価が出れば、正式にガイドとして活動できることとなる。来館者全体の30%がこのガイドを利用する。

■ワークブック

青少年が展示を見ながら使用できるワークブックも作っている。内容は答えを探して歩くクイズのようなものではなく、現代史について自分の意見を考えて書き込むようなものになっている。

■博物館の歴史認識について政治的議論の有無

歴史認識については色々な政治的意見がある。しかし、博物館の運営は財団法人が行っているおり、政治からは独立した立場でもあるため、展示の学術性、客観性を検査するための取り組みができています。まず、展示は最近の専門家による学術的な研究結果にもとづいている。学術的な顧問会で展示内容を検討する。また、様々な社会運動家(女性、宗教、労働者問題に取り組む運動家など)たちを交えた学会も行っている。客観的な展示の例としては、常設展におけるナチ時代についての展示がある。当館は1945年の終戦以降を扱っているため、ナチ時代については詳しくは触れない。しかし、ナチ時代はドイツにとって常に重要な歴史問題であるので、1945年以降の各年代においてナチ時代がどのように捉えられていたかを展示している。例えば90年代のネオナチと呼ばれる風潮がわかりやすい例である。



真ん中の仕切りが壁を表している。右が東ドイツの展示、左が西ドイツの展示



東ドイツにおける子どものお祝いイベントについて解説するガイドの方

■感想

常設展は、現物資料、文書、写真、映像、最新のメディア機器がバランスよく配置されており、多様なレベルの来館者の興味を引くことができると感じた。ワークショップも子どもたちの主体性を重視した内容で充実したもののものであった。教育普及担当の Simone Mergen 氏は「ドイツでは現代史教育は非常に重要で、よく学校でディスカッションのテーマになる」と語っていたが、この博物館の規模とレベルがまさにドイツにおける現代史認識を体現しているように思った。

(土肥幸美／広島平和記念資料館)

②ボン美術館

Kunstmuseum Bonn

訪問日時：2013年9月11日(水) 14:30～17:00

対応者：Ms. Sabina Lessmann

1. 施設の概要

ボン市内の“ミュージアム・マイル(美術館通り)”に位置する美術館の一つで、1947年設立。展示スペース4000平米を誇る巨大な美術館であり、建築は1992年にAxel Schultes(BJSS)によって設計された、対症的な造形の美しい建物である。館内ではテーマに合わせた企画展示と収蔵品の常設展示を行っている。

収蔵品は約5000点、世界最大規模のライン地方の表現主義の作品群に加え、共和国時代、50年代、60年代～90年代(戦後)のドイツ美術も質の高いコレクションを誇る。また戦後の版画コレクション(国際的な作家によるもの)も注目に値する。また、ボン美術館では1984年から隔年でビデオナーレが行われており、映像作品のコレクションも充実している。バセリッツ、ボイス、ダルボーヴェン、キーファー、マツケ、クノーベル、フェデーレ、パレルモ、ポルク、リヒターの作品、ドイツ人以外の画家としてはドローネー、ロング、フォンタナなどの作品がコレクションの核となっている。



2. 教育普及活動

(1) 現状

ドイツではかつて13年制のカリキュラムであった学校教育制度が12年制となった。以来、数年間のうちに学校の授業時間に余裕がなくなり、美術鑑賞などの時間が削減され、美術館を訪れる青少年の数、さらには成人来館者の数も減少してしまった。現在はこの状況を改善すべく、美術館・博物館において様々な教育プログラムを老弱男女問わず提供すべきと考え、努力を続けている。いまだ十分ではないものの、90年代から続けている、こうした継続的な若年層向け教育普及活動の効果が現れつつあり、現在では鑑賞者側の意識も改善され、学校単位の見学やワークショップへの参加者も増加してきているという。

(2) ターゲット

美術館では、性別を問わず、すべての年齢層の来館者をターゲットとする。幼少期(未就学幼児、小学生)、青少年(中学生、高校生、大学生)、一般の大人の他に高齢者、障がい者まで、プ

プログラムはかなり幅広く提供している。また参加者が積極的な当事者意識をもって鑑賞を楽しみ、かつ意欲的にその活動を実生活で生かせるよう、それぞれの対象に合わせた内容を工夫し提供している。

(3) スタッフ

美術館教育普及担当職員のほかに、約 30 名のフリーランス(美術史家、芸術家、教師[幼稚園、小学校]、美術のセラピストなど)が関わっており、その多様性のおかげで幅広いプログラムの提供が可能となっている。フリーランスが多いため、他の美術館の情報も入り易い。年に2回は他館で研修を行うことを推奨しており、ガイド同士の交流や情報交換も積極的に行ってもらっている。そのことにより、それぞれの方法のよい部分を採用し、より質の高いガイド内容を実現している。

学芸員やベテランガイドの協力も得て、専門知識を備えたガイドの養成・研修も行っており(例:ガイドの能力に合わせて実習や資料の提供を行うほか、3か月に1回の面接で適宜指導を行っている)、非常に充実した人材育成への取り組みもうかがえた。

一方、詳しい専門知識(例:学術面だけでなく、老人、障がい者、子供の教育の専門知識含む)を持ったベテランガイドであるにもかかわらず、予算的な問題からこうした有能な人材を正規職員として採用することが難しい状況がある。

(4) プログラムのねらい

各種プログラムの中でも重きを置いているのは、ドイツ国民が教育において最重視する幼少期(5-6歳)に身につけるべき能力(=Kompetenz)を養うことにある。

「Kompetenz(コンペテンツ)とは？」

- ・コミュニケーション能力
- ・認知能力
- ・手で細かい動作/作業ができる能力
- ・自分の感情を表現できる能力
- ・人の話を聞く能力
- ・人の意見について考える能力
- ・価値がわかる能力(芸術品を貴重なものとして認識し大切にできる能力)

美術館では、画家、歴史、様式などの知識を身につけてほしいとは必ずしも考えておらず、現在と将来の両方において美術を楽しめる心の育成を目的とする。さらにこの目的においては、それぞれの年齢に合った能力とそれを生かす力をつけることに重点が置かれている。

「各年齢に応じたプログラムで身につけたい能力とは？」

- 1年生…認知能力
- 2年生…比較と分析能力
- 3年生…コミュニケーション能力(作品について書く、語る能力)
- 4年生…発表・プレゼンテーション能力

(5) プログラムの内容

美術館が提供する小学生や就学前の子供たち向けプログラムは、上記コンペテンツを養うという意味において最重要であると考えられている。(この「コンペテンツ」の考え方はドイツのいたる場面で重要視されている。)能力養成のために、単に絵を鑑賞するだけではなく、実際に体験することにも重点を置く。また、鑑賞者向けプログラムに限らず、教育者の養成などを目的としたプログラムも多い。

また、美術館・博物館には、州ごとに文部省が定めた教育カリキュラムのガイドライン(幼稚園から高校まで)があるが、日本のような教育指導要領というものはなく、州のガイドラインに美術館・博物館が従うべきという義務はない。むしろボン美術館では、文化施設は学校教育の場と同一である必要はないと考えており、自らの存在意義を学校ではできない体験を提供する場として位置付けている。また、(歴史博物館ではなく)美術館であるため、正確な知識やデータを与える場、人間のもつ自由な発想を生かせる場を目指している。

しかしながら、学校教育のガイドラインやカリキュラムにある程度合わせたサービスを提供すれば、より高い効果が生まれるとも認識しており、学校との連携をとりながらプログラムを考案・実施している。

実際に行なっているプログラムの概要を以下に記しておく。

3. ターゲット別プログラムについて

(1) 就学前幼児((4-6 歳児)向けプログラムの目的と内容

将来の来館者(鑑賞者)の育成

幼児が将来の来館者となるための教育として提供する。一過性の体験ではなく、継続して美術館に来てもらえるような内容を目指している。プログラムを通して、子供たちの成長に貢献することを目標とする。そのため、プログラムは継続性を重視し、10~15回ほどの連続講座として提供。最後の回では保護者を招待して、プログラム内容を紹介、子供と一緒にワークショップで作る体験をしてもらう。また、プログラム参加者には無料招待券(子供とその親各1名分)を提供し、参加後にも親子で美術館を訪れる機会を提供。

教育指導者の育成

美術教育者養成のために、幼稚園の先生向けプログラム、研修なども提供している。ドイツでは幼稚園の教師の教育が充分ではないため、そのレベルアップを図ることを目的とする。

(2) 小学生向けプログラムの目的と内容

創造力を持った継続的な来館者(鑑賞者)の育成

4年間の小学校生活で身につけるべき能力(=コンペテンツ)に注目した美術館独自のプログラムを提供している。現在提供しているもののほとんどは、美術館の見学とワークショップで約2時間のプログラムである。

これらのプログラムでは、正確な知識よりはむしろ自由な発想と創作力を養うことを目標としているため、見るだけでなく作ることができる(体験型)点を重視する。また、ワークショップ室内の活

動だけではなく、教育ツール(カートやトランクに入ったもの)を用意しており、参加者が展示室内にそれを持ち込み、作品を前にして様々な活動ができる。また、他の博物館でも応用できるようにプログラムが構成されており、一過性ではなく、継続性のある内容で提供している点に工夫がみられる。



プログラムの汎用性と普及

さらに小学生向けプログラムでは、「美術」とは何かを体験し、学ぶと同時に「美術館」がどういう場所であるかを学ぶ機会も与えている。

現在は、ボン市内の 15 校の小学校と契約し、年間最低一回は美術館を訪れてもらっている。(例: パスポートのようなものを作り毎年スタンプを押す)これらの協力体制が始まったことにより美術館の活動もかなり変化してきたという。

こうした活動をより活発化するには、地域へのアウトリーチとして周知広報の活動が非常に重要である。活動を知ってもらうために、州・都市の学校部局内の教育事務局との連携を行っており、ウェブサイト、パンフレット、DMなどで教育普及活動やプログラムについて告知する。また、学校や他の職場でパートタイムを兼務しているフリーランスに協力してもらい、口コミで活動を宣伝するという手法もとっている。

(3) 障がい者向けプログラムの目的と内容

INCLUSION という考え方

ボン美術館でも、「Inclusion(障がい者にもアクセス可能な施設)」であることは長年重要と考えてきた。しかしながら、現状はコレクションの特徴や陳列方法の問題があり、効果的でわかりやすい障がい者向け(特に視覚障がい者向け)プログラムは十分には提供できていない。たとえば、手で触ることが可能な作品は所蔵しておらず、文字や言葉で美術に触れてもらうことになる。美術館

という特質から、触れられる複製やインスタレーションを設置するという手法をとった場合は、インスタレーションと美術品(=fine arts)の区別が来館者にはつきにくいという問題も生じてくる。

しかしながら、公共施設であるため、障がい者を含め、あらゆる来館者を歓迎し、あらゆる人々のコンペテンツを養う役割であることが使命であるため、こうしたプログラムの実施は重要と考え、障がい者学校と協力体制をとり、できることから行っている。

現在の課題は、小グループでしか実施ができないこと、多数の介助者、スポンサーの必要性があることが挙げられるが、イベントを通して障がい者のための活動を行ったり、障がい者グループと美術館が協力して作ったプログラムなどを徐々に開始している。



4. まとめ

公立館、美術館(博物館や歴史史料館などではなく「美術」を扱う施設)であるという特徴と使命を強く意識した活動を行っている。そのため、あらゆる来館者のニーズや目的に応じた多種多様なプログラムを考案し、参加者が興味や関心、レベルに合わせて選択ができる。さらに、州の助成金を受けて作り上げたこれらのプログラムやツール、手法を、自館だけではなく他美術館や学校でも活用できるよう提供している点も素晴らしいと感じた。

さらに、このたびの訪問を通して、ドイツという国が子どもの教育において重視し、その育成を美術館・博物館に求めている「能力(=コンペテンツ)」の考え方についても明確かつ詳しく知ることができたのは大変有意義であった。

一方、絵画などファインアーツを展示する美術館に勤務する者として、大人の一般鑑賞者と子ども(特に未就学児)の鑑賞者が同じ時間、同じ空間で鑑賞することの課題(例:鑑賞態度、展示品の目線の高さ、声の大きさ(騒音に対する苦情)、解説のレベルなど)に関心があったのだが、この美術館では、幼児向けや障がい者向けプログラムを継続的に続けていることにより、一般成人の鑑賞者も子供や障がい者が美術館の中で一緒に楽しみながら鑑賞することに対して自然に受け入れるようになってきた(大人と子供が共存できる美術館へと成長した)という話はうらやましくもあり、今後見習う点も多いと感じた。また、日々の地道な取り組みが鑑賞者の意識を改善し、将来の恒常的な来館者を育成することへとつながっているということを実際に目にすることができた点は学ぶ点も多かった。

(高橋美奈子／山種美術館)

③ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館(ケルン)

Rautenstrauch-Joest-Museum

訪問日時: 2013年9月12日(木) 8:30~13:30

対応者: Mr. Peter Mesenhöller(ケルン市博物館顧客サービス専任スタッフ、2013年度来日)

Ms. Rita Böller(Museumsschule スタッフ)

1. 館の概要

ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館は、ケルンで唯一の民族学博物館である。1901年に創立、1906年に開館し、2010年に現在の建物でリニューアルオープンした。収蔵資料の根幹となったのはケルン出身の旅行家 Wilhelm Joest が収集したもので、彼の死後コレクションは妹 Adele Rautenstrauch に受け継がれた。博物館の名称はこの2人に由来している。約65,000点の資料を有するが、そのほとんどは1918年までの間にかつてドイツが植民地として保有していたアフリカやオセアニアで収集されたものであり、資料の時代や地域にかなり偏りがあった。そのためリニューアルの際に展示構成に苦労し、その結果として生み出されたのが、世界を地域別に分けるのではなく「住まい」や「宗教」など、テーマによって展示を構成するという手法「Themenparcours(theme-based presentation)」である。博物館の全体テーマは「Der Mensch in seinen Welten」であり、それぞれのテーマの下、比較の視点でさまざまな文化を相対化しながらその多様性について紹介している。「ケルン市博物館顧客サービス(Museumsdienst Köln)」から、専任職員1名とフリーランス16人が配属され、博物館教育を担当している。



シンボル展示: インドネシア・トラジャ族の倉庫

現在ケルン市には世界183カ国の人に住んでおり、民族学の博物館としてそのことは強く意識しているようである。2ヶ月おきにさまざまな国に関するイベントを実施しており、それらには3,000~5,000人が参加するという。学校団体の利用は多い。民族学は学校では学習せず、展示が学校の授業と直結するわけではない。しかし、学校には多民族のクラスも多く、30人中いわゆるドイツ人は2人という事例もある。そのような状況でこそ、「民族とは何か」を紹介するこの博物館を学校が活用する意味はあると思われる。

2. 博物館教育の手法

(1) マルチメディア機器の駆使

2010年のリニューアルということで、展示室内にはさまざまな映像装置を配置していた。展示

室への導入部分には、プロローグとしてさまざまな言語による挨拶のようすが映像で映し出され、展示室の随所には映像を効果的に組み込んで、来館者を飽きさせない工夫が施されていた。「Der verstellte Blick: Vorurteile」のコーナーでは、異文化・異民族に対するステレオタイプなイメージと現実の様子を、映像とインタラクティブな仕掛けを組み合わせて見せるということをやっていた。

(2) ハンズオンの仕掛け

映像を中心とした解説機器があちこちに配置されている一方で、書棚の引き出しを引く、覗き眼鏡を覗くなど、オーソドックスでアナログなハンズオンの仕掛けも多く見られた。そのうちのひとつでは、博物館の主要な機能である「収集」「保存・修復」「調査・研究」「展示・普及」について紹介していたのが印象的であった。

(3) ジュニアミュージアム

展示室の一角に、子どもたちを対象とした展示を行い、さらに子どもたち自身が展示を制作するための空間が設けられている。この空間を「ジュニアミュージアム」と名づけている。ここでは5つの国の子ども部屋を再現し、子どもたちがどのような日常生活の中で大人へと成長していくのかを紹介する。また、世界中の青年雑誌を集めて展示し、青年の関心事を比較するコーナー、学校団体が制作した展示物を掛ける壁、「子ども大学」と名づけられた、子ども自身が調査し、展示を制作する空間もある。

(4) リュックサック

ガイドツアーが教育普及の中心活動であることは他館と同じであるが、ガイドツアーに参加しない来館者のために準備してあるのが「リュックサック」である。リュックサックの中には6つのアイテムが詰められており、展示全体のうち6つの展示資料について、模型等を使ったり、創作活動をしたりしながら理解が深まるような構成になっている。リュックサックは全部で11セット用意しているとのことであった。



マルチメディア機器の例
本に見立てたスクリーンに映像を映し出す



ハンズオン展示の例
博物館の機能について紹介するツールに触れる



「子ども大学」展示制作中

(5) Museumsschule(博物館学校)

学校の教師が現職のまま博物館へ派遣され、教師として学校で勤務しつつ、同時に博物館教育の業務にも従事するシステムである。1週間のうち、博物館で勤務する日と学校で勤務する日が決まっている。ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館には現在8名の教師が勤務している。教師の観点からプログラムの充実をはかったり、教師向けの研修を行ったりしている。



リュックサックの中のアイテム

3. 所感

報告のとおり、ラウテンシュトラウフ・ヨースト博物館は博物館教育に非常に力を入れている博物館であるといえる。ありとあらゆる手法を用いて展示テーマや資料についての理解を深めようとする努力がうかがえる。今回は特に触れていないが、音声ガイドも子ども用を含めて何種類もあり、該当展示資料の前にはサインを出している。展示内容は必ずしも「子ども向け」というものではないが、「ジュニアミュージアム」の存在や「リュックサック」の用意に、子どもに向けた視線を感じることができる。現在勤務している自館と比較しても共通点の多い館である。博物館の中に「ジュニアミュージアム」を有している点、博物館の主要機能について紹介する取り組みをしている点、教師経験者を博物館教育のセクションに配置している点などが共通する点であり、展示の内容と相俟って個人的にも親しみを感じた博物館であった。「リュックサック」については、当館も開館前から導入を目指して検討を重ねているが、なかなか実現できていない。展示作品が頻繁に替わり、恒常的に展示されている資料が少ないため、リュックサックに詰めるアイテムが固定できないのが当館で実施に踏み切れない最大の理由である。しかし今回リュックサックを実見したことで、アイテムの内容構成や運用方法など、実現に向けて今後参考とすることができると感じた。その意味でも私にとってたいへん有意義な訪問であった。

(池内一誠／九州国立博物館)

④ 応用芸術博物館(ケルン)

Museum für Angewandte Kunst Köln

訪問日時: 2013年9月12日(木) 15:00-17:15

対応者: Dr. Romana Breuer

1. 施設の概要

1888年に工芸博物館として設立されたケルンで2番目に古い博物館。創立125年を迎える応用芸術博物館は、収蔵品数約15万点(4-8万点のグラフィック作品で未調査のものも含む)を誇る。中世から現代にいたる美術工芸およびデザインをコレクションの中心としているが、古いものでは5000年前の古代装飾品も収蔵。主に貴族など上流階級や教会がかつて所有していた家具や陶磁器、装飾品・染織品(ゴブラン・絹織物)、モード・ファッション(19世紀～現代まで)をコレクションする。また、20世紀のデザインやポスター、飾り刺繍のコレクションも充実。2010年には、さらに芸術とデザインに焦点を置いた博物館として位置付け、名称をMAKKに変更。



2. コレクションおよび展示方法

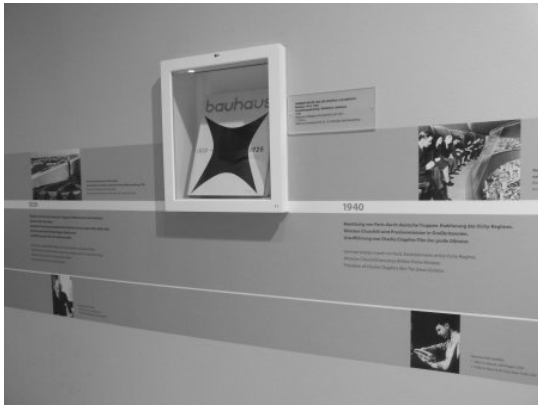
<来館者向けの展示の工夫>

館内の展示方法はほぼ、博物館が移転した1989年当時のままであり、デザイン部門以外は大きく変更されてはいない。建物・スペースなど様々な制約がある中で、展示方法については少しずつであるが鑑賞者にとって見やすい形へと改善を行っている。展示品を360度から鑑賞できるケースの導入や、鏡を使った照明など工夫を取り入れたほか、展示作品について歴史、材質、製作技術などについて説明をつける方法などを近年採用したという。



一方、デザイン部門では、2008年にヴァインクラマー・コレクション(700点ほどのデザイン家具などのコレクション)の寄贈を受けたのを機に、展示スペースを大幅に改修。より現代的な展示方法に加え、ガイドツアーについても新しい手法(詳細後述)をとっている。

この部門では、男女の鑑賞方法や関心の違いなどにも注目したアプローチで展示。たとえば、男性がより高い関心を寄せる年譜や歴史解説を含むパネル類を設置すると同時に、展示品を美しくデザイン的に見せるという女性に関心をもつ視点の両方を兼ね添えた展示方法をとっている。(例:壁面に展示物と年譜を並列展示、家具部門では椅子を室内の高い位置(壁面の高い位置)に配置してより軽量かつ装飾的に見せるなど。)



訪問時には、Dr. Romana Breuer から、それぞれの展示品について、丁寧な説明とともに家具や食器類などの歴史、用途、仕掛け、材質・技法などについてユーモアを交えながら説明をいただいた。

3. 教育普及活動

(1) 現状

博物館としては、子どものためのオーディオガイドやガイドツアーを作りたいと考えているが、小規模な博物館のため、なかなか実施に至っていないようである。(実施するには時間がかかるとの説明であった。)現在は、フリーランスの協力も得て、実現可能なプログラムから手を付けている。

(2) ガイドツアー

デザイン部門ではユニークなガイドの手法を採用。通常の博物館・美術館のようにガイドが来館者にガイドツアーを行うのではなく、展示室の随所にガイドが立ち、来館者が求めた場合に限り、作品について説明を行う方式をとる。

(3) ワークショップ

「年代物の衣裳の試着体験(コスプレ)」「磁器の秘密を学ぶワークショップ」などテーマを決めて幅広いガイドツアーやワークショップを実施している。館内には、ワークショップのための部屋があり(子供用、大人用のワークショップの両方を行うことができる)、室内でスライドを使った講義も可

能。ワークショップ用の部屋の壁面には大きなクローゼットが設置され、中に衣装や家具部品、陶磁器(複製品や再現された道具類のみならず、実際に当時使われていたアンティーク品含む)などワークショップに使うための道具が入っている。



これらのツール(年代物の道具類や洋服など)は、その多くが一般市民からの寄贈品であり、それぞれ年代物ではあるが、美術品として扱われるレベルのものではない。大切には扱いつつも、保存・保護よりも実際に参加者に触って使ってもらうことを重視している。ワークショップは青少年だけでなく、高齢者を対象としたものもある。1950年代を体験するガイドツアーを実施したところ、痴呆の始まった老年層のリハビリとしても大変好評を得たという。

「時代」をテーマにしたワークショップでは、実施後に参加者からその年代の服や当時のキッチン用品などを寄付したいという希望が多く寄せられ、寄贈品が増えさらに効果的なワークショップができるようになったというが、これはワークショップが生み出す相乗効果だと考えることができるであろう。

(4) ガイドツアー・ワークショップのターゲット

主なターゲットは、大人および中学生(10歳~13、14歳)以上の学生。小学生はターゲットにはなっていない。これは、ワークショップ内容が、歴史的背景を学習する年齢向けであるため、小学

生には早すぎると博物館側が考えているためである。しかしながら、歴史を学ぶという観点以外にも豊富な所蔵品を通して学べることは多く、小学生以下向けの教育普及プログラムを実施することには意味があると思われる。今後はよりターゲット層を広げた活動が増えることを期待したい。

(5) 地域や学校との連携

近隣の服飾学校の授業(歴史衣装製作)と連携し、博物館側が得た寄付金や助成金を使って学校の衣装製作活動を支援し、タイアップによりワークショップ用衣装を提供してもらい、博物館側がこれを利用するという相互協力の実績がある。この歴史衣装製作プロジェクトにより、試着体験などができるようになった。ワークショップで試着体験できることで、参加者はその時代の人の生活(ドレスを着用すると自由に動けなかったなど)を疑似体験し、より自身の経験と関連づけて歴史を考えることができるようになった。また、試着衣装は摩耗していくが、職業訓練学校(服飾系)の学生が傷んだ衣装を4年に一回修繕してくれるなどの協力体制もある。

こうした教育普及活動は複数の博物館で組織する「お客様サービス」により、各館が連携し実施しているが、各館が学校担当窓口を置き、学校の授業で歴史や美術を学んだ後に博物館でワークショップを体験させるという流れにもつなげており、効果を上げている。

4. まとめ

展示スペースや展示品の特徴、博物館の建物の規模や財政など、いろいろな問題を抱えながらも、市民や地域の学校、他の博物館・美術館などとの連携・協力体制をうまく図り、来館者のニーズにあわせた効果的な教育普及活動を行っている印象を受けた。特にハンズオンの体験ができるワークショップルームは充実しており、さらにそれらの中にはオリジナル(模造品ではなく、実際に古い時代に使われていたもの)を使ったものがあることに驚かされた。

ドイツ国内には潤沢な予算を持ち、最新のIT技術や高価なツールを作って教育普及活動を行っている美術館・博物館も多い中で、非常にオーソドックスな方法を取りながら、他の組織や団体と協力体制を組み、規模は小さいながら堅実に教育普及活動を行っている好例と言えるであろう。今後は、さらに若年層(小学生以下)の来館者の開拓とプログラムの提供を期待したい。

(高橋美奈子／山種美術館)

⑤ゾーリンゲン産業博物館

LVR-Industriemuseum Gesenkschmiede Hendrichs, Solingen

訪問日時: 2013年9月13日(金)

対応者: Ms. Nicole Scheda (教育普及担当、2012年度来日)

■概要

ケルンよりさらに北東に位置するゾーリンゲンは、日本国内でも「刃物の街」として名が知られている。ゾーリンゲンが属するノルトライン・ヴェストファーレン州とラインラント・プファルツ州にまたがる地方連合が、ラインラント地方連合(Landschaftsverband Rheinland)である。

ラインラント地方は、かつて工業が盛んな地域であった。閉鎖された工場施設を再利用し、6ヶ所でそれぞれの工場を生かした産業博物館が作られた。これがラインラント地方連合産業博物館(LVR-Industriemuseum)である。

ゾーリンゲン産業博物館はこの6館に属するひとつである。20世紀初頭までハサミの未加工品(鍛造まで)を製造していた工場の跡地を利用し、1999年より開館した。

■教育普及活動について

常設展に重点が置かれており、ターゲットグループはさまざまである。大人向けのプログラムでは館内ガイドツアーに加えて、ラインラント地方連合の他5つの博物館へエクスカージョンに出かけるプログラムもある。

家族向けのワークショップは毎週末、休日に開催され、親子で、祖父母も含めて楽しめるようにしている。学校利用でのワークショップの受け入れもしている。学校のカリキュラムと連携しての利用は少なく、課外授業(遠足)としての利用が多い。Scheda氏によれば、教育普及担当として、学校とダイレクトに連絡を取り合い連携を図る希望もあるが、なかなか実現することはないとのことだった。

■ワークショップ

ガイドありとガイドなしの2種がある。内容はどちらも基本的に同じで、ラリー形式で作業工程を体



写真1 概観



写真2 ハサミの未加工品サンプル



写真3 展示室風景 工場の設備がそのまま残っている

験するプログラムである。どうしても鍛冶(炉で焼いたハサミの原形をハンマーで鍛造する作業)の体験コーナーに人気集中してしまうため、すべてをバランスよく体験できるようにラリー式が取り入れられた。学校利用(団体)の場合、1グループ10名程度の複数組に分け、ローテーションでラリーが出来るよう配慮される。

特徴は、機械を当時のように動かし、実演することで、まるで工場がいまだに稼働中かのような雰囲気が出ていることである。

青少年見学者にとって、見ただけでは、どのように使うのか見当のつかない機械を、実際に仕事方法がわかるように使い方が実演される。ワークショップでは、「作業着を着る」、「石炭をスコップで炉にくべる」など、動作を体験できるような場面が多く取り入れられており、見学者は労働者を追体験し「考える」きっかけを得ることができる。

また、館内(工場展示内)には必ず工場の専門家(工場の退職者等)が配置され、見学者は動態展示のように、働いている人の姿を観ることができる。特記すべきはこの作業実演者の容姿である。統一されたコスチュームのような作業着は着用せず、普段着に近いそれぞれの作業着で実演に当たっている。これは、見学者が誰でも気軽に実演者へ話しかけられるような狙いがあるとのことだった。

■安全面について

日本であればすべてに柵を設けてしまうような工機の並ぶ展示室内には、必要最小限の本当に危険な部分に安全対策が施されている。

例えば、炉と大型の打機器を使用し作業実演者が鍛冶を行うエリアには、高さ1メートルほどの柵があり、見学者はその外から見学できるようになっている。鍛冶の手元の様子はカメラで撮影され、設置されたモニターで見ることができる。ハサミの型押しを行う行程エリアは、機械の型押しをする場所のみ柵が設けられ、機械や実演者の脇で見学することもできる。



写真4 石炭をくべる展示 実際に体験も行う場でもある
左は Scheda 氏



写真5 展示室内の様子



写真6 ハサミの型抜きを行う機械を動かす工場専門家



写真7 奥のエリアは鍛冶作業場で柵が張ってある様子がわかる 柵越しに実演者と見学者が会話をしている

ワークショップで鍛冶の体験できるコーナーには安全柵は無く、見学者は火とハンマーを使う作業も行う。この鍛冶の体験作業は8歳から受け入れているようだ。もちろん家族、教員がワークショップ担当の実演者と共に安全に注意を払う。やってみたい幼児の希望を受け入れる為に、木馬のような専用の鍛冶体験展示物も用意されており、作業に参加することができよう配慮されている。

現在の日本国内の学校教育では、小学生に体験させるにはハードルの高い内容に感じたが、安全管理について小学生だからといって博物館が特別な対応を取ることとは無く、引率した教員、保護者の責任の範疇に任せているとのことだった。

■緑の道具台車の存在

館内を巡回すると各所に鮮やかな深緑色に塗られ番号がプリントしてある台車に載った道具箱が設置されている。ポスターA1サイズくらいの大きさで、道具箱がそのまま作業台としても使えるようになっている。箱の中には、各所の説明で使えるアイテムが保管されており、教育普及の場面で活躍する。見学者のラリーポイントでもあり、学習エリアにも早変わりする。例えば、工員のロッカールームに置かれた道具台車の中には子供が着られる作業着が入っていて、ロールプレイをしてみたり、鍛冶をする場所に置かれたそれには、鍛冶打機の模型を使ったり、材料を手で触って当てる目隠しゲームができるようになっている。

工場の雰囲気を感じ、見学するだけでは体感することが難しい、機械の役割や作業者の気持ち、工場が実際に稼動していた背景などを学ぶ一助を担っている。

【参考 URL】 LVR-Industriemuseum
(ラインラント地方連合産業博物館)
<http://www.industriemuseum.lvr.de/>

(井内 麻友美／葛飾区郷土と天文博物館)



写真8 鍛冶作業の実演 左上にモニタがある



写真9 ワークショップ用の鍛冶場 指導を受けながら団員が作業体験している様子



写真10 幼児向けに用意された木馬型のハンマーを使う日本団引率の Juetke 氏 打つ所も柵で囲んである



写真11 展示室内に置かれた教育用の台車

⑥クストパラスト美術館(デュッセルドルフ)

Museum Kunstpalast

訪問日時: 2013年9月13日 午後

対応者: Dr. Sylvia Neysters (教育部長)

Ms. Susanne Ristow (フリーランスエドゥケーター、アーティスト、2013年度来日)

1. 館の概要

デュッセルドルフ市内に位置する美術館で、教育普及活動の歴史はドイツ国内でも古く、1960年代に既にスタートしている。

館のコレクションの形成は、ヨハン・ヴィルヘルム(プファルツ選帝侯)とその妻アンナ・マリア・ルイーザが、1710年に自分たちのコレクションを公開するためのギャラリーを開いたところまで遡る。その後一部のコレクションはミュンヘンへ移設されるが(そのコレクションは現在アルテ・ピナコテークが所蔵)、残されたコレクションを元に、デュッセルドルフの商人たちが1846年に美術館を設立。現在の建物には、1928年に移設された。現在館の運営母体は、デュッセルドルフ市と企業によって組織された財団(2001年～)である。

館のコレクションは中世から20世紀美術まで幅広い。所蔵品の数は10万点以上になる。



クストパラスト美術館 外観



子どものための展覧会 Eatart Collection

2. 教育プログラム

(1) 子どものための展覧会

ドイツの美術館では、様々な来館者に対するサポートを行うことで、来館者の増大を図ろうとする考え方が1960年代から広まってきた。1966年、クストパラスト美術館も学校との協働で教育プログラムをスタートさせた。

館の教育普及セクションのスタッフは常勤6人(教育部長1人以外はハーフタイム)、フリーランスのエドゥケーターが20人(内、約半数がアーティスト)という構成で運営されており、企画展開催時には臨時でフリーランスを30人まで増員することがある。今回見学した博物館・美術館の中で、常勤スタッフの数はハーフタイムの職員も含むとはいえ、最も多い。しかしこの館では多種多様な教育プログラムが日々稼働しており、この人数でもマンパワーは足りるのか、と思わせられるほどであった。

教育普及活動のために使われる部屋は館内によくつかある。

一つの部屋は、ワークショップとギャラリースペースを備えた部屋であった。この部屋はアールヌーボーガラスの常設展示室に隣接しており、すぐに作品にアクセスできるという素晴らしい環境にあった。ここでは常に子どものための展覧会が行われており、見学当時は「Eatart Collection」をテーマに、チョコレートでできた巨大な彫刻や、マーガリン製の彫刻が展示されていた。学校プログラムで来館した子どもたちは、作品のあるこの空間でマジパンやマーガリンを粘土のように使った造形体験ができる。



巨大なチョコレートの彫刻

この子どものための小展示は 1977 年から始まり、毎年テーマを変えて展示している(2011 年は「美術と算数」、2012 年は「光」がテーマ)。学校ではできない斬新な取り組みを、館のスタッフだけではなく、若いアーティストのアイデアを積極的に取り入れながら企画しているとのことだった。2014 年に予定しているテーマは「美術と科学」。教科を横断したテーマ設定をすることで、幅広く学校の関心を集め、アートを通じて子どもたちの日常にどのように戻っていくかを、常に積極的に考える教育普及担当者の姿勢がうかがえた。

(2) “Kinderkoffer(子どもスーツケース)” 小学校 1 年生、幼稚園の子どものためのプログラム

クストパラスト美術館には年間 2 万人の幼稚園、小学校の子どもたちが来館している。中でも “Kinderkoffer” は、幼稚園と小学校 1 年生に対して行うアウトリーチプログラムである。このスーツケースを学校に持っていき、まだ美術館に来たことのない小さな子どもたちに、美術館という場所を紹介している。スーツケースの中には、監視員や来館者の人形や、ミニチュアの作品(所蔵作品の模造品)が含まれており、子どもたちはドールハウスで人形遊びをするような感覚で、美術館がどのような場所かを知ることができる。その後、子どもたちは美術館を訪れ、本物の作品と美術館という場所に出会うことになる。この “Kinderkoffer” のキットは、クストパラスト美術館の “Jugendclub(青少年クラブ)” の子どもたちによって制作されたものだそうだ。

この館では 3 年前に幼稚園、大学と連携し、各関係者との対話を行った。ドイツでは小さな子どもにも美術館は無理、と考える幼稚園・保育所教諭が多いため、補助金を得て、現場の理解を得る



“Kinderkoffer(子どもスーツケース)”

ために保育所教諭の研修を実施したそうである。また、小さな子ども向けの教育プログラムも実施例を増やししながら、教育現場への働きかけを行っているとのことだった。

ただし、このスクールプログラムは有料であるため(1人5ユーロ)、学校によってはアウトリーチによる事前学習を避け、美術館来館のみを希望するケースもあるようだ。その場合は、“Museumspiel(美術館遊び)”というカードゲームなどで構成されたキットを使って、常設展を見学することになる。

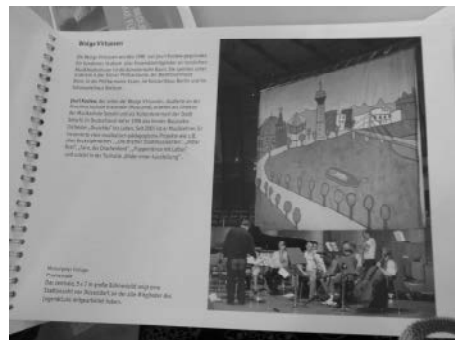
(3) “Jugendclub(青少年クラブ)” 13~17歳の子どもを対象としたアートクラブ

地下に下りるとアトリエがあり、見学時には10人ぐらいの子どもたちが集まり絵を描いていた。年間100ユーロの参加料で子どもたちが集まり、造形活動を楽しんでいるという。ドイツの他の美術館で見られたような整然としたアトリエではなく、床は絵具だらけで、アクティブな造形活動が常日頃から行われている様子が伺われた。指導はフリーランスのエducーターが担当している。“Kinderkoffer”の人形もこのクラブの子どもたちが作ったものである。



”Jugendclub(青少年クラブ)”

近くのコンサートホールとの共同企画では、アートクラブの子どもたちがコンサートの舞台美術を担当したということだった。このクラブでは、子ども自身のための制作に留まらず、他の教育プログラムと連動しながら、子どもたちの活躍の場所を美術館に集まる人々の中に広げている。10代の子どもたちにとって、人々が集う公的な事業に貢献するという仕組みは自信にもつながり、何より得難い経験になると思われた。



コンサートの背景画を子どもたちが描いた

(4) “jungenacht.(若い夜)”

大学との協働企画による青年向けプログラム

デュッセルドルフにあるハインリッヒハイネ大学との協働により、2005年からスタートしたプログラム。一学期の間、授業の一環として学生が美術館で講義を受け、このプログラムの企画、運営、広報、マーケティングに加わり実施している。美術館に来館する機会の少ない高校生から30代前半の青年層をターゲットとしており、このイベントの参加者から発生して2008年には



junge nacht.

“Kunsthans(芸術ファン)”という友の会が結成された(年間15ユーロで入館料も無料)。企業の協賛金を得ることで、若者が参加しやすいよう、参加料はできるだけ低価格におさえている。現在

250人が会員登録し、月に1度この会のプログラムが開催されている。このプログラムは美術館内の活動に留まらず、他の美術館や出版社の訪問など、館外の活動も積極的に取り入れている。ターゲットと同年代の若者の意見をとり込みながら、美術の枠組みを越えて若者の関心を集める分野に企画の幅を拡げている点も特徴である。

3. 教育プログラム 予算の獲得

従来の取組みに加えて、新しいプロジェクトにもチャレンジするための活動基盤となる予算は、一体どのように工面されているのか。この美術館の教育普及事業の予算獲得には、市の政策的な背景や企業の協賛金に対する考え方の変化が関係していた。

デュッセルドルフ市は、2000年から重点項目として文化教育に積極的に力を注いでいる。そのためデュッセルドルフ市には文化教育に反対する政党はなく、美術館全体で予算の削減はあっても、教育普及活動の予算削減は行われることはないそうだ。

市の予算も得ているが、外部からの予算獲得の努力も怠らない。ドイツ全体で博物館教育に対する企業の考え方がここ数年の間で変わってきている。かつては企画展に対して協賛金を出していたが、近年は教育普及活動に対して協賛金を出すことを希望する企業が増えてきたそうだ。



Ristawさんのギャラリートークは
名人芸の域

4. 所見

昨年度の報告書では、他のデュッセルドルフの美術館が紹介されているが、クストパラスト美術館でも、デュッセルドルフ市の文化教育政策に支えられ、ここでは紹介しきれないほど活発な教育プログラムを展開していた。この美術館以外の事例では、近年、博物館・美術館における教育普及の役割が重視されるようになり、プログラム数が増えてはいるものの、それに伴って人員は増えることがなく、予算獲得にも苦労しているところがほとんどだという。この館も勿論何もかもが潤沢に揃っているわけではないとは思いますが、「プロジェクトを始める時に、どこに連絡すれば良いかはもう大体わかっている」と易々と答える Neysters 教育部長には驚かされた。長い教育普及活動の実績の上に成り立つ自信が言わしめることだろう。「長い経験の中で学んだ大切なことは、美術館の中を含め協力者の理解を得るために、自分たちの活動を紹介すること、しかも熱意をもって説明することだ」と熱を入れて話していたことが印象深い。館の教育普及活動と共に歩み続けてきたことをバックグラウンドとしながら、次の新しいことにチャレンジする意識を持ち、目を輝かせていた。大いに刺激を受けた見学であった。

【参考 URL】 <http://www.smkp.de/>

(岡崎智美／横浜美術館)

⑦ローマ博物館と遺跡公園(クサンテン)

LVR-Römer Museum / LVR-Archäologischer Park Xanten

訪問日時: 2013年9月14日(土)

対応者: Marianne Hilke (博物館教育担当、2013年度来日)

1. 概要

オランダとの国境まであと30kmほどのライン川下流の左岸に位置する町、クサンテンにある考古博物館と野外遺跡公園である。古代ローマ帝国の都市遺跡の範囲が公園化され、博物館施設、遺跡の野外展示施設、復原建物のほか、レストランや体験活動のための施設などが整備されている。

対応者の説明によると、博物館は、5年前にリニューアルされ、学校団体へのガイドツアーは年間7,000件を行っているという。来館者は、地元だけでなく、ベルリンなど遠方からの学校団体の訪問も多いとの説明であった。

年間の来館者数は公式WEBページによれば40万人以上である。組織については、博物館にいわゆる学芸部門と教育普及部門があり、さらに遺跡の発掘調査部門があるという。

昨年度の派遣では、同施設は訪問しておらず、今回が本事業初めての訪問となった。



遺跡公園内に建つ博物館の概観

2. 遺跡について

紀元2世紀の古代ローマ時代に「クサントス」と呼ばれたローマの都市が建設され、その後廃墟となった。現在のクサンテンの町の中心部は、かつてのクサントスから少し離れた場所に立地・展開したこともあり、都市遺跡の全体が地下に遺存していることが判明したことから、遺跡範囲は保存対象として連邦からの指定を受け、州により公有地化がすすめられている。現在はほとんどの土地が公有化され、将来的には、全域が公有化の見込みという。

対応者からは、かつての古代都市クサントス時代の生活面と現在の地表面の高さはほぼ同じであること、長い年月の間に耕作地として利用されてきたため、地表から数10cmは、耕作に伴う攪乱を受けており、攪乱よりも深いところまで下部構造を伴う遺構に関しては、保存状態は良いが、それよりも浅い部分については遺存の状態は良くないとの説明を受けた。

現在でも遺跡の調査は進められており、地表面からの地下探査などにより、重要な遺構があると推測される部分について、博物館の調査担当部局を中心に、学生のボランティアなどが参加して行われているという。我々の訪問時には、発掘調査こそ行われていなかったが、調査中と思われるところが散見された。

3. 博物館について

同館と野外の遺跡公園の双方には、ゾーリンゲンの産業博物館などと同様に、ラインラント地方の博物館施設の維持・管理を統括する社団法人「LVR」が関わっている。

5年前のリニューアルということもあり、デジタルのメディアなどを積極的に活用した、直観的な展示手法が目目を引く。また、広い展示空間を最大限に活用した開放感のある常設展示である。

博物館の建物は、ローマ時代の「テルマエ」の一角にあり、かつての公共浴場を発掘調査した野外展示が建物に隣接して続く。

博物館の建物の2階には野外展示にテラスから浴槽などを見渡せるように設計されている。これはローマ時代の「テルマエ」がそうであったように同様の位置から浴場の施設を俯瞰できるという趣向による。

具体的な展示物は、遺跡からの出土遺物や復原品のほか、視聴覚、触覚、嗅覚で感じ取ることができるもので構成されていた。ところどころに触れる資料があり、視覚障がい者をはじめ、希望者は、ガイドツアーに参加することができ、ガイドスタッフからの説明を受け、触りながら展示の理解を深めることができる。

また、遺跡の地形模型や博物館の位置については、軟質のビニール素材で作られた触れる地図が作られており、視覚障がい者への配慮がなされていた。

なお、提供された資料によれば、入館料は大人 9 ユーロ、学生 6 ユーロ、18 歳未満は無料、障がい者は 6 ユーロなどとなっている。

4. 遺跡公園について

900m四方(プランは台形状)の広い遺跡公園内には、体験用の施設、レストランなどの飲食施設、復原された建物などの構造物、当時の町の区画や道を示すための並木などが配置されている。復原の構造物については、実際の発掘調査によって確認されたものを埋め戻し、同じ位置に上部構造を復原している。



博物館に隣接する「テルマエ」遺構の展示



イカリと船の構造を学べる模型資料

円形の競技場は、公園内でも規模も大きく、博物館が位置する「テルマエ」と並び、トピック的な構造物である。

時間の制約上、公園内を十分に見学することはかなわなかったが、レストランと後述する子ども向けの体験を提供する施設を訪問することができた。

とくにレストランでは、古代ローマの記録に基づいて再現したレシピで作った料理などのメニューを充実させている。博物館の中では五感のうち、味覚以外で感じることのできる展示がなされていたが、味覚についてはここで提供されている。ただし、古代の記録には材料は示されていても分量は書かれていないため、まったく同様の味かどうかは確認できない、との説明を受けた。

この遺跡公園では、「ローマ・フェスタ」と称する大規模なイベントが催されている。種々の体験プログラムのほか、円形競技場では剣闘士が登場するイベントが開催されるなど、一大歴史祭りの様相を呈している。次回は2014年7月14日・15日の2日間に予定されている。

5. 教育プログラムについて

博物館内及び公園内の施設では、様々な学校団体向けの体験プログラムや解説のためのツールが用意されている。

博物館内では、子どもが着用できるローマ軍の各階層の装束を備えたが体験コーナーがあり、子どもたちはローマの将軍から兵士まで、それぞれに扮装することができる。また、古代から使われている顔料についての資料や、出土遺物に実際に触れながら体験的に学習できるセットなどが用意されている。

一方で、公園内にある建物には、ローマ時代のゲームの部屋があり、そこでは、ローマ時代に行われていたボードゲームなどを実際に体験することができる。週末などには、革細工や骨製品などを作るワークショップも開かれている。これらのワークショップは、地域住民が運営しているという説明を受けた。我々の訪問日も土曜であったためか、このようなワークショップが開催され



屋外に一部復元された神殿



ローマ時代のゲームの体験コーナー



獣骨のアクセサリー作りのワークショップ

ており、親子連れらが体験をしていた。我々も短い時間ではあったが、これらのワークショップを体験することができた。

なお、博物館からの説明によれば、アウトリーチ活動は実施していないとのことであった。

6. 子ども向けの出版物について

そのほか、当該博物館の特徴として、子ども向けの出版物の充実があげられる。博物館の見学をサポートする”CHILDREN’S PASSPORT”と称する小冊子のほか、子ども向けの博物館のガイドブック“Rome Museum -Only for kids-”がある。それぞれドイツ語版のほか、英語版を作成されており、配付・販売されている。

さらに、“Mein Archäologischer Park”と題した大判の絵本があり、博物館と遺跡公園内の様子が、多くの来館者やスタッフとともに楽しいイラストで描かれている。博物館とは来館者にとってどのような場所であるのか、子どもたちをはじめこの本を手にとった人にわかりやすく伝えることのできる優れた刊行物であると感じた。



子ども向けの刊行物。右が大型のイラスト本。

【参考 URL(英語)】 <http://www.apx.de/english/index.htm>

(久下 実／広島県立歴史博物館)

⑧ ツォレルン炭鉱産業博物館(ドルトムント)

LWL-Industriemuseum Zeche Zollern, Dortmund / The Zollern Colliery

訪問日時: 2013年9月16日(月)

対応者: Ms. Anja Hoffmann

■館の概要

同館は、実際に使用されていた炭鉱の施設を当時の姿のまま残したものを利用して作られた博物館である。設立は1979年。最後の鉱山が閉山したのは1987年。現在の博物館の姿になったのは1999年。子どもから大人、素人から専門家まで様々な人をターゲットにしている。子どもは設立期からターゲットに設定してある。現在の若い人たちは鉱山で働くということがどのようなことなのか知らない。そこで当館では、鉱山で働く人の生活を紹介することを目的としている。鉱山で働く人の仕事の内容だけでなく、仕事の合間に何をしていたかなども紹介している。当館の展示物は、炭鉱の労働組合や社団法人から提供を受けている。

■オリジナルの資料をそのまま残す—五感で体験する本物の炭鉱

館内には、ほぼ炭鉱が稼動していた当時のまま残されているものが多い。炭鉱が稼動していた当時の雰囲気や五感を体験することができる場所である。天井高く吊り下げられた炭鉱労働者の服、炭鉱労働者用のシャワー室、炭鉱労働者の必需品がずらりと並ぶ棚、炭鉱入り口付近のパイプ、石炭を選別する設備などからは炭鉱労働者の生活がどのようなものであったかを身で感じることができる施設である。

■ツォレルン炭鉱の歴史

ドルトムント・ツォレルンが位置するルール地方はかつて炭鉱で栄えていた。ツォレルンでは、当初近くにあった別の炭鉱に空気を送るための施設を建設するために開発をしていたが、工事中に良質の鉱脈が発見されたため、ただちにここも炭鉱として開発されることに決まり、1898年に開山した。それから約20年間は石炭が豊富に取れたが、その後はあまり取れなくなったため、ツォレルン炭鉱は隣接する別の炭鉱への入り口として機能するようになった。1920年代にはすでに閉山が考えられていたが、1930年代にナチ政権になり戦争を始めるとそうはいかなくなり、結局1960年まで炭鉱は続いた。

■フ란ツ君と炭鉱で働くための職業訓練体験

「フ란ツ君」とは来館者を導く当館のキャラクターである。炭鉱で働く為の訓練を受けている男の子という設定。館内の随所にフ란ツ君が登場し、炭鉱の仕事について来館者が興味を持てるよう工夫されている。フ란ツ君と一緒に職業訓練を受ける90分のワークショップは大変人気があ

るという。

炭鉱が稼働していた当時のドイツでは、炭鉱で働く人の場合、8年間の義務教育を受けた後、14歳から職業専門学校に進み、16歳から本格的に現場で働き始めた。ドイツの職業訓練学校では、働くための実践的な訓練のほか、一般的な学校の授業、そしてスポーツの授業が行われていた。館内にはこれらの職業訓練がどのようなものであったか体験できるような実物資料も含め展示しており、来館者はフ란ツ君と一緒に体験し、学べるようになっている。丈夫な資料は基本的に来館者が触れてよいこととなっている。

職業訓練ワークショップは通常は教育普及担当者が行うが、時にかつて炭鉱労働者だった人が行うこともある。孫と一緒に参加するかつての炭鉱労働者もあり、世代間コミュニケーションの場となっている。一方でかつての炭鉱労働者にとっては、当館が「古き良き時代の思い出」としてノスタルジーの対象になる場合もあり、彼らが語る内容を若い人に伝える際に難しさもある。

■子ども用炭鉱体験遊具

地下の展示室には子ども用の炭鉱体験遊具が設置されている。木材で作られたトンネルの中に炭鉱現場で実際に使用されていた素材で作られたしかけがある。トンネル内に灯りはなく、ランプの持ち込みもしない。子どもたちは真っ暗なトンネルで遊ぶ。子どもたちが炭鉱の暗闇を体験するための遊具である。この遊具は教育普及プログラムには入っていないが、家族連れに非常に人気があるという。



フ란ツ君とともに職業訓練校で何を学んだかについて体験できるコーナー



今も当時の姿のまま残る石炭を選別していたコンベアー

■まとめ

今も炭鉱が稼働していた当時の姿を残す当館には、炭鉱が多数存在したことによって形成されていったこの地域の独特の文化を伝える役割がある。世代を越えて博物館に親しんでもらうための工夫が随所にあり、ワークショップも充実したものであるため、現在はその役割が果たされているように思った。一方でかつての炭鉱労働者は高齢になっており、炭鉱労働者の体験／記憶の継承が課題となっている点は、私が勤務する館と共通していると感じた。

(土肥幸美／広島平和記念資料館)

⑨ シュベリーン州立博物館

Staatliches Museum Schwerin

訪問日時: 2013年9月12日(木)

対応者: Ms. Birgit Baumgart (2012年度来日)

1. 博物館について

シュベリーン州立博物館は、芸術作品のコレクション(Kunstsammlungen Schwerin)と、3つの城(Museum Schloss Schwerin, Schloss Güstrow, Schloss Ludwigslust)と庭園からなる博物館である。博物館で所蔵するコレクションや城は、Friedrich Franz 2世のプライベート・コレクションを基礎に構成されている。芸術品のコレクションの多くは17世紀オランダの絵画や彫刻が占めているが、20世紀以降の絵画や芸術作品も収集・展示されている。

この博物館における芸術作品のコレクションを活用した教育活動は、Ms. Birgit Baumgart が担当している。そこでの活動の多くは、様々な社団法人や学校との連携関係の中で展開されている。



博物館の外観。右手にはシュベリーン城がある。

2. 博物館における青少年教育活動について

シュベリーン州立博物館では、いくつかのテーマに沿って教育活動が展開されている。ここでは、芸術作品コレクションを活用した教育活動のうち、実際に見学することができた幼稚園児のためのプログラム(45分程度のプログラム)について紹介する。

以下は筆者によるプログラム展開の記録である。

時間	園児の動き	指導者の動き	道具
15分	[探す] ・小さな動物のフィギュアを選ぶ ・コレクションの中から自分が持っている動物を見つける ・その動物と生活との結びつきを想像する	・園児を惹き付ける ・小さな動物のフィギュアを渡す ・コレクションの中に園児が選んだ動物を探させる ・生活との関連で動物について考えさせる	動物のフィギュア
5分	[聞く] ・虎の絵の前に移動 ・音楽を聴く ・音楽から動物の動きや様子等を連想する	・虎の絵の前に誘導する ・座らせる ・音楽をかける ・想像させる	音楽プレイヤー 座布団
5分	[動く] ・鳥の絵の前に移動	・絵を見ながら鳥の絵の前に移動する ・鳥の格好をまねさせる	

	・鳥の格好をまねする		
10分	[描く] ・紙受け取り好きな色の色鉛筆、羽を選ぶ ・羽を胴体に見立てて鳥の絵を描く	・画材を配布する ・羽を胴体に見立てて、鳥の絵を描かせる	色鉛筆、紙、固形のり、羽(いろいろな色)、画板、座布団
5分	[鑑賞する] ・床に並んだ絵を見る	・絵を床に並べる ・絵の感想を述べさせる(他者との違いを確認する)	
5分	[探す] ・見つけていない動物を探す	・もう一度コレクションを見て回り、見つけていない動物を探させる	

このプログラムに参加していた幼稚園と博物館とは長期的な連携関係にあり、園児はこれまでも定期的に来館し、教育プログラムに参加している。また、幼稚園教諭にはプログラムの計画段階から参加してもらい、園児の実態に即した教育計画が立てられている。



上:羽を胴体に見立てて、鳥の絵を描いている。
左:音楽を聴きながら、絵画を鑑賞している。

3. その他の教育活動について

こうした、幼稚園児を対象とする教育活動の他にも、様々なテーマに基づいた活動が展開されている。そうしたテーマの1つに、バリアフリーがある。

このテーマに基づいて計画されるプログラムは、「博物館で会わない人」=「障害者」という発想に基づいて展開される。ドイツでは障害者の社会参画に対するニーズが高く、博物館もそうしたニーズに対応するプログラムを用意する必要があると考えられている。シュベリーン州立博物館では、視覚障害者を対象とした教育活動が展開されている。

代表的な取り組みとして、視覚障害者のための鑑賞用テキストの作成が挙げられる。この取り組みは5年がかりのプロジェクトとして実施された。このテキストの作成は、視覚障害に関連する団体との協力関係のなかで進められた。主要



視覚障害者はもちろん、晴眼者にも活用できるように、ヴィジュアル資料も充実している。

な団体として、Blinder- und Sehbehinderten-Verein Mecklenburg-Vorpommern e.V.(弱視・盲目者のための州の社団法人)、andere augen e.V.(視覚障害者に関する分野で活躍する人による社団法人)、Aktion Mensch(民間の助成団体)がある。特に Aktion Mensch は、このプロジェクトの実施基盤となる資金助成をした団体で、宝くじの収益を福祉の領域で行われる事業に活用する団体である。このプロジェクトは約5万ユーロの予算で実施され、うち約4万ユーロはこの Aktion Mensch からの助成により、残り約1万ユーロは博物館の予算で賄われた。このプロジェクトを通して200部のテキストが作られ、ミュージアムショップ等で販売された。

Ms. Birgit によると、テキストの作成やテキストを活用した教育活動を展開する際には、覚えやすい簡単な言葉を使うこと、外来語も避けることに配慮し、鑑賞を支援する際にはその流れも工夫しているとのことだった。例えば、「コップ」がモチーフの絵画作品を鑑賞する場合、鑑賞者が鑑賞の対象となるコップに触れるタイミングで説明を加えるとのことであった。また、こうした視覚障害者を主たる対象として作られたテキストが、晴眼者にとっても意味を持つということも重視されている。例えば、小学生が展示室で教材のレリーフに触れながら「波」が描かれている絵画を鑑賞した際、レリーフに触れることで鑑賞が深まり、波の様子をより豊かに表現することが可能になったという事例もある。



博物館教育を担当している、Ms. Birgit Baumgart

シュペリーン州立博物館では、視覚障害者以外にも知的障害者を対象としたプロジェクトが実施された。その一つは、特別支援学校と小・中学校の児童・生徒を構成員としたクラブ活動である。このプロジェクトは造形等のワークショップを中心に1年間の活動を展開した。プロジェクト終了時には、活動を通して作成した作品を各学校で展示する展覧会を開催し、好評を得たそうである。

(加藤由以/社会教育実践研究センター)

⑩ベルリン・ユダヤ博物館

Jewish Museum Berlin

訪問日時: 2013年9月18日(水)

対応者: Ms. Christiane M. Birkert

Ms. Nadja Rentzsch

Ms. Sarah Hiron

■館の概要

同館は2001年に開館した。常設展ではドイツにおけるユダヤ人の中世から現代までの歴史について展示している。地下の展示室は、ホロコーストについて展示している。年間あたり企画展を2回、ガイドツアーを約7,000件、教育普及プログラムを約200件、会議あるいはシンポジウムを約10件、パネルディスカッションを約5件、朗読会を約15件、映画の上映会を約15件行っている。

年間の来館者数は70万~75万の間である。イースター時の3月・4月と夏休み時期の7月に特に来館者が多い。来館者の67%は外国人で、12%はベルリン市内からである。外国人はイタリアからが最も多く、次いでフランス、イギリス、オランダと続く。来館者のうち14%が教育普及プログラムを利用し、86%は個人見学をする。教育普及プログラム利用者の半数以上は学校団体である。来館者の平均見学時間は179分(約3時間)である。

■建築

同館の設計者ダニエル・リベスキンドは、ポーランド系アメリカ人で、ユダヤ系の両親はホロコーストの生存者であった。同館は当初、東西ベルリンの統一前に西ベルリンの歴史博物館として計画され、その中にユダヤ人の歴史について展示するスペースを作る計画であった。しかし、その後東西ベルリンが統一され、歴史博物館も東西統一したものを別の場所に作ることにしたため、当初の展示計画を変更し、ユダヤ人の歴史に特化した博物館を作ることにした。リベスキンドによる建築は、非常に大胆な設計の建築物であるため、ユダヤ博物館としてオープンする前から多くの見物客が来ていた。空から見るとジグザグ型の外観は、それだけでもユダヤ人がたどってきた容易ならぬ歴史を想起させるが、館内ではさらにユダヤ人にとってのホロコーストがどのような経験であったかを来館者に感じさせる工夫が随所に凝らしてある。



「亡命者の庭」



「ホロコーストタワー」

このことが最もよく感じられたのは、「亡命者の庭」と「ホロコーストタワー」という二つの空間である。「亡命者の庭」は、コンクリートの巨大な四角柱が何本も傾斜のある床面に立っており、平衡感覚を失ってしまう空間である。不安定で心休まらない感覚に陥るこの空間は、ナチ時代にユダヤ人の置かれた状況を表現しているという。「ホロコーストタワー」は、コンクリート壁の冷たく、ほぼ真っ暗な空間である。中にいると暗闇に押しつぶされそうな、不自由な感覚に陥る。この部屋の唯一の光は天井の隅にあたりには作られているごく細い窓からの細く白い外の光のみである。この光は室内にいる者からすると、とても遠くに感じられる。この部屋はナチ時代のユダヤ人たちが外の世界から遮断された状況を表現しているというが、遠くに見えるか細く白い外の光は、そのような状況でもユダヤ人の心の中に存在した希望の光を表現しているという。これらの空間では、写真や映像等のメディア技術は全く使用されていないが、来館者の心を非常に苦しくさせる不思議な空間であった。建物全体でユダヤ人のホロコースト経験を表現しようとしているのだが、各所で細かい説明がなされているのかと言えばそうではない。同館のスタッフによれば、「説明しなくても空間を感じることはできる。また、説明しすぎることはかえって、来館者自身の頭で考えることを妨げる。」という考えがあるということであった。「物を見て自分の頭で考えさせる」というドイツの博物館全体に通じるコンセプトがここでも垣間見えた。

■ 青少年向けの教育普及活動

ベルリン・ユダヤ博物館は開館当初から、青少年向けの教育普及を重視している。現在ガイドツアーには18種類のテーマがあり、1種類は一般的な内容のガイドツアーだが、後の17種類はガイドの対象別であったり、「歴史」や「宗教」特定のテーマ設定であったりする。

現在の青少年は、ナチ時代以外のユダヤ人について知識が少ない場合がほとんどであるため、ナチ時代以外のユダヤ人を知ってもらって青少年の視野を広げることが、同館の教育普及活動の大きなテーマである。例えば、ナチ時代よりもはるか昔からのドイツにおけるユダヤ人への差別や、ユダヤ人とドイツ人が交流してきた歴史を教える。最近もっともよく使われるテーマは「マイノリティがマジョリティと暮らす難しさ」というもので、これは現在のドイツにおける移民問題を考えることにもつながるテーマとなっている。このテーマでは、ユダヤ人の状況と現在のトルコ人の状況を比較し、生徒に考えてもらう。また、「ナチ社会主義に対するユダヤ人の反応」や「ナチス政権前のユダヤ人の生活」というテーマも重要である。こうしたガイドツアーの要はガイドと青少年たちとの会話である。ガイドは、知識を教えるという立場ではなく、青少年たちを様々な問題について考えさせる役である。

また、小学生向けのワークショップとして、子どもたちがユダヤ人の年中行事を体験するものがある。例えば、イースター時期に「ペサハ」というユダヤ人の行事があるが、この時にユダヤ人が

食べる「マツァー」という酵母なしのパンを作るワークショップを行っている。「マツァー」は酵母を使わないので短時間で作ることができるパンだが、このパンはユダヤ人がエジプトを出る時の象徴的な存在であることを子どもたちはパン作りを通して学ぶことができる。

また、同館は教育普及活動用のバスを2台所有しており、1年間で全ての州の学校を回り、同館内で行うようなものと同様のワークショップを行っている。重要なワークショップのテーマの一つに「ユダヤ人のアイデンティティ」というものがある。それは今を生きる若いユダヤ人の生活を紹介するものである。アイパッドを使用し、彼らの生活風景や日記を紹介する。今に生きるユダヤ人のアイデンティティが何であるのかを伝え、ユダヤ人についての視野を広げる取り組みである。

■将来のワークショップモデル

同館では、ホロコーストの経験者が少なくなった先にどのように伝えていくかも考えており、一部はすでに実施されている。それは、ホロコーストを経験した人々の遺品を分析し、文書化した後、証言者と対話する代わりに小さな展示会を開くというものである。そこでは10個～15個の遺品（手紙や写真など）を扱い、子どもたちはその中から3～4個の遺品を選び、その遺品の背景について考える。遺品を見る際は、博物館教育普及の専門家が一緒にいて、子どもたちは手袋をして丁寧にその遺品を扱う。準備時間は全部で4時間。2時間半を遺品の分析に使う。

例えば、ある校長先生が自分の学校の女の子に出した手紙がある。その内容は「ユダヤ人は学校の生徒の5%以下に抑えないといけない」という法律ができたから、女の子はもうその学校に来てはいけないというものであった。子どもたちはこの手紙について分析することになる。例えばこの学校長はどういう気持ちであったか、義務感に燃えてこの手紙を書いたのか、そうではなかったのかについて考える。そして考えた結果について文字にしていく。

■まとめにかえて 一子どもたちと過去の出来事をつなげるために

筆者が勤務する広島平和記念資料館では、子どもたちと過去の出来事とをどのようにつなげていくかが常に課題となっている。そこで、ユダヤ博物館の教育普及担当者に「過去の出来事と子どもたちとをつなげるために、貴館ではどのような工夫をされていますか」という趣旨の質問をした。すると、その担当者はアメリカに逃げていくユダヤ人の親子が写った写真を例に挙げながら答えてくださった。「親は暗い表情をしているが、子どもはなぜアメリカに行くのかを理解していないため、単に新しい国で新しい生活を送ることを期待して笑顔を見せている子どももいる。こうした表情やそこににじむ感情は、今の人もわかる。子どもたちには写真に写る人の表情に注目させて、なぜこうした表情をしているのか考えてもらおう。」

時代は違えども、過去に生きた人も、今に生きる人と同じように感情を持った人間なのである。「今も昔も同じ人間」という視点は、過去と現在をつなげる博物館という場に欠かせない視点であり、そこで働く者にとっての永遠のテーマなのではないかと思った。

(土肥幸美／広島平和記念資料館)

⑪ノイケルン博物館(ベルリン)

Museum Neukolln

訪問日時: 2013年9月19日(木)

対応者: Dr. Udo Gosswald(館長)

■概要

ノイケルン(Neukolln)はベルリン南東の行政区で、人口およそ32万人、145の民族を抱える移民の街である。この地区の文化、歴史を伝えるために、2010年開館されたのが、ノイケルン博物館である。郷土歴史資料館と呼ぶに相応しく、博物館として新しい展示法に取り組んでいる。我々は、Gosswald館長のガイドによって、見学者が体験する道筋を追体験した。

■「99×Neukolln」

常設展示は、ノイケルンの街の紹介をテーマにした1フロアである。

ここには、99点の、かつて実際に使われていた生活用品(例えば、ハンガー、帽子、ミシン、トランクなど)がディスプレイされている。中には、一見するとなんだかよくわからないもの(例えば、鞭(のようなもの)、弾丸(のようなもの)など)もある。タイトル、キャプションは一切ない。99点がグルーピングされているわけでもなく、美しく陳列されている。

Gosswald館長は我々に、「あなたの気になった展示物はどれか? どうしてそれが気になったのか?」と問いかけ、団員の数名がそれぞれ答えた。次に、「あなたの気になった展示物がどんなものなのかしらべてみよう」と、展示ケース前にスライド式で備え付けてあるデジタル端末をスライドさせ、今話題になっている展示物の前に持ってきた。

デデジタルキャプションは一度に8つの展示物の画像がキャプチャ選択できる設計になっており、端末をスライドさせた正面にある展示物の画像が表示さ



写真1 概観



写真2 常設展示室内



写真3 タイトル、キャプションの無い展示の様子



写真4 デジタルキャプションのキャプチャ画面

れるようになっている。この画像にもタイトル(文字情報)は一切無い。見学者は、知りたい展示物の画像と展示物を見比べて照合し、クリックすることで、初めてキャプションを読むことができる。

Gosswald 館長は、我々のひとりに、「あなたが気になった展示物の説明を読み上げて、みんなに教えてあげて」と促した。『いつ、だれが、どうやって使っていた道具だったのか』が簡潔に説明されている。

さらに Gosswald 館長は、フロア奥にある大きなモニター画面の前に我々を導いた。そこには、先ほどのデジタル端末よりコンテンツ数の多いものが設置されていて、展示物そのものだけの説明に留まらず、展示物の時代背景や使用していた人の人生、使われていたノイケルン区内の場所のマッピングなどが、映像資料も盛り込まれた数分のショートショーコンテンツとして見ることができ、さらに詳しい内容をたどれるようになっていた。

また、展示物同士で関連があるもの(例えば、同時代、同地区、同人物など)がリンクしていて、さらに別の展示物へと辿れるような工夫も施されていた。



写真5 気になった展示物のキャプションを読む団員

■「99×Neukolln」展示の目的と仕掛け

ノイケルンの街に住む(住んでいた)人々が使っていた道具をまず「見る」ことで、自分の人生、生活に関連をつけて考え、感想を持つことを目的としている。展示物(資料)にタイトル・キャプションが一切ないことが、「一体これはなんだろう」と見学者の想像力に訴え、見学者同士が資料について会話したくなる動機付けの効果を生み出している。

これは、生きている時代が少しずつずれている者同士(例えば親子、祖父母と孫など)が、資料を共有しながら背景を語り合う場にもなる。つまり、年長者が青少年へ語り伝えるガイド役となる。

デジタルキャプション、コンテンツは、単にパネルからデジタル端末へ物理的に変換したのではなく、資料そのものの説明からスタートし、資料の使われていた背景からリンクして、人物史、生活、社会情勢、歴史とどんどん情報を追っていけるようなネットワークが組まれている。

例えば、99 点の展示品の前に設置されたデジタル端末には、99 点の画像(キャプチャー)と 99 点各々の簡単なキャプション(1~2ページで収まる量)が閲覧できる。

またキャプションの項では、[dt(独語)]、[eng(英語)]、[eazy(簡易独語)]の3つの言語を選択できるようになっている。特に[eazy(簡易独語)]では、様々なルーツを持つ地域の見学者に対し、




写真6 右下の3つの○部分で言語の選択ができる

誰でもストレス無く理解できるよう、平素で単純な言葉を使って紹介している。

大型モニターに接続されたデジタル端末、及び学習コーナーに設置された2台の PC 端末には、上記の情報に加えてさらに複数のコンテンツが用意されている。内容は以下である。

表 デジタル端末コンテンツの内容

						
[Alle]	: 99 点の画像 (キャプチャー)					
[Object]	: 各展示のキャプション					
[WissensNets]	: 詳しい解説 (人物の歴史、時代背景など)、関連する展示物や映像資料へのリンク情報					
[SuperWissensNets]	: さらに詳しい総合的な解説 (地理、郷土史)、関連する展示物や映像資料へのリンク情報					
[Story]	: 物語 (逸話)					
[Geschichtsspeicher]	: 歴史の倉庫					
[Quiz]	: クイズ					

この [Alle (全体)] では、[Was (何)]・[Wann (いつ)]・[Wo (どこで)] の3つのカテゴリーからの選択もできるようになっている。それぞれ、99 点を、事象毎、時系列、地系列のグルーピングで学ぶこともできるようになっている。

見学者は、個々の興味にあわせてコンテンツをたどっていくことで、いつのまにかノイケルンの街の地理・歴史・文化を総合的に知る環境に誘われるのだ。

またこれは、地域の歴史、地域の生活者の人生 (個人の歴史) をアーカイブし、情報を収集保管、展示する取り組みとも言えよう。

「見学者と資料の出会い→見学者同士が資料を通して経験を語る→資料の背景をデジタル情報を利用して補足し、見学者の街に対する総合的理解を深める」この一連の流れを導く為の仕掛けが行われているのだ。

『資料』として形のない『時間 (過去)』をいかに収



写真7 学習コーナー



写真8 地図で知りたい場所の情報を選択する

集・保管し、広く伝えるかが考えられた展示法といえる。

尚、99点への選定は、7000点ある収蔵品から250点にフォーカスし、さらに99点に選び抜かれたそうだ。99にしたのは、『99』が「ほぼ完璧（つまりまだ完璧ではない）」という意味を持っていること、ドイツの哲学者ブロッホの”限られた多様性”にヒントを得てこの数にしたとのことだった。1点1点が主役であり、また99点がそれぞれに補完しながら、ノイケルンの地理歴史の旅へ見学者を誘う道先案内人の役割を担っているかのようでもある。

この展示は7名の学芸員と2名の教育学者で企画構成された。通常の展示案内は4名のガイドが行う。学校教育利用の場合、15名程度で1グループを作り、ガイドを行なっている。2階にアーカイブ図書館があり学校教育担当が4名いる。週4日の勤務形態で、週2日常駐し、残り週2日は学校へ勤務するとのことであった。

■企画展について

常設展フロアの奥に企画展のエリアがあり、我々の視察時には「Das Ende der Idylle? (あのリーダーの結末は?)」と題された企画展が開かれていた。

これは、1920-30年代にノイケルン区内に建設されたブリッツ馬蹄形ジードルンク(集合住宅)に当時住んでいた人々の生活を、アパートの号室、50戸を取り上げ、そこに住んでいた家族について紹介する展示である。家族史(人物史)と共に、街の歴史も学べるようになっており、パネルとデジタルコンテンツで構成されている。

馬蹄形に動線が置かれ、ドアのデザインされたパネルの裏面に、号室と人物史が紹介されている。また馬蹄形の中心の空間にはテーブルが置かれiPadが数台設置されており、デジタルコンテンツとして、入居していた1200名の伝記(聞き取り



写真9 99点の展示一覧



写真10 図書室 右は Gosswald 館長



写真11 企画展示の様子



写真12 卓上にアーカイブ端末がある閲覧コーナー

調査で収集した情報)のデータベースが閲覧できるようにしている。

当時、共産主義でナチに迫害されていた人々も入居していたり、逆に加害者の立場の家族も、生活をしてきた。それぞれの個人情報で成り立っている展示でもあり、非常にデリケートなテーマ、情報を扱った展示でもある。

Gosswald 館長の説明によると、アーカイブ資料についての法律では、1923 年以前に生まれた人の情報は使用してよいことになっているとのことである(だから、誕生日がわからない人のヒアリング情報は使用できない)。また、子孫へ影響する先天性疾患の記録(例えばダウン症候群など)は出さないように配慮される。

この展示の目的は、見学者(特にノイケルン区の生活者)が、自分の先祖(例えば祖父、祖母)のことを客観的に知り、自分の家族の歴史を語り始めるきっかけになることである。

実際、この企画展を通して、家族内でも語られてこなかった(時に加害者側でその歴史に触れることがタブーだった家族にとって)自身の祖父母の歴史を初めて知った見学者も多くいたとの談であった。地域に生きてきた生活者の情報を聞き取り収集・保管し、見学者がそれを知り、今一度地域に生きる者として理解を深める機会を提供する、地域博物館学芸員としての強いメッセージを感じた。

極めて大人向けの展示ではあるが、その中でも特別プログラムとして青少年(子ども)向けのワークショップが展開された報告も受けた。このときは、演劇家を呼んで、子ども向けに様々な立場の住人が登場する演劇を行いながら紹介をしたそうである。尚、青少年向けワークショップは年間6回開催とのことだった。

【参考 URL】

- ・ノイケルン博物館 (Museum Neukölln) <http://www.museum-neukoelln.de/home.php>
- ・ノイケルン区 (Bezirksamt Neukölln von Berlin) <http://www.berlin.de/ba-neukoelln/>



写真13 アーカイブ端末のトップ画面



写真14 写真をクリックすると人生史が読める

(井内麻友美／葛飾区郷土と天文の博物館)

⑫ハンブルグ駅現代美術館(ベルリン)

Museum Hamburger Bahnhof

訪問日時: 2013年9月19日 午後

対応者: Ms. Anne Fräser(フリーランスエドゥケーター)、
Ms. Heike Kropff(ベルリン市顧客サービス チーフ)

1. 館の概要

かつてはハンブルグ方面に向かう駅だった建物を改修して、1996年に開館した美術館。アンディ・ウォーホル、ヨーゼフ・ボイス、アンセルム・キーファー等、1960年以降の現代美術作品を収集している。

建物の中に入ると、元々駅のホームだった広大なスペースが広がる。ほとんど壁も立てずに残された、開放的なスペースである。訪問時は、当日夜に行われるイベントの準備中であつた。自由度の高いフリースペースを活かし、時にはこのようなイベントや、若いアーティストによるインスタレーション、そして教育的観点に基づいたインタラクティブな作品を展示する場所として活用しているようだ。その横に一般的なホワイトキューブの展示室が続いていた。

2. フリーランスエドゥケーターというポジション

この館の教育普及セクションはベルリンにある国立博物館ビジターサービスに属している。教育普及セクションのスタッフは、フリーランス12人、常勤職員(責任者)1人によって構成されている。

当日対応してくれた Fräser さんは、フリーランスエドゥケーターであり、大学では教育、美術史、コミュニケーション学を学び、他都市の美術館でもキャリアを積んできた。他にもアーティストや哲学科出身者など、様々なバックグラウンドを持つスタッフがフリーランスとして関わり、その専門性がプログラムづくりに活かされ、多様な来館者のニーズに答えていた。ドイツの他館にも共通することだが、専門性の高いフリーランスエドゥケーターがいくつかの館をかけもちしながら、プログラムの現場にあたっている点が、日本とは事情が異なるところだ。日本では難しいかもしれないが、館に必要な専門性を即座に取り込むことができるのが、この



ハンブルグ駅現代美術館 外観



元々、駅のホームだった場所

体制の利点ということだった。

ハンブルグ駅現代美術館では、フリーランスエドゥケーターたちの中でプロジェクトごとに5人程度のチームを構成し、初期の企画の相談から実施までを担っている。有償のスタッフであるため、ギャラリートーク1本に対して、あるいは学校向けのキット開発に対していくら、というように対価が支払われるそうだ。

3. ハンブルグ駅現代美術館 教育プログラムについて

教育プログラムは主に3つの内容によって構成される。一つ目は「ガイドツアー」。一人のエドゥケーターが中心になって作品解説を行うタイプのプログラム。できるだけ参加者の声も引き出す工夫をしているそうだ。これは子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にしている。

二つ目は「対話によるやり取りを楽しむ鑑賞」。いくつかの作品を選んで対話を通して鑑賞する。

そして三つ目が「ワークショップ」。まず展示会場に行き、作品を前にディスカッションをしたのち、アトリエに戻ってきて造形の体験につなげるプログラム。残念ながら個々のプログラムを見学するチャンスはなかったが、今回の見学では特に「学校プログラム」について詳しく話を聞くことができた。

(1) 学校向けプログラム

Fräserさんが一つのかごを差し出してくれた。「中から一つずつ取ってください」という言葉に導かれ、布をかぶせられたかごに手を入れて取ったものを見ると、どれも見慣れた日用品である。

「これは『中国のかご』と呼んでいるものです。子どもたちは、見慣れたこの日用品と作品の関連が分からないまま展示会場に行き、作品のどの部分に自分が手に取ったものがあるかを探しに行きます」。そして見つかったところで、手にしたものと作品の関係性について考えさせる問いかけを、エドゥケーターが行っていく。色が同じだからなのか、形が同じだからなのか、あるいはもっと哲学的な背景があるのかもしれない…と、子どもたちは作品のイメージを拡げていく。

このプログラムが、前出の二つ目のプログラム「対話によ



右が Fräser さん



ワークショップスペース



かごから出てきた様々な日用品

るやり取りを楽しむ鑑賞」の手法だ。エドゥケーターは知っていることを先に伝えることはしない。美術史的な見方から入るのではなく、子ども一人一人の背景を含めて生まれてくる思いを大切にしている、とのことだった。シュベリーン州立博物館でも動物のフィギュアを使って、子どもたちの動機づけを行っていたが、ここでも親しみやすく身近なものから作品に入るという導入方法をとりながら、さらに対話を通して創造的な鑑賞に子どもたちを導いていた。



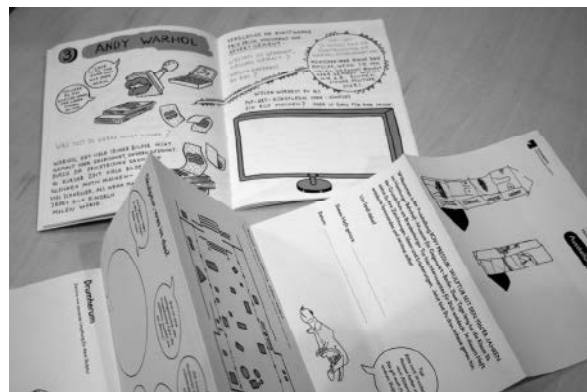
ヨーゼフ・ボイスの作品をイメージするための脂のかたまり

この『中国のかご』のようなキットは、展覧会ごとに用意されている。ヨーゼフ・ボイスの作品でも、同じように素材の袋を用意している。作品には触れることができないが、作品に使われている脂やフェルトは触ることができる。子どもたちは見るだけでなく、触覚を含め他の感覚も総動員して、作品と向き合うことができる。用意している素材はあくまでもきっかけであって、子どもの関心をその後どのように発展させていくかは、エドゥケーターが子どもとの対話でどこまで引き出していかにかかっている。子どもの反応を常に見ながら、徐々に出てくる質問に答えながら一緒に見ていく、ということを Fräser さんは大切にしていた。

(2) 学校とのプロジェクト 模造品作品展やワークシート

学校はクラス、クラブ単位で来るけれども、基本的に2、3時間の活動で終わってしまう。もっと長期的な協力関係の上に成り立ついくつかのプロジェクトを学校と連携して行っていた。ある時は、展示されている作品の模造品をつくる工房をつくり、学校で作品展を行ったらしい。さらに美術館の中でも同じ作品展を行ったそうだ。現代美術を見ると「私にもできる！」という子どもたちが多く、実際に自分でつくって描いてみることで、何故このような表現をしたのかを理解できるようになるという。

“BODY PRESSURE”という企画展では、家族と一緒に来館する子どもたちのために、小学校3年生22人とワークシートをつかった。展覧会がオープンしたのち、子どもたちを美術館に招待し、2日間ほど展覧会を見てからアイデア出しの作業に入ったとい



ワークシート

う。アイデアはすべて子どもたちから生まれ、あとはグラフィックデザイナーがレイアウトをアレンジして完成した。子どもの絵も所々に入り、なんとも可愛いワークシートに仕上がっている。質問

の内容も子どもたちが考えたそうだが、その中には作品のことだけでなく、「他の来館者の人たちがどのように作品を見ているか、観察してみよう。そのあと、自分だったらどういう順路をたどるか書いてみよう」という質問が入っているのが印象的だった。ドイツの美術館教育では、作品そのものの話だけでなく、美術館とはどういう場所か、ということも子どもたちに丁寧に考えさせようとしている。造形教育ではなく、鑑賞教育をメインにスタートしたドイツの美術館ならではの背景があるからなのかもしれない。

【参考 URL(ドイツ語、英語)】

<http://www.smb.museum/en/museums-and-institutions/hamburger-bahnhof.html>

(岡崎智美／横浜美術館)

⑬ 子ども博物館 MACHmit！（ベルリン）

MACHmit! Museum für Kinder

訪問日時：2013年9月20日 午前

対応者：Ms. Marie Lorbeer（館長、2012年度来日）

Ms. Uta Rinklebe（スタッフ、2013年度来日）

1. 館の概要

館の名前“MACH Mit！”とは、「一緒にやってみよう！」という意味。建物の中に入った瞬間から、子どもたちが自分から「やってみたい！」という気持ちを起こさせるハンズオンの仕掛けに溢れた博物館である。

ここはベルリン市内に4館ある子ども博物館の内の一つ。ベルリン中心街から電車に乗って1時間ほどの場所にある。1991年にオープンし、現在の場所には2003年にかつて教会だった建物を75年後に返還する契約で借用し、移転してきた。

子ども博物館であるだけに4歳～12歳の子どもがメインターゲット。年間6万人の来館者を得ている。内訳は学校での来館が半分、親子での来館が半分のことだ。

1階に企画展会場と活版印刷機のある印刷工房やショップ、2階にはアスレチック施設、ワークショップスペース、カフェがある。

社団法人を母体とし、補助金をベルリン市（2008年以降の芸術教育に対する補助）から得ているが、予算の殆どは入場料やプロジェクトごとの助成金でまかなわれている。スタッフ30人のうち、常勤が10人、フリーランスが20人とのことだった。

2. 子どものための企画展、ワークショップ

コレクションは持たず、9か月～1年のスパンで企画展を開催している。子どもの日常に関わりのあるテーマを軸に企画された内容となっている。展示室内は子どもの五感を刺激するハンズオンの展示をメインにさまざまな仕掛けが用意されている。訪問時は「昔のローマ人と私たち」というテーマで企画展が開催されていた。ローマ時代の建造物を再現した展示室の中を、ローマ風の衣装を着た子どもたちが、ガイドに案内されている様子を見ることができた。小さな子どもは衣装を



MACHmit！外観



展覧会展示風景

身に着けることで一気に気分が盛り上がる。展示の一部には鏡で囲まれたコーナー(常設)があり、そこで変身した自分の姿が普段とどのように違うかを比較して楽しむこともできる。ガイドツアーは年齢によって内容を変更しながら行っているようだ。

ガイドツアーの最後には、常設の古い活版印刷の機械が収められた印刷工房があり、ここで子どもたちに昔の職人の技術を伝えている。自分で好きな文字を選んでカードを印刷することもできる。「学校ではない場所だから、ワークシートも違ったものにしたい」というスタッフの思いから、この活版印刷機が導入されたようだ。館で配布されているアンケートやワークシートもここで印刷された味わいのあるものだった。

ここの展览会やワークショップのテーマには、子どもの権利やドイツ連邦議会選挙など、一見難解と思わされるものもある。それでも親しみやすい切り口を設けながら、子どもに自分で考えさせるところまで導く手法は、子どもをメインターゲットとした子ども博物館ならではの力量によるものと感じた。

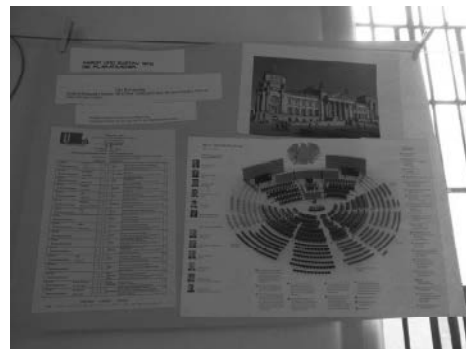
3. その他施設、ワークショップコーナー

2階に上がる途中にパイプオルガンがあった。教会でかつて使用されていたパイプオルガンが最近、募金によって修理され、近々お披露目のコンサートが開催されるとのことだった。2階には大人気のアスレチックがある。返還を条件としているため建物の躯体に手を付けられないことの難しさはあるが、元々揃っている条件をうまく事業に活かしていた。

アスレチックのジムの下にはワークショップコーナーがあり、ここでつくったものは持ち帰ることができる。さらに2階には明るい雰囲気のカフェもあり、子どもが遊んでいる間、親はこのカフェでくつろいでいるのだそうだ。ここにはオーガニックな食べ物やドリンクが用意されており、子ども博物館とは思えないオリティのメニューだった。また、この場所のテーブルや椅子は子どもたちとのワークショップでつくられたもので、中にはブラシが付いたユニークな椅子もあり、選んで座る楽しみに溢れている。



ハンズオン展示は子どもの目線に合わせて



ドイツ連邦議会選挙に合わせ、子ども選挙が行われた



印刷工房



ワークシート

4. 子ども博物館について（Lorbeer 館長によるレクチャー）

ドイツでは 1980 年代から子ども博物館のニーズが高まってきた。その当時、博物館教育活動が活発化したものの、作品保存を重視する学芸セクションと折り合わず、ハンズオン展示を導入するために子ども博物館の需要が高まり、各地で設立された。

ドイツの子ども博物館の歴史も 30 年を経たことになるが、近年少しずつ展示に対する考え方が変わってきているようだ。ハンズオン(HANDS ON)よりもマインズオン(MINDS ON)、つまり、子どもたちが自ら考えることを重視するようになってきたようだ。一過性の楽しさよりも、提示されたテーマを未消化でも家に持ち帰って家族や友達と話し合い、それがどのように子どもたちの日常に戻っていくかが大事、という考え方だ。子どもたちの興味をより惹きつけるため、最近はオリジナルの体験も取り入れるようになってきた(ローマ展でも本物の発掘品が展示されていた)。

また近年はターゲットグループを拡大し、高齢者を対象にしたプログラムも意識するようになったようだ。高齢者を招待して昔語りをしてもらう会や、凧をつくるワークショップなど、世代間交流が生まれるプログラムも行われている。

5. 所見

子どもは成長すれば子ども博物館のターゲットから外れてしまう。子どもが親になってまた戻ってくることもあるが、常時通ってくる来館者を得ることは難しく、地域社会との取組はあまり行われていないとの話だった。住宅地に密接した立地を活かして幅広い世代の来館者を呼び、いかに地域のコミュニティの核になっていくかということも、子ども博物館のこれからの取組みとなっていくのかもしれない。

【参考 URL(ドイツ語、一部英語)】

<http://www.machmitmuseum.de/>

(岡崎智美／横浜美術館)



アスレチックの下には
ワークショップコーナーが



カフェの椅子とテーブル



左から 2 番目が Lorbeer 館長、
3 番目が Rinklebe さん

⑭ベルリンの壁記念センター

Gedenkstätte Berliner Mauer

訪問日時: 2013年9月20日(金)15:00~17:00

対応者: Dr. Sarah Bomhorst

1. ベルリンの壁記念センターとは

1965年に生まれ、70年代・80年代に青少年期を過ごした私にとって、米ソの対立・東西冷戦はいわば日常であり、東西ドイツの分裂・ベルリンの壁の存在はその象徴でもあった。20世紀中に壁が崩壊し、やがてドイツが統合されるとは想像できなかったことであり、1989年、講師をしていた塾の教室で興奮気味に壁の崩壊について語ったことを記憶している。

1961年8月13日以来、155kmにわたって西ベルリンを取り囲んだ壁は、1989年11月9日に崩壊した。当時多くの人々は壁を残すなどとは考えていなかったが、1998年、公式にベルリンの壁記念センターは設立された。分断にまつわる歴史的事件が数多く起こったベルナウアー通りを保存区とし、一部に最終形態の壁を保存している。センターは「ベルリンの壁財団 Stiftung Berliner Mauer」によって運営されている。ドイツ連邦政府とベルリン州が運営資金を負担し、野外部分についてはEUの援助も受けている。4人の研究者、4人の来館者サービス担当、普及担当1人、管理人ほかフリーランスのガイドを含めて24人ほどが勤務し、資料・記録の収集・研究と普及、犠牲者の追悼などを行っている。

普及の主たる方法として、ガイドツアーとセミナーがある。ガイドツアーを担当するのはフリーランス、15人が登録しており、基本は予約制、1人から35人まで受付け、日曜日は予約なしでも参加できるシステムがある。英・仏・伊・西の多言語に対応している。ガイド料は11人までが30ユーロ固定、11人を超えると3ユーロ/人となる。学校団体は無料。ガイドは自らコースを考案し、面接やテストなどの評価を経て業務にあたる。1500件/年のツアーを実施している。いっぽうセミナーは11人以上、13才以上18才までのグループを対象とするのが中心である。約90分~180分の時間で、証言者との対話を行ったり、当時の写真と現在の写真を比較したり、伝記を調べたり、ドキュメンタリー映画の分析をしたりする活動を行っている。ガイドツアーにおいてもセミナーにおいても重視しているのは参加者との「対話」である。特にセミナーにおいて参加者が証言者と対話するときは事前に資料を渡し、予習を義務づけているとのことである。

2. ガイドツアー

はじめにガイドツアーを体験した。ガイドはまず1945年の連合軍によるドイツの分割占領から話を始め、センターを出発してベルナウアー通り沿いの約300mを約1時間かけてガイドした。この間にオリジナルの壁、「死の道」と呼ばれた警備兵の巡回路、「記憶の窓」と名づけられた、壁の犠牲者を追悼するモニュメント、事件の起こったところにはめ込まれたプレート等がある。「原



ベルナウアー通り沿いのベルリンの壁 最終形態「75」
右が西側、左が東側(緩衝地帯) 壁はあまり厚くない。

「状態保存区」には、オリジナルの壁、幅約 35m の緩衝地帯を挟んだ第 2 の壁、オリジナルの水銀灯、オリジナルの監視塔がそのままの姿で残されている。第 2 の壁には少しの隙間があり、緩衝地帯を覗けるようになっているが、本来はこのような隙間は空いておらず、覗けるように組み替えたとのことである。そば降る雨の中、ガイドは壁の機能や壁にまつわるエピソード、当時の人々の生活について、しっかりとした口調で我々に解説してくれた。

3. ディスカッション



Dr. Sarah Bornhorst 女史
背景のスライドは原状保存区

ツアーの後でディスカッションを行った。「壁が崩壊して 20 年以上が経過するが、若い世代は壁があったことについてどのように感じているのか?」という質問には、「セミナーの参加者に、壁について知っていること、家族から聞いたことは何かないか?と問いかけるようにしている。400 万人が東から西に脱出しているので、かつての西側領域に住んでいる人の中にも、脱出経験のある人が家族や知人にいる事例は多い。だから若者たちにとっても、壁への関心はナチ統治時代についてよりも高い。若者たちへのアプローチも工夫している。若者たちと同じ年代の人が関わった事件のモニュメントに行き、そこで自分の問題として考えさせる、ということもやっている。」とのことであった。

また、「壁をつくった東ドイツはよくないもの、というような、いわば一面的な見方にならないような事を意

識しているか?」という問いには、「残念ながら壁が築かれた理由にしても、壁によってもたらされた結果も、ポジティブな面はみつけることができない。壁の意味と影響を考える限り、壁が人々の自由を奪っていたということは疑いようのない事実である。とはいうものの、東ドイツの兵士が皆悪い人間であったわけではないし、逃げた人が皆よい人であったわけでもない。東ドイツの政策

には問題があったが、西ドイツ政府も、壁の存在を逆手にとって自国の政策に利用しようとしていたこともあったし、80年代頃は皆あきらめていて、東側の反体制運動を無視する傾向もあったなど、批判されるべき点も多くある。これらのことも伝えなければならない。

このセンターの役割は壁の意味と影響について紹介することであるが、実際にはガイドツアーの参加者の間で分裂時代の東西それぞれの人々の生活に話題が転じてしまうこともおこる。西でも東でも、人々の日常生活には、楽しいことや悲しいこと、さまざまな側面があった。東ドイツでも、東ドイツのルールを守ればそれなりによい生活はできた。いっぼう、ひとたび逃げようとしたり、自由を声高に求めたりしてルールを破れば、すぐに厳しい現実が待っていた。しかし例えばガイドツアーの参加者が『東の生活はよかった』と発言しても、『それは間違っている』と否定することはしない。その発言をきっかけに、壁の意味や影響について対話と考察を進めることができるし、対話と考察が進むよう努力していかなければならない。」ということであった。

4. 所感

ベルリンの壁が崩壊して四半世紀近くが経過している。長い時間が経ったという気もするが、四半世紀程度の時間では、まだ社会の大多数の人が当事者であるともいえる。ベルリンのなかでさえ東と西とで所得格差がいまだに存在すること、東へは決して足を運ぼうとしない西の人がおり、同じように西へは決して行こうとしない東の人がいるということも耳にした。ベルリンの壁は、記念物ではなく未だに現実のものとしてとらえざるを得ない人がいるのだろうということ、親世代・祖父母世代が当事者であるドイツの若者たちにとっても、まだ生活に密着した、家族の具体的な問題なのだろうということを感じた。当事者とそうでない者の間には埋めることのできない深い溝があると思うが、当事者でない者が少しでもその溝を浅くするためには、やはりしっかりと学ぶこと、そして想像することが大切であるし、同時にそのことしかできないと思った。博物館に勤務する者として、社会に生きる者として、どのようにものごとに関わっていくかを改めて考える機会となった。

(池内一誠／九州国立博物館)

⑮写真博物館(ベルリン)

Museum für Fotografie

訪問日時: 2013年9月21日(土) 9:30~12:30

対応者: Ms. Antje Nolte (教育普及担当者、2013年度来日)

Dr. Derenthal (写真部門責任者)

Ms. Katrin Boemke (“Jugend im Museum”についての解説、2012年度来日)

1. 施設の概要

ベルリン写真博物館は、17の博物館と4つの研究所からなるベルリン国立博物館群のうちの一つ。連邦および州の財政援助により運営されるドイツ最大の博物館施設(組織群)の一機関として位置づけられている。この博物館群に含まれる各館の所在地は、「ベルリン博物館島」(1999年にユネスコ世界文化遺産に指定)、ポツダム広場文化フォーラム(ティーアガルテン)、シャルロテンブルク、ダーレム、ケーペニックなど複数の箇所に分かれており、写真博物館はそのうちのシャルロテンブルク地区に位置する。

ドイツ国内では1990年代から国立の写真博物館を作るべきとする動きがあり、2004~2010年にかけて旧カジノであった建物を段階的に改修。国立ベルリン博物館群の写真コレクションを美術図書館の一部門としてまとめ、この建物内においてこれらを研究し公開・展示している。ドイツ国内には写真専門博物館はさほど多くないため、国内外から非常に注目を集めている博物館である。来館者は年間約15万人。そのほとんどが団体ではなく個人来館者であり、国外からの来館者も多い。コレクションの特徴のためか、ドイツ国内の学校単位での見学は少ない。

同じ建物内には、ヘルムート・ニュートン財団も置かれており、写真家ヘルムート・ニュートンの写真作品(約1000点)や所有品、洋服などを常設展示するスペースも併設する。館内には、展示室、資料室、図書室、学習室・読書室、修復工房などがある。

2. 教育普及活動

(1) 現状

1週間に2回のガイドツアー(定期的実施)のほか、学校単位での鑑賞会や、写真の歴史などテーマ別各種ワークショップも行っている。しかし、来館者の多くは自分自身で作品を鑑賞する傾



向にあるため、ワークショップやガイドツアーは多く利用されているという印象はない。

展示内容(例:ヘルムート・ニュートンの作品=ヌード写真なども多い)の性質上、基本的には子供をターゲットとしておらず、どちらかといえば成人向けである。そのため、現在は青少年来館者が少ない。過去に青少年向けのプログラムを実施し学校にも呼びかけたが、あまり参加数が伸びなかったという。今後さらに青少年の来館者を増やすことが課題となっており、青少年をターゲットにした様々な教育プログラムを行っている。

教育普及担当者は、将来的には館内にアトリエを作り、写真撮影や現像などの体験ができるようにしたいと願っており、こうした活動を学校と連携ができればよいと考えている。

(2) スタッフ

5人のフリーランスのガイド、1名のプロ写真家が教育普及に携わり、学芸員の協力も得ながら各種ワークショップやガイドツアーを行っている。今回案内してくれた Antje Nolte 氏は写真博物館以外に3つの仕事を兼務しながら複数個所で教育普及活動をするエデュケーターとしての役割を果たしている。一般向けワークショップのほか、ガイドや教師のための研修も行う。

(3) ワorkshopとガイドツアー

ターゲット、料金、内容も多種多様なワークショップを提供するが、まだ十分な成果を上げてはならず、2年前は34件の青少年向けプログラムを考案し募集をしたが、実施できたのはわずか6件であった。それでも青少年向けワークショップでは、人気のプログラム(例:アナログ写真撮影法、PC 実験室(PC を分解してその仕組みを学ぶ)、裁縫プログラム(洋服を作る)など)には多くの申込みがある。

例えば現代の子供が知らないアナログカメラの世界を学ぶワークショップは人気が高い。これらのプログラムでは、1日6時間×2日間(土日実施、合計12時間)のプログラム、対象者は14歳～17歳の青少年、定員12人程度(6名×2グループ)、参加費は30ユーロ/人というプログラムがある。そのプログラムでは、専門家(カメラの専門知識を持ったフリーランス・アーティスト)リフレックスカメラの構造、36ミリカメラやフィルムの使い方、フィルムの現像や撮影手法(動きの速い



物や静物など撮影対象に合わせた撮影手法)などを学ぶ。近年では、デジタル処理(パソコンを使った RGB やカラー調整)などについて学ぶプログラムなど時代に合わせた講座も設けている。また、撮影技術、機器の操作などの技術面だけでなく、展覧会に合わせてテーマを決めて写真の歴史もレクチャーする。ワークショップの講師には、教育の専門家ではなくアーティストやカメラマンなど専門知識を持った人材を雇うことが多い。

我々の訪問時には、写真家によるアナログカメラ撮影ワークショップ(実際にフィルムを使ったものではなく、PCとソフトを使って疑似体験ができるというもの)を体験させてもらった。

(4) その他の社会的支援活動について

博物館では、社会的弱者に対していくつかの支援活動を行っている。

一つ目は、「Kultur Loja」(経済的に恵まれない家庭にベルリンパスというパスが支給され、様々な支援を得ることができるという制度)を利用した支援活動。博物館では、ワークショップに空きがあるようなときにこの制度を利用し、こうした家庭の子どもたちを無料で招いてきた。二つ目は、博物館の所在する zoo 駅周辺はホームレスが多いため、若いホームレスの社会的支援活動を行うことも博物館の使命の一つとされている。過去にはソーシャルワーカーの団体などと協力をしながら、青少年ホームレス向けのワークショップ、ガイドツアー、無料鑑賞会などを行っている。

3. “Jugend im Museum”の活動について

写真博物館訪問時には、上記の博物館自体の活動のほかに、Ms. Katrin Boemke よりベルリン地区の教育普及活動を行っている社団法人「Jugend im Museum(美術館・博物館における青少年)」についての詳しい説明を受けたため、以下に簡単にまとめておきたい。

(1) 「Jugend im Museum」とは？

この団体は、博物館の活動を通して美術工芸の鑑賞と創作両方の力を身につけ、実際に体験することで博物館のリピーターとなる青少年を育成することを目的とし、博物館に勤務する職員を中心に組織した社団法人である。組織的には、正規職員 4 名(週 30 時間勤務が 2 名、週 20 時間が 1 名[今年はそれに加え助成金を取得し、さらに 1 名を 2 年間の有期採用をしている])で構成される。他にガイドツアーやワークショップを行うためのフリーランス(主に芸術家)が約 50 名所属する。経理などの事務業務はアウトソーシング。理事会メンバーおよび顧問(6 名)は名誉職(無報酬)で、この団体の活動を各方面から支援・指導している。

(2) 予算規模

年間予算のベースとなるものは、対象となるワークショップの参加チケットの売上金が年間 36 万ユーロ、ベルリン省からの助成金 21 万 3,100 ユーロ。ほかに、社団法人会員 400 人の年会費収入 1 万ユーロ。これだけの予算が確保できては十分ではなく、各プロジェクトは援助金を得て実



施することも多い。ちなみに、人件費は、フリーランス(主に専門家)の時給は 25 ユーロ、ワークショップへの参加費は 1 時間 2.5 ユーロ/人。

(3) 近隣組織との協力体制

博物館内だけでなく、子供たちの住む地区の中でも活動を行っている。また、1つのプロジェクトで複数の博物館に行くなどの協力体制も組んでいる。1週間に1回学業に支障のある生徒が通っている学校に行き、1年間続けたプロジェクトを行ったという実績もある。

(4) プログラム内容と活動実績

- ①個人来館者向けワークショップ(各種); 毎月曜日に開催。1回きり、または連続参加のいずれも可。この種のワークショップは、年間 120 件を提供し、うち 90 件程度を実施。
- ②「博物館の中の夏休み」というプログラム; 3~4 日間連続のワークショップで、同時に最大 70 名まで参加。
- ③「クリエイティブな家族の日曜日」というプログラム; 家族単位で参加できる 3 時間のプログラム。各博物館で年間 34 回程度実施。
- ④博物館で誕生会をするプログラム; 展示鑑賞、誕生会、ワークショップをセットにして全 3 時間のプログラム。年間 240 回程度実施。
- ⑤学校との協力プロジェクト; 2004 年から開始し、年間 160 回程度実施。1回約 3 時間で、数日かけて行う場合もある。実施場所は博物館のみならず学校で行う場合もある。
- ⑥定期雑誌の刊行; 2011 年以降、青年向けプログラムを掲載した冊子を刊行。年間 2 回発行されるこの雑誌に、これまで 50 回実施したプログラム内容の報告を掲載。

4. まとめ

ベルリン写真博物館では、専門家との協力体制のもと、様々な角度から社会支援を含めたプログラムを提供しているが、地域へのアウトリーチ、教育普及と言う観点からすれば、今後の課題はまだ残されているといえよう。例えば、ガイドや教師などに研修も行き、この博物館の特徴やコレクションを紹介する活動はしているものの、ベルリンは多宗教徒(例:イスラム教徒など)が多い地域であり、展示内容(ヌード写真ほか)が学校単位の見学にふさわしくないとして、学校単位の鑑賞会は成立しにくいという現状がある。学校側が消極的であるため、現在は、博物館側からは積極的に教育活動を働きかけることをしていない。また、内容の充実したワークショップの参加費は 30 ユーロ、12 時間のコースとなっており、経済的、時間的に余裕のある家庭の子どもでないと参加しづらい傾向にある。さらに、写真(撮影する)ということテーマにしながらも、著作権の都合により館内は写真撮影禁止の場所が多く、作品にも個別の作品解説をつけておらず、利用者に対し敷居が高いという印象を受ける。こうした制約がある中で今後の活動をどのように広げていくかという点、ワークショップのための十分な設備を整えていく点等が今後の課題となるように見受けられた。意欲的なスタッフも多く、今後の教育普及活動の発展にも期待したい。

(高橋美奈子/山種美術館)

⑩ベルリン国立博物館群

Staatliche Museum zu Berlin

訪問日時:2013年9月21日(土)

対応者:Dr. Heike Kropff(ベルリン国立博物館群ビジター・サービス部長)

Prof. Dr. Bernhard Graf

(ベルリン国立博物館群博物館研究所長、ベルリン自由大学名誉教授)

1. ベルリン国立博物館群について

ベルリン国立博物館群の教育普及活動は、ビジター・サービス部が所管し、各館のスタッフと協力して展開される。ベルリン国立博物館群は、プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム3世の王立博物館を起原とする博物館・研究所群を指す。プロイセン文化財財団がベルリン州やドイツ連邦の助成を受けながら、18(数え方によっては17とされる)の博物館と、4つの研究所を管理・運営している。

今年8月からビジター・サービス部長を勤めている Dr. Heike Kropff、および、20年にわたり博物館研究所長を勤めている Prof. Dr. Bernhard Graf によって行われた講義について、ウェブサイトからの情報を参照して補足しつつ、報告する。

2. ビジター・サービス部について

ビジター・サービス部は、所管する博物館での教育活動を含む来館者対応に関する業務を担当しており、企業等に委託することもあるが、広報やガイドツアーの受付、ホームページの管理やキャプションの作成、260人程登録されているフリーランス・スタッフ【筆者注:ガイドツアーを行う有給のスタッフ。いくつかの施設を掛け持っている場合が多い。採用にあたっては、ガイドの経験や資料の関連領域に関する知識が問われることが多いようである。】の管理も行っている。

ビジター・サービス部は約25人の常勤職

員で構成される。そうした職員の多くは、博物館教育を大学で専門してきたということではなく、例えば、大学では芸術史やドイツ語の教育等関連する領域の学問を専攻し、博物館での実務経験を通してキャリアを形成する職員が多い。ただし、今後新たに職員を採用する際には、博物館教



右から、写真美術館の Ms. Antje Nolte、通訳の Dr. Heike Patzschke、ビジター・サービス部長 Dr. Heike Kropff、博物館研究所長の Prof. Dr. Bernhard Graf

育に関する知識や経験も重視するつもりである。

ビジター・サービス部として今後検討したいことは、①博物館教育の内容、②博物館教育とドイツの教育制度との関係、③ターゲット・グループに関する調査とその対象にふさわしい博物館教育のテーマや内容、④ネットワークに対する評価が挙げられる。また、様々な場面における教育の議論の中で博物館教育がテーマの一つとして検討されること、博物館教育の担当者がキュレーターやコレクション担当者と対等に扱われることの必要性を感じている。例えば、先に挙げた、③ターゲット・グループに関する実態調査に関連して、ベルリン市内にどのような人がいて、その中で誰に来館してほしいのかを分析したいと考えている。移民の背景を持つ人が多いベルリンでは、そうした人達にどのように来館してもらうかについて検討を進めている。そうした背景をもつ来館者に対する博物館教育のテーマとしては、異文化コミュニケーションに関することが有効だと想定している。他にも、障害者や学生にも博物館との関わりを深めてもらいたいと考えている。

ドイツでは2000年に実施されたOECDのPISA調査の結果を受けて文化・教育に対する関心に高まりがみられた。文化の振興や、それに関する教育は、学校教育だけではなく学校外教育と共に展開されるべきものと考えられ、学校外教育の場として博物館を位置づけることができる。博物館には、芸術や文化に関する専門知識があり、そうした知識をどのように教授すべきかについても情報が集められている。このことはベルリン国立博物館群だけでなく、すべての博物館に当てはまる重要なことである。博物館は所蔵する資料やテーマに応じて、それぞれにふさわしい方法で文化を教授することができる。学校教育とは異なる教育方法を持っていることを認識し、そのことをチャンスとして生かしていく必要がある。

ベルリン国立博物館群のビジター・サービス部のように、様々な規模や館種の博物館の博物館教育を所管するということは、ドイツ国内ではケルン市やニュンベルク市、ハンブルク市にも見られる。ベルリン市の様な大都市に博物館等の文化財施設が点在する場合、こうした連合組織は、それらがお互いに共通点を見いだしたり、情報交換を行ったりするうえで有効だと考えている。例えばハンブルク駅現代美術館とペルガモン博物館とでは、当然異なる博物館教育の内容やテーマを考える必要がある。しかし、同時に、共通して検討すべきことも多いと考えられる。特に、教育方法や品質保証の方法については、例え館種が異なっても、共通して検討する必要があると言えよう。また、博物館教育が直接的に関わることではないが、ベルリン市内の文化遺産の多くは博物館島(Museumsinsel)と呼ばれる地区に集結しているため、それらをまとめて保護するという観点から、連合組織をもつことの意義が感じられる。一方で、組織が大きい為に制度や組織に変化を起こすことが難しくなるというデメリットもある。

博物館教育を、学校教育との比較を通して特徴付けられることに、オリジナルとの出会いが挙げられる。博物館の多様性に応じて、博物館教育も多様な方法・内容で展開できるという点も特徴の一つとして考えられる。ただし、ドイツの学校教育でもプロセスを重視する学校が増えており、博物館教育と学校教育との共通点が全くないとは考えていない。両者を分断して考える必要はなく、いかに、継続的な教育を提供するかが重要である。

3. 博物館研究所について

ベルリン国立博物館群を構成する4つの研究所の1つに、博物館研究所 (Institut für Museumsforschung) がある。博物館研究所が調査・資料収集する対象として、博物館運営、博物館教育、教授法、博物館における新しいメディアの使い方、“博物館と法”、博物館に関する統計、来館者調査と事業評価のプロジェクト、ヨーロッパのプロジェクト、博物館のドキュメンテーション、博物館のセキュリティ、博物館業務の技術的な側面がある。これらのプロジェクトや調査項目



会場はペルガモン博物館内の一室。

目は様々な主題から構成されており、その結果は公表されることになる。関連する調査プロジェクトの科学的な結果は、文書化して博物館が活用できるように整えている。

以下、Dr.Bernhard Graf による講義をまとめる。

ベルリン国立博物館群を構成する博物館等の文化財施設には、それぞれの歴史があり、教育についても意識されてきた。例えば、古い博物館 (Altes Museum) と新しい博物館 (Neues Museum) は、それぞれ設立趣旨の一つとして博物館教育が掲げられていた。古い博物館は、その建築を行ったカール・フリードリヒ・シンケル (Karl Friedrich Schinkel) が、「オブジェクトの美しさを伝えること」というコンセプトを持ち、新しい博物館にも、教育的な理念が存在していた。現在、キュレーターの多くは、博物館教育は担当が行えばいいと考えている。しかし、全ての博物館職員は、教育について考える必要があると確信している。かつて自分が博物館に勤務していた際、「教育普及のキュレーター」という肩書きだった。国立博物館群でも、この考え方を導入したいと考えている。

ドイツ国内の博物館について、いろいろな角度から博物館について考えることができる。発展の可能性はまだまだあると考えている。ドイツ全体には約 6,560 館の博物館がある。その内約 800 館が美術館で半分は郷土資料館である。当然、博物館教育に対する考え方もそれぞれ異なり、その性格も広報活動や知識の普及、学校外教育と幅広い。ドイツ全体の博物館には年間約 1.1 億人が来館している。来館者が多いから博物館を大切にしたいというのではなく、博物館は社会の記憶を守るという重要な役割を果たしているから、その存在を重視している。資料やコレクションを守る機能もあり、資料を持っているから博物館教育が出来るのだと考えている。大事なことは、博物館の中に展示があるだけでなく、それに関連して“おもしろいこと”を話せることである。

<参考> ベルリン国立博物館群が所管する博物館・研究所は以下の通りである。

(○は博物館、●は研究所)

MUSEUM ISLAND BERLIN / MITTE

- ①ペルガモン博物館(Pergamonmuseum)
- ②新しい博物館(Neues Museum)
- ③古い博物館(Altes Museum)
- ④ボード博物館(Bode-Museum)
- ⑤古いナショナル・ギャラリー(Alte Nationalgalerie)
- ⑥フリードリヒ・スヴェルダー教会(Friedrichswerder Church)
- ①中央アーカイブ(Central Archive)

KULTURFORUM / TIERGARTEN

- ⑦新しいナショナル・ギャラリー(New National Gallery)
- ⑧オールドマスター・ペインティングス(Gemäldegalerie – Old Master Paintings)
- ⑨装飾美術博物館(Museum of Decoartive Arts)
- ⑩版画陳列館(Kupferstichkabinett)
- ⑪ハンブルグ駅現代美術館(Hamburger Bahnhof)

CHARLOTTENBURG

- ⑫ベルググリュエン博物館(Museum Berggruen)
- ⑬シャルフ・ゲルステンベルク美術館(Collection Scharf-Gerstenberg)
- ⑭写真博物館(Museum of Photography)
- ②ラートゲン調査研究所(Rathgen Research Laboratory)
- ③レプリカ工房(Replica Workshop)

DAHLEM

- ⑮民族学博物館(Ethnological Museum)
- ⑯アジア美術博物館(Museum of Asian Art)
- ⑰ヨーロッパ文化博物館(Museum of European Cultures)
- ④博物館研究所(Institute of Museum Research)

KÖPENICK

- ⑰ケーペニック宮殿(Köpenick Palace)

(加藤由以／社会教育実践研究センター)

⑰その他の訪問先

●シュベリーン城(シュベリーン)

Schloss Schwerin

訪問日：2013年9月17日(火)

シュベリーンは、現在はメクレンブルク・フォアポンメルン州の州都で、旧東ドイツ領である。ワイマール共和国以前は、メクレンブルク・シュベリーン公領の都として栄えた。

シュベリーン城は、もとは16世紀代に建てられたが、この地の領主メクレンブルク家において、メクレンブルク・シュベリーン大公国時代の1850年代に大幅に改修されて現在の姿となった。この時の当主の私設美術館が現在のシュベリーン州立博物館の原型である。博物館は城の堀を隔てた外側に隣接する位置に建設されている。

城の建物の中は、展示施設となっており、庭園も堀や湖とあいまって美しく、かつての優雅な様子を忍ばせる。

城内では、内装などの装飾の様子や王侯貴族の調度品、絵画、陶器類などの美術工芸品の見学ができる。ガイドツアーも行われており、学校団体の利用も多いとのことであった。見学のための音声ガイドもある。

展示物については、内装など建築物に付随する部分はオリジナルだが、調度品は、往時の様子を再現できるものを購入して展示しているという説明であった。1918年のドイツ革命で領主は城を追われたが、城内のものは持ち出しても良いという条件であり、めぼしいものは持ち去られたため、現在は購入品で補っているとの説明であった。

なお、シュベリーンは、昨年度は訪問しておらず、今回が初めての訪問であった。



シュベリーン城の外観



シュベリーン城の建物内部

(久下 実／広島県立歴史博物館)

●国会議事堂(ベルリン)

Deutscher Bundestag

訪問日：2013年9月19日(木)

昨年度に引き続き、国会議事堂を訪れ、ガイドツアーに参加した。施設の概要等は、昨年度の報告に詳しく掲載されているので、重複を避けたい。

現在の議会については Bundestag(連邦議会)の名称を用いるが、歴史的な経緯から、建物については Reichstag(帝国議会)の名称を用いて表記することもある。建物の正式名称は Reichstagsgebäude am Sitz des Deutschen Bundestags(ドイツ連邦議会のおかれた帝国議会の建物)と呼ぶ。

入場には事前に予約が必要で、入場時にはパスポートなどの身分証明書の提示が求められるとともに、手荷物検査も行われる。

ガイドツアーで案内された場所のうち、昨年度のレポートにはなかった「祈りの空間」について触れておきたい。この部屋は、議員や職員のために設けられているもので、議員が議決などに際して大きな判断を迫られる際に心に落ち着ける場所として使われたり、大きな事故や災害などがあつた際に祈りをささげる場として使用されたりするという。ガイドの説明では、日本で起こった東北の震災やそれに続く原発の事故に際して、この場で祈りがささげられたとのことであつた。さらに、部屋には大きな十字架が設置されている一方、イスラム教徒のために、メッカの方向を示したラインも部屋のデザインに組み込まれていたのが印象的であつた。

学校団体の訪問も多く、学校に対しては、連邦議会が編集・発行した教員向けの教材や、児童・生徒向けの教材も用意しているとのことであつた。残念ながら今回の訪問では、これらの教材を見ることはできなかつた。

学校団体の訪問も多く、学校に対しては、連邦議会が編集・発行した教員向けの教材や、児童・生徒向けの教材も用意しているとのことであつた。残念ながら今回の訪問では、これらの教材を見ることはできなかつた。



壁に展示されたパネル。建物の歴史がわかる。



議事堂の模型の前でガイドからの説明を受ける

(久下 実／広島県立歴史博物館)

○ペルガモン博物館(ベルリン)

Pergamonmuseum

訪問日：2013年9月21日(土)

対応者：Thomas Kabs 氏(ガイド)

ペルガモン博物館は、国立ベルリン博物館(Staatliche Museen zu Berlin)に属し、通称博物館島に立地するひとつである。博物館島は、かつての東ベルリンに位置し、市内を流れるシュプレ一川の中洲の一画にある。ここには、旧博物館、新博物館、旧国立美術館、ポーデ博物館、ペルガモン博物館の5つの博物館・美術館があり、1999年ユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録された。5つの中で最も新しく設立されたのがペルガモン博物館である。

1930年に設立し、1939年より開館した。しかし第二次世界大戦の空襲の為、博物館は被害を受けた上、ペルガモンの大祭壇はソ連が戦利品として運び去った経緯を持つ。遺跡・美術品が旧東ドイツに返還され、「ペルガモン博物館」として再開館したのは1959年のことである。古代ローマ、オリエント美術を中心に、古代～近世の中東美術が展示される。「ペルガモンの大祭壇」、「バビロンのイシュタル門」、「ミレトスの市場の門」がハイライトの展示物である。「ペルガモン」とは小アジアの古代都市の名称である。

世界各国からの見学者に対応するため、複数言語の音声ガイド機が用意されている。当初の予定では、我々も日本語の音声ガイドを試し、そのガイド内容について議論をする計画であったが、実際は予定変更にて、一般見学者と同様の、解説員が案内を行うガイドツアーを体験した。

ガイドは、博物館設立の背景から始まり、「ペルガモンの大祭壇」、「ミレトスの市場の門」、「バビロンのイシュタル門」の3つの展示空間でそれぞれ、歴史、神話、当時の生活、建築様式についてひとつの物語のように語られた。

ガイド後の質疑応答では、ガイド法についての質疑に対し、「ガイド(解説員)が自由に客層にあわせて話を決めている。例えば小さな子供に対しては神話を中心に、大学生に対しては歴史建築について詳しく解説する。ガイドの中には、専門のテーマが決まっていて、その範囲で語る人もいる。」との回答を得た。



ペルガモンの大祭壇。多国籍の見学者の多くが、音声ガイドを利用しながら見学をしている様子が見える。

【参考 URL】 <http://www.smb.museum/museen-und-einrichtungen/pergamonmuseum/home>

(井内 麻友美／葛飾区郷土と天文の博物館)

付 録

平成25年度「青少年国際交流推進事業」実施に関する企画公募要領

1. 事業名 平成25年度「青少年国際交流推進事業」

2. 事業の趣旨

国内外の青少年指導者及び次代を担う青年リーダー、高校生の海外派遣・日本招へいを行い、内外の青少年の現状・課題点等についての意見交換や、青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流事業を実施する。

3. 委託事業の実施

下記「4. 委託事業の内容」の相手国側実施団体と連絡・調整し、青少年国際交流推進事業を実施する。

(1) 派遣

日本国内において、相手国に派遣する人員の募集・選考を行い、日本団の派遣を行う。

(2) 受入

相手国からの派遣団の受入れ、下記「4. 委託事業の内容」の趣旨・テーマ等に沿った適切なプログラムを作成し、実施する。

4. 委託事業の内容

(1) 日独青少年指導者セミナー

① A1・A2

I. 趣旨

相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築する。

II. テーマ

A1 テーマ「困難を抱える青少年の社会への移行」

※不登校や不就労(ニート)、引きこもり等困難を抱える青少年に対する、学校や社会への参画、職業への移行支援を学ぶ

A2 テーマ「青少年の保護、育成」

※児童虐待やネット依存等により、保護が必要な青少年の支援

III. 募集対象

A1・A2ともに上記テーマに携わる青少年教育指導者

IV. ドイツ国側実施団体

A1 ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関

A2 ベルリン日独センター

V. 実施期間及び人数

派遣 平成25年11月24日(日)日本発

～平成25年12月8日(日)日本着(平成25年12月7日(土)ドイツ発)

各9名

受入 15日間(発着日含む)上半期(予定)

各9名

VI. その他

事業受託団体は、文部科学省とドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省との公式協議にオブザーバーとして参加するとともに、公式協議に係る事務もあわせて実施すること。

②B2（ユースホステル分野）

I. 趣旨

相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築する。

II. テーマ

「持続可能な開発のための教育」

III. 募集対象

上記テーマに携わる青少年教育指導者

IV. ドイツ国側実施団体

ドイツユースホステル協会

V. 実施期間及び人数

派遣 15日間（発着日含む）11月（予定）
7名

受入 15日間（発着日含む）10月（予定）
7名

②B3（芸術分野）

I. 趣旨

相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築する。

II. テーマ

博物館における青少年教育

III. 募集対象

上記テーマに関係する青少年指導者

IV. ドイツ国側実施団体

連邦青少年文化教育連合会

V. 実施期間及び人数

派遣 15日間（発着日含む）11月（予定）
7名

受入 15日間（発着日含む）9月（予定）
7名

(2) 日独勤労青年交流事業 【略】

(3) 日独学生青年リーダー交流事業 【略】

(4) 日韓高校生交流事業 【略】

(5) 全事業共通

① 派遣事業においては、参加者事前研修を実施すること。

② 派遣事業においては、事業終了後に参加者へのアンケート調査を行い、そのまとめを報告書に記載すること。

- ③ 日本国内で発生する経費について計上することとし、ドイツ国内で発生する滞在費は計上しないこと。

例えば、派遣事業における経費は、ドイツに到着するまで及び日本国に到着してからの滞在費、並びに自国訪問団にかかる保険料等を計上すること。また、受入事業における経費は、相手国訪問団が日本国に到着後から出発するまでに発生する通訳に要する経費、交通費、宿泊費、食費、研修経費等を計上すること。

- ④ 不測の事態により、参加者数の増減や日程が変更される可能性がある。
- ⑤ 上記（１）～（３）の派遣・受入事業においては、相手国実施団体と緊密な連携体制を構築すること。
- ⑥ 上記（１）～（３）の受入事業においては、２都市（大都市・地方都市）を訪問すること。また、ホームステイの実施に努めること。
- ⑦ 事業実施に当たっては、スポーツ・青少年局青少年課及び参事官（青少年健全育成担当）委託事業事務処理要領、青少年国際交流推進事業委託要項及び青少年国際交流推進事業委託要領の定めに従って適切に処理すること。

5. 企画公募に参加する者に必要な資格に関する事項

- （１）予算決算及び会計令第70条の規定に該当しない者であること。なお、未成年者、被保佐人又は被補助人であって、契約の締結のために必要な同意を得ている者は、同条中、特別の理由がある場合に該当する。
- （２）支出負担行為担当官文部科学省スポーツ・青少年局長から取引停止の措置を受けている期間中の者でないこと。
- （３）委託要項（案）（別添）に掲げる委託先の要件を満たす者であること。

6. 企画提案書の提出方法等

（１）企画提案書の提出方法

- ① 用紙サイズをA4縦判、横書きとする。
- ② 提出方法は、E-mail、郵送、又は持参とすること。

○E-mail

- ・提案1事業につき送信1回で下記（３）のアドレス宛に送信する。
- ・送信メールの題名は、「青少年国際交流推進事業応募」とすること。
- ・添付ファイル名は提案事業名と提案者名とすること。
- ・提案書類は下記③で示すファイル形式で提出すること。

○郵送

- ・簡易書留、宅配便等で送付すること。
- ・封筒に「青少年国際交流推進事業」と朱書きのこと。
- ・提案書類は紙媒体で1部及び下記③で示す電子データで提出すること。

○持参

- ・受付時間は平日9時30分～17時（12時～13時を除く）とする。
- ・提案書類は紙媒体で1部及び下記③で示す電子データで提出すること。

③その他

- ・企画提案書を提出する際には、組織の代表者名で提出すること。
- ・企画提案書に関する事務連絡先（照会先）を明記すること。
- ・企画提案書は、日本語及び日本国通貨で記入すること。
- ・ファイルの形式は、一太郎、マイクロソフトワード、マイクロソフトエクセル、マイクロソフトパワーポイント、PDF及びテキスト形式とする。
- ・郵送（又は持参）による電子データは、FD、CD、又はMOにて提出すること。

(2) 提出書類

①企画提案書(別紙 申請様式)

②その他必要と思われる資料

(3) 企画提案書の提出場所及び問い合わせ先

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

文部科学省スポーツ・青少年局参事官(青少年健全育成担当)付国際交流係

TEL 03-5253-4111(代)(内線3487)

FAX 03-6734-3795

E-mail sponseisy@mext.go.jp

(4) 企画提案書の提出期限

平成25年3月14日(木曜日) 17時必着

(5) その他

企画提案書等の作成費用については、選定結果に拘わらず企画提案者の負担とする。
また、提出された企画提案書等については返却しない。

7. 事業規模(予算)及び採択数

事業規模: 総額49,000千円程度を予定。

採択数: 6件を採択予定。

8. 選定方法等

(1) 選定方法

事業企画評価委員会において、提出された提案書類にて書類選考を実施する。

(2) 審査要領

別途定めた審査要領(別添)のとおり。

(3) 選定結果の通知

選定終了後、速やかにすべての提案者に選定結果を通知する。

9. 契約締結

選定の結果、契約予定者と企画提案書を基に契約条件を調整するものとする。なお、契約金額については事業計画書の内容を勘案して決定するものとするので、企画提案者の提示する金額と必ずしも一致するものではない。また、契約条件等が合致しない場合には契約締結を行わない場合がある。

10. スケジュール(予定)

①公募締切: 平成25年3月14日(木曜日) 17時

②書類審査: 平成25年3月中旬~下旬

③選定: 平成25年3月下旬

④事業計画書の提出及び契約締結: 平成25年4月以降

⑤契約期間: 契約締結日から平成26年3月10日まで

11. 誓約書の提出等

(1) 本企画競争に参加を希望する者は、企画提案書の提出時に、支出負担行為担当官が別に指定する暴力団等に該当しない旨の誓約書を提出しなければならない。

(2) 前項の誓約書を提出せず、又は虚偽の誓約をし、若しくは誓約書に反することとなったときは、当該者の企画提案書を無効とするものとする。

(3) 前2項は、支出負担行為担当官が誓約書の提出を要しないと認める場合は適用しない。

平成25年度日独青少年指導者セミナー 派遣事業

「博物館における青少年教育」に係るドイツ派遣事業参加者 募集要項

公益財団法人日本博物館協会
(文部科学省スポーツ・青少年局委託事業)

1. 趣旨

博物館の青少年指導者の相互交流や研究協議、意見交換等を通じて、青少年指導者の資質の向上と青少年育成の発展を図るとともに、両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築します。あわせて、共同体験を伴う異文化交流や意見交換等を通じて、広い視野とともに、異文化に対する理解や国際性を養います。

2. 派遣事業実施概要

- (1) 研修テーマ ドイツの博物館における青少年教育
- (2) 内 容 ベルリン及びラインラント地方（ケルン、デュッセルドルフ、ドルトムント、ボン他）の博物館等を見学し、教育担当者との交流や意見交換を行います。
- (3) 日 程
- | | | |
|-------|--------------------------|------|
| 事前研修会 | 平成25年8月26日（月）午後～27日（火）午前 | 2日間 |
| | 会場は東京（霞が関周辺）を予定 | |
| 派遣期間 | 平成25年9月10日（火）～9月23日（月） | 14日間 |
| | （行程）9/10 成田発、ケルン着 | |
| | 9/11～9/15 ケルン滞在 | |
| | （ボン、デュッセルドルフへの訪問を含む） | |
| | 9/16 ドルトムント泊 | |
| | 9/17 シェヴェリーン泊 | |
| | 9/18～9/21 ベルリン滞在 | |
| | 9/22 ベルリン発 | |
| | 9/23 成田着 | |

詳細についてはドイツ連邦博物館教育連盟(BVMP)にて調整中。

- (4) 募集人数 6名
- (5) その他 派遣期間終了後、研修レポートを提出していただきます。

3. 応募資格

- (1) 博物館に勤務し、青少年教育に携わる方
- (2) 派遣事業（事前研修会を含む）に全期間参加できる方
- (3) 心身の健康状態が良好で協調性に富み、研修計画に従って規律ある団体行動ができる方（宿泊先は原則として相部屋となります。行程には1泊のホームステイが含まれる予定です。）

4. 諸経費（参加者の自己負担をお願いするもの）

- 参加金 約15万円（ドイツへの渡航費の半額相当分を予定）
- パスポート取得経費（有効なパスポートをお持ちでない方のみ）
- 事前研修会出席に係る交通費や宿泊費等
- 成田空港までの往復交通費、ドイツの機関・団体等への資料・お土産代、ドイツ国内でのプログラム中に提供される食事以外の飲食費、自主研修における交通費・見学費等は、別途自己負担となります。

※ドイツ国内でのプログラムにおける交通費、宿泊費、食費（飲み物を除く）、見学費等はドイツ連邦政府が負担します。

5. 応募方法

参加申込書（別紙1）及び館長による推薦書（別紙2）を、平成25年6月28日（金）までに公益財団法人日本博物館協会にご提出ください。

6. 参加決定について

提出された書類を基に、事業検討委員会において選考を行います。結果については、平成25年7月16日（火）までにご本人に連絡いたします。

7. その他

・ 派遣者について

日独青少年指導者セミナーは文部科学省スポーツ・青少年局が公益財団法人日本博物館協会に委託して行う国の事業です。派遣への参加が決まった方には、公益財団法人日本博物館協会より文書にて依頼をさせていただきますが、国からの派遣依頼と同等の扱いになります。

・ 参加金のお支払いについて

ドイツへの渡航費が決定した段階で、参加者にご連絡いたしますので、平成25年8月30日（金）までに、公益財団法人日本博物館協会が指定する銀行口座にお振り込みいただきます。

・ 参加決定後の取り消しについて

本人の都合により事業への参加を取り消す場合には、辞退理由書を提出いただくとともに、所定の取消料をお支払いいただきます。また、ドイツ研修の途中で帰国する必要が生じた場合は、自費にて帰国していただきます。なお、参加金は返金いたしません。

問い合わせ・書類提出先

公益財団法人日本博物館協会 日独青少年指導者セミナー担当
〒100-8925 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館
電話 03-3591-7190 / FAX 03-3591-7170
Eメール webmaster@j-muse.or.jp

平成25年度 文部科学省スポーツ・青少年局委託事業
日独青少年指導者セミナー（芸術分野）
「博物館における青少年教育」に関する日独交流事業報告書 2013

発行 平成26年3月

編集 公益財団法人 日本博物館協会

〒100-8925 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館

TEL 03-3591-7190 / FAX 03-3591-7170

印刷 タナカ印刷株式会社